

「生・労働・運動」パンフレット No.2

平井玄 「背後の未来」を「不可視」の未来へかけわたす

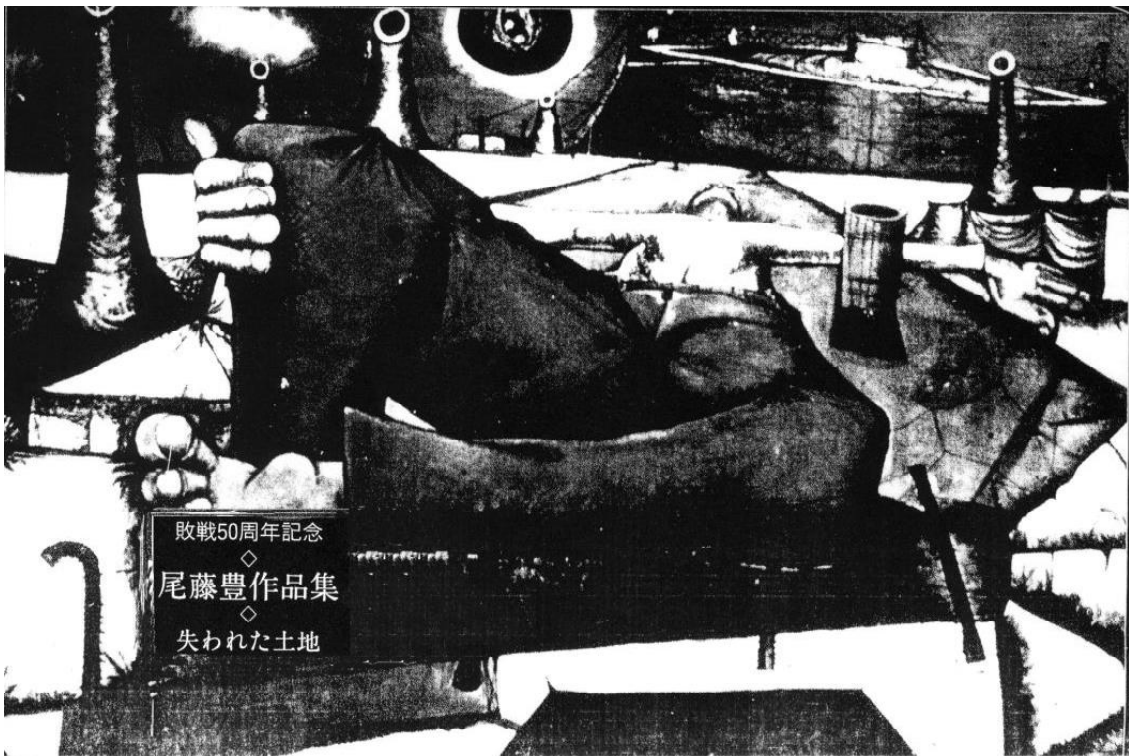
——自註:「ミッキーマウスのプロレタリア宣言」

埴野謙二 〈背後〉の未来が現在と出会うとき

——浦島太郎物語

井田久翁 それは喫茶店から始まった

——私の1968年～1973年



生・労働・運動 ネット

目次

はじめに	1
平井玄 「背後の未来」を「不可視」の未来へかけわたす	4
——自註:「ミッキーマウスのプロレタリア宣言」	
埴野謙二 〈背後〉の未来が現在と出会うとき	38
——浦島太郎物語	
井田久翁 それは喫茶店から始まった	78
——私の1968年～1973年	

はじめに

——パンフレットNo.2の発刊にあたって

●富山の私たちの運動の長きにわたる沈滞を打ち破ったのは、ある一つの「妄想」だった。

私たちのグループのあるメンバーが、07年2月のある日の新聞紙上の「東京マラソン首都圏大封鎖 3万人快走」の見出しを、「お『まけ』組大行進 首都圏大封鎖 3万人暴走」と「読み違え」たことをきっかけとして、『もうたくさんだ！』大行進を計画した。同年4月末の連合のメーデー当日、「もうたくさんだ！自己責任論」など、それぞれがもうがまんできないと思うことをスローガンとして叫びながら、富山市内の目抜き通りで、30人余りの「大行進」を行った。その後、「大行進」を一緒に行った障害者グループの人たちと共に、「生の保障研究団」をスタートさせた。

07年の春からは、自己責任論の「学び捨て」を図り、「反ネオリベ的遠近法」の獲得を目指すための自由な討論や学習の場として、「アンラーニングプロジェクト」を企画し、〈68年〉から現在までの運動史を捉え返すことを試みてきた。08年度「アンラーニングプロジェクト」では、「資本主義を見限る」をテーマとして、現在のネオリベ・グローバル経済に対する世界規模での抵抗・反撃がどのように現れているかを探った。また、昨年洞爺湖G8サミットに対する対抗アクションの中で、今までにない運動間の横断的な結合や新しい運動のスタイルが、この国でどのように生み出されようとしているかに注目してきた。

●昨年08年は、富山を発祥の地とする米騒動から、ちょうど90年目に当たる。そのことの運動史的な意味を考えあいたいという思いから、アンラーニングの特別企画として、昨年11月、『米騒動』から90年——私たちは『米騒動』から何を受け取るのか」という集まりを開催し、東京から平井玄さんと、フリーター全般労組の山口素明さん話し手に迎えた。それを受けて、08年度のプログラムの後半では、「現代の米騒動」と自称／他称されている、「フリーター」の労働組合や反貧困の運動から、「生」の保障を集团的に要求する、いわば、「騒動による団体交渉」の現在の再生の可能性を探った。

昨年はまた、洞爺湖G8サミットに対する対抗アクションをこの富山でも横断的に生み出すことを、自分たちの運動にとっての一つの「画期」にすることに向けて、私たちは「富山平和センター」との共同で、「G8を問う！共同行動・富山」を発足させ、共同企画として、「G8を問う！連続学習会・講演会」を行った。サミット間近の7月初頭には、労組の動員が中心とはいえ、100人余りの参加者と共に、富山の路上で、「もうたくさんだ！G8のやりたい放題」をスローガンに掲げて、G8サミットに対する異議申し立てを表現するための街頭アピール・デモを行った。9月には、多重債務問題に取り組んでいる司法書士の人たちのグループと共に、「反貧困全国キャラバン08と結びあう」を主催し、それをきっかけに、「生の保障ネットワーク」を結成した。

また、私たちは、08年初春から、「困民丸」というスタイルで、「ホームレス」や「派遣切り」の人たちに向けて、生活保護申請の同行、生活保護をめぐる行政交渉、住居確保の支援、炊き出しといった活動を行ってきた。

この年末・年始の東京での「年越し派遣村」の営みはマスコミで大きく取り上げられた。規模としてはささやかなものではあったが、それと軌を一にして、富山の私たちも、富山の「ハローワーク」に食い詰めた人々が大挙してそこを占拠し、寄せられた食材で食事作りも始まるといった「妄想」に促されて、この年末年始に「ハローワーク」の敷地内で炊き出しを実行した。

今、この国では、多くの人たちが、「ホームレス」／「派遣切り」などや、正規雇用労働にも及ぶ労働の「過酷化」や雇用の「劣化」・「縮減」・・・といった「生の保障」の破壊・剥奪の一つながりの「連続性」の中に生きることを強いられている。しかし、そうであれば、なおさら、人間の「生」を保障しないこの社会のあり方に対して、「このままでは生きていけない！」・「こんな世の中はもうたくさんだ！」という〈叫び〉をつきつけたい。また、自分と同じく、この社会への疑問や憤りを訴える者として、自分の「隣り」にいる人たちと出会い、共に「声」をあげることで、強いられた「生の保障」の破壊・剥奪の「連続性」ではなく、「保障されざる者」同士としての対抗的な結合をつくりだしていきたい。そのような思いから、少し前であれば、一緒に何かをするなどとは思ってもみなかった組織との共同行動を行うことも含めて、あえて、「他人の禰で相撲を取る」ことも辞さずに、この2年余り、私たちは、人々の新たな連結を生み出すことに挑戦し続けてきた。

●一握りの巨大多国籍企業の利潤追求のために、全世界的に人間の「生」の保障の破壊／劣化を暴力的に強行してきたネオリベ・グローバル資本主義自体が、今、暴走のあげくに「自壊」しつつある。

このような状況の中で、むしろ、現在の資本主義によって「生」の困難を強えられる私たちの側が「資本主義を見限る」ということが、現在、かつてないような実感とアクチュアリティを獲得しつつあるのではないだろうか。ネオリベ・グローバル経済の「自壊」のしわよせが私たちの「生」の破綻として転嫁されることを拒否し、人間の「生」を保障しないこの資本主義を私たちがどのように「具体的に見限る」のか。そのためにも、市場経済の外での「生」の創造のための仕組みを、私たちがどのように自らの手で生み出しうるのか。——それらの問いが、今、この国を生きる私たちの大きな課題としてせりあがりつつあるように思う。そのような意味で、この2年余り、いわば、「他人の禰で相撲を取る」ことも辞さずに、全国各地での運動の水位に見合った動きをこの富山で創り出すことをめざしてきたことから、更に、次のステップを踏み出すべき時期が来ているように感じている。

●このパンフレットには、渋谷望・小倉利丸さんを招いての「アンラーニングプロジェクト」の第Ⅱ期の試みに続いて、同じく「第Ⅱ期」で行った日本の「社会運動史」への二つのアプローチの試みを収録した。一つには、平井玄さんを招いてのもの（08年2月）、いま一つは、私たちのメンバーの一人である埴野謙二によるものである。なお、後者は、「アンラーニング・ニューズレター」に掲載した「アンラーニ

ング」での埴野謙二の話の概要と、話の後半部の4分の1とで構成したものである。それらに併せて、埴野謙二の話の資料の「年表」も収録した。

『生』の新しい創造のための『実験』や、「今、ここでの自己解放の『試み』」としてあった〈68年〉の経験——街頭でのアクションや相互扶助の実践によって新たな「コモン」の創造に向かう、現在の「保障されざる者」たちの運動——米価の高騰に対して、老若男女の「有象無象」たちが集団で米穀店の店頭を占拠し、米の廉売を要求するという「騒動による団体交渉」を通じて困民による「自主的米価設定」を行った90年前の「米騒動」——このパンフレットの中の話の大きなテーマであるこれら三つを結びつける連続線上に、私たちが資本主義をどのように具体的に見限り、市場経済の外での「生」の創造のための仕組みを自らの手で生み出しうるのかという課題に対する、〈鍵〉や手がかりがあるのではないかと感じている。

また加えて、井田久翁さんから、この富山での〈68年〉をめぐる手記を特別に寄稿していただいた。東大や日大など、大学闘争が大きく高揚し、全国的にマスコミで取り上げられたような大学での〈68年〉については、当時の雑誌に記事が載ったり、単行本としてまとめられたりしているものがあるが、富山一富山大学をめぐる〈68年〉に関わるものは他には無く、限定された視角からのものであるが、貴重なものである。

私たちのような小さな運動グループが、「資本主義を具体的に見限る」ことを呼びかけること自体が、「妄想」の最たるものかもしれないが、このパンフレットが、今のようにない社会や「生」を創り出すことをこの国の中で目指す人たちの運動的想像力や「妄想」を養う一助となれば、幸いである。

なお、最後に、多忙な中、「アンラーニング」での話の原稿に丁寧な加筆・訂正をいただいた平井玄さんと、貴重な手記を寄稿いただいた井田久翁さんに、改めてお礼を申し上げます。

平井玄

アンラーニングプロジェクト第Ⅱ期

背後の未来」を「不可視」の未来へかけわたす

——自註:「ミッキーマウスのプロレタリア宣言」

主催者から——平井玄さんを富山に迎えるに当たって

今日は、平井玄さんを富山にお迎えするという、私の二十数年来の念願がかなったことをとてもうれしく思っていますが、平井さんのお話の前に、この場を企画した者として少しあいさつめいたこととお話したいと思います。

1986年に、平井さんは社会評論社から「路上のマテリアリズム」という本を出しています。その中では、富山の私たちが、小倉利丸さんを通じて見聞きしていたヨーロッパの運動、とりわけイタリアのアウトノミア運動といったものを踏まえながら、平井さんが70年代をどのように生きてきたのかについて書かれています。また、そこには、東京の寄せ場の山谷を中心に、いろんな音楽活動家を招いて日雇い労働者の人たちの前で演奏活動を行うといった、80年代に入ってから平井さんたちの試みも紹介されていますが、今読んでも大変斬新な内容の本です。「インパクション」という雑誌がありますが、それが「インパクト」という名前だった頃、私は、そこに載っていた平井さんの文章を熱心に読んでいました。当時、平井さんのお書きになったものを読みながら、いつかこれを書いている人と出会うことができるようになりたいということ、強く思っていました。

それから20数年たって、平井さんによくお会いできるだけの中身を私たちがどこまで蓄積してきたのかというと、必ずしもそうとばかりは言えない心もとなさがあるのですが、その一方で、平井さんをこうしてお迎えするという、自分にとっては長年の夢だったことがようやく実現できたという思いがあります。いずれにしろ、以前、私が舌足らずに「背後の未来」という大仰なタイトルで話そうとした、その「背後の未来」を生きてきた人とでも言いますか、60年代の終わりの後の時代を、ずっと一貫して「背後の未来」と、その各時点における現在とを出会わせることを生きてきた存在として、私は平井さんという人を認識していました。ようやく少しずつ、今こそ平井さんの出番だという時代になりつつあると思います。

最近、平井さんが書かれた「ミッキーマウスのプロレタリア宣言」(太田出版)という本は、平井さん自身が現在の「フリーター」の前身というか、かなり昔からそういう位置をとってきていて、そうしたご自身の70年代からの生き様が持っている意味というのを考え抜いてきた軌跡から、生み出されたものではないかと思います。まさに今、「フリーター」や、ワーキングプアという存在が普遍的なものになっている



という状況の中で、平井さんがずっと考えてこられたことが、私たちにとってもきわめてリアルなものになろうとしているように思います。

私は70年代から現代まで、自分が生きているその時点で自分が何をすべきかを考えるような時には、平井さんが何を考えているのかを気にしながら、それに照らして自分の考えを導いてきたということがあります。ぜひ今後、富山の私たちも、平井さんが呼びかけているようなことを受け止めていくことができる力を、更に蓄積するようにしていきたいと思います。

そんなことで、今日は雪や風の影響で東京からの列車が遅れたということもあり、平井さんには長時間かけて富山にお出でいただいて、お話ししていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

◇〈68年〉世代の「その後」にこそ目を向けたい

平井さんには、前もってこんなことを話してほしいという質問をいくつか用意しているのですが、今日はそれに沿って話していただけたらと思っています。

今日ぜひ、平井さんに質問したいと思っていることの一つなのですが、今年でちょうど40年ということもあるのですが、この近年、様々な書物や雑誌の特集といった形で、〈68年〉論の隆起が見られます。（*0）それは「玉石混淆」と言いますか、もう一回自分たちがこれから何をすべきかを考えさせるようなものもあれば、単なる思い出話に近いようなものもあります。そのように、「玉」もあれば、「石」もあるそういった現象について、平井さんとしては、どのようにお考えですか。（*太字部分は当日の進行からの質問・発言。なお、平井さんの話及び、進行からの質問・発言中の「今年」は全て08年のことを指す）

〈68年〉論を脱臼する

今、ご紹介にあずかりました平井玄です。今日はよろしくお願いいたします。

〈68年〉から、今年でちょうど40年目なわけです。出版業界というのは非常に気まぐれなもので、とにかく40年目だからということで、それを機に本を作ろうという動きがあちこちであります。すでに何年前からそういう動きは始まっています。私のような者にも特にその頃の「新宿」について書いて欲しいという依頼があります。去年から早く書けとせき立てられているんですが、どうも書く気にならないんです。それはなぜかという、〈68年〉を語るある種の文脈みたいなものがすでに刷り込まれていて、これは世界的にもそうではないかと思うんですけれども、ひとつの物語というか、ああまたか、という気になってしまうところがあります。これはたぶん、今の30代や40代ぐらいの人たちがとりわけ強く感じていることじゃないかと思います。要するに「親父の昔語り」なんですね。「俺たちは昔、こんなすごいことをやったんだぞ」というような。

私は1952年の生まれです。故郷である栃木の師団に徴兵された親父は、ソ満国境線に送られた

関東軍の兵士でした。まあ単なる一兵卒ですが、傀儡国家満州がソ連と接する牡丹江近くの国境警備に就き、敗戦直前にはそこから更に、沖縄の離島の防衛隊に送り込まれました。私の親父は、たまたま、本隊から分かれた部隊にいて生還することができたので、私はここにこうして存在しているわけですが、これが沖縄本島に行った師団本隊だったら、おそらく私という人間はここにはいないんじゃないかと思います。

父は嬉々として戦争中の武勇伝を語るような人間ではなかったと思います。それでもやはり、そういう話を聞かされてきたわけです。決して「つまらない」わけではないんですが、やはりひとつのパターンがある。その「空疎な面白さ」がなにか寒々しい。団塊の世代の子供たちは、もう20代後半になっているのではないかと思うんですが、その人たちは、〈68年〉世代の「昔語り」や「武勇伝」をそんなふうに聞かされてきたのではではないかと思います。

以前、この「アンラーニングプロジェクト」の学習会で私の友人の渋谷望さんも話したと聞いていますが、70年代初頭に生まれた彼やもう少し若い世代が、今ようやく元気に台頭してきているという感じが、私などが関わっている運動の周辺であります。彼ら／彼女らは、〈68年〉世代の「昔語り」に飽き飽きしているのではないのでしょうか。実は私自身だって、そうなんです。

〈68年〉については、書きたい人は好き勝手に書いてくれていい。しかし、私自身としては、「親父の昔語り」のような話はしたくない。そのうえ新宿という、それこそつてりと「てんこ盛り」になった当時のイメージというのが付着している。どうにも書けそうにありません。例えば、テレビで「懐かしのフォークソング全集」や、「60年代のポピュラー音楽全集」といったCDセットの通販コマーシャルが流れるような時に、占拠された東大の安田講堂に機動隊が放水し、催涙弾が撃ち込まれるといった空撮映像や、新宿西口地下広場のフォーク集会の映像が、意味もなく流れるわけです。あるいは〈68年〉のことは、せいぜい警察高官のもったいぶった裏話が映像化されるくらいで、本当に起きたことは隠蔽されている。長い時間の中で考えると、いったいどういう闘いだったのか——緊張した議論の場が溶解しているように思います。あまりにもだらしないイメージが付着し過ぎている。

例えばつい最近、東大闘争の時にバリケードの内側から撮影された写真を初めて公開した、「東大全共闘1968－1969」（新潮社）という写真集が出版されました。これは当時、私も「朝日ジャーナル」誌で一部見たことがあるものだと思うんですが、ただ一人内部の撮影を許可された渡辺眸（ひとみ）さんという女性の写真家が撮ったものでした。ああそういう人だったのかと初めて知ったのですが、その本の中に東大全共闘の議長だった山本義隆が書いた文章も収録されています。その他にも、安田講堂の防衛隊長だった島泰三による「安田講堂1968－1969」という本も、05年に中公新書から出ています。

山本義隆も島泰三も、二人とも全共闘運動の後、それぞれ意志を曲げない生き方を貫いてきたことは間違いないと思います。今日、この場に来ている人たちの中にもいらっしゃるのかもしれませんが、全共闘世代の中には、全国の反公害運動や、反原発運動、反基地闘争などの現場で生き抜き、様々な裁判闘争に関わったり、最近では闇金融の被害にあった人たちの支援活動をしているような人たちが、今でも数多くいます。私としては、大学人が輸入思想の後知恵を貼り付けているような本と違って、当事者自身が長い時間の中で刻み込んだ言葉があるはずだと期待してこの2冊の本を読んだの

ですが、残念ながらとても落胆しました。それは彼らが不誠実だということではありません。東大全共闘が砕けたあの「69年1月」で、彼らの時間が凍りついているのです。

私は当時まだ高校1年生だったのですが、私の通っていた高校は東大にも100人くらい入学しているような進学校でした。ところが、おおかたのクラスメートたちと違って、東大入試が中止されるというのは私たちにとって非常にうれしいことだったんですね。「これでもう受験勉強をしなくていい。ざまあ見やがれ」という気持ちでした。自分にとってこれこそが「解放」だったわけです。国家エリート養成機関としての「東京帝国大学」の犯罪性といったことも当然意識していましたが、とにかく受験勉強の重圧からの解放感は、当時の私たちにとってすばらしいことだったんですね。「この人たちの運動が示しているのは、別の生き方をしてもいいというメッセージなんだ」。東大全共闘の学生たちが目指していたのと少し違う効果を当時の高校生たちに及ぼしたわけです。そういう意味では、山本義隆という人の存在は、優秀な科学史の研究者であるということよりも、まず自分たちをうっとうしい受験勉強から解放してくれた「恩人」なのです。

そういう意味でも、秘かな期待をもって彼らの本を読んだのですが、そこには本当に69年当時と同じことが書かれている。二人ともそうでした。その頃の問題意識を持続させているということなのでしょうけれども、しかし、彼らはその後の40年間という時間を生きているわけですよ。彼らにしても、働いてどうにか金を稼いで飯を食って、結婚して子供を生み、子供に反発されたりして生きてきたわけで、一体その時間はどこへ行ってしまったのだろうかと思わざるをえない。

かつて60年代に吉本隆明が、長年にわたり日本共産党の指導者だった宮本顕治について、「非転向で『獄中18年』を生き延び、敗戦直後に監獄から出てきた時に、戦前と全く同じことを主張する。その間に日本民衆に何が起きていたのか、分かっているのか」という批判をしています。私は吉本隆明は苦手なのですが、ほぼそれに近いような、やるせない思いを二人の書いたものを読んで感じていました。

二人とも、前衛党のリーダーになったわけではないので、個人としての潔さは紛れありません。しかし、山本義隆は、駿台予備校の非常勤講師として働きながら生きてきたわけですが、書いたものには、そういったことの刻印はほとんど感じられない。おそらく、島泰三という人もとても生きづらい思いをしてきたでしょう。その体験が、69年を生きた彼自身の思想にどう肉付けされたのか伝わってこない。私はそのことにとっても失望しました。

私は、そういう「正しい全共闘」になりたくない。当時のことについてはなかなか書けないということがあります。むしろこだわっているのは、68年前後に高校生だったような全共闘のすそ野の人たちで、「もう受験勉強をしなくもていいんだ」「サラリーマンにならなくていいんだ」という解放感を味わった人たちが今、どうしているのかということです。友人たちの中には、エリートとしての生き方に戻った人たちもいます。例えば、自民党議員の塩崎恭久は高校の1年先輩で全共闘の仲間だったのですが、あろうことか、あの極右安倍政権の官房長官になってしまいました。そういう人たちはもうどうでもいい。むしろ、あちこちの全共闘運動の末端にいた連中がその後、どうやって生きてきたのかということです。

私自身もそういう者の一人です。高校の運動なんて大学の4年間ほどの持続性もないし、高校生というのは社会的にも一人前の存在とみなされないわけです。僕らはビル掃除をしましたけれど、アル

バイトをして金を稼ぐことですら難しい。運動基盤は脆弱です。退学しても生活力がない。高校中退というのは、結局、中卒なんですよ。処分されても、大学生だったら就職の際に「大学中退」と履歴書に書ける。なんとか卒業できれば大卒になりますが、この大卒と中卒の違いというのは大変大きなものがある。私の知り合いの何人もが結局中卒者として、その後の時代を生きてきたわけです。私の場合は、むしろ早く出て行けという感じで追い出されてしまったんですが、その後に大学を抹籍されるという生き方をしてきました。つまり高卒です。（*1）

全共闘運動が盛んだった当時、日大の学生たちが「東大の連中は研究室からデモに行くけれども、俺たちは雀荘からデモに行く」「結婚して子どもを育てることまで含んで闘争なんだ」と言っていました。党派の内ゲバや、連合赤軍事件で全共闘が終わったというのは、作られたストーリーです。こういう日常感覚は終わってはいない。たくさんの人たちの体の中に解放感として残り、その後の生き方にも大きく影響しているんですね。私はそういう人たちに何人も会ってきました。

砂のような全共闘大衆たちの「解放感」

戦前の共産党員だった中野重治は、逮捕されて獄中で「転向」して、福井の田舎に帰るという自分の体験をもとにして「村の家」という小説を書いています。その小説の中で彼は、「お前のやっていることや、お前の考え方はよく分からないが、筆を捨てるべきではないのか」と、農民である父親に叱責される主人公を描く。それに対して「やはり書いていきたい」と答えるところから、彼は再出発したわけです。ところが私の場合は、大学を中退して帰ったところは、ついこの間まで運動が渦巻いていた町の真ん中にある実家でした。田舎の農家ではなく、東京の中心部に帰るといって非常に奇妙な「帰還」なんです。

しかし、そこで私は実に様々な人に出会う。文化大革命期の中国で行われた「下放」では、膨大な数の中学生や高校生、大学生の紅衛兵たちが農村への移動を強いられ、そこで労働させられることで大きな世代の空白体験が生じました。60年代末のこの国の学生たちも、ある意味での「下放」というか、自発的にせよ余儀なくされたにせよ、大学から街頭に大量に散っていったわけです。その中の一人に、こんな人がいました。

70年代の半ばに私が実家の洗濯屋で働いていた頃、新宿三丁目の伊勢丹本店斜め向かい辺りに「京王名画座」という、今はもうなくなってしまった映画館がありました。これは当時、新宿にたくさんあった個性的な映画館の中の一つですけれども、私鉄の京王電鉄が経営していたものです。その映画館の2階の入口のすぐ横に、「モンブラン」という喫茶店がありました。洗濯屋の得意先の一つでしたが、そこに私は業者として週2、3回は出入りしていました。親父がバイクで配送途中の交通事故で半身不随になってしまったので、たしか21歳だったかな、急ぎよ私が代わって、本当は経営者としてしっかりやらなくちゃいけないんだけど、あまり気乗りがしないまま洗濯屋を始めていました。その喫茶店にも週に何回か、洗濯物を届けに行って集配してくるという、ご用聞きのようなことをしていました。

70年代中頃のまだ新宿の街が元気のいい時代でした。その店も賑わっていたのですが、コックの

白衣やウエイトレスやボーイの制服を配送しに厨房の中に入っていくことになるので、自然とそこで働いている人たちとも顔見知りになる。その中の一人で、長髪でフロア・チーフをしている、雰囲気的に自分より少し上の世代のように見える人と仲良くなって、よく話をしました。どこの大学の出身か分からないのですが、彼は「自分にとって、60年代終わりの学生時代は面白かった」ということを、さらりと言うんですね。私は、出入りのクリーニング業者としてそこに行っているわけで、そばに京王から来た店長もいるので、露骨にそういう運動的な話をしてはまずいと思ったので、「あの頃は大変でしたよね。僕も高校生の頃にいろいろとありましたよ」といったあいまいな言い方をする。警戒してお茶を濁そうとしました。すると彼は、「いや、俺たちのバリケードは最高に面白かったよ」と、はっきり言うわけです。その人は、厨房やフロアでマネージャーとして動いていましたが、たぶん、京王電鉄系列の会社がやっている映画館の、さらに傍系の喫茶店に就職したんじゃないかと思うのです。東大や京大といった大学ではない、どこかの私大で全共闘運動を経験した人だと思います。

彼の言葉を聞いて私は、「あの経験というのは、こういう形でこういう人たちの中で生きているんだ」とじわっと感銘を受けました。例えばそれは、戦争体験を語る父親たちが、人を殺してきたことや、従軍慰安婦たちについては一切語らないで昔語りをしてしまうのとは、またちょっと違う雰囲気があった。「解放」としての〈68年〉がこの人の中で生きているんだな、ということ強く感じました。彼とはほんの一、二年のつきあいでしたけれども、私は何人もそういう人たちに会ってきました。たぶん、全共闘運動末端の大衆活動家層には、そのように生きてきた有名な活動家でも何でもないようないろんな人たちが、たくさんいたはずですよ。

当時は、今のように若者の半数が大学に行くような時代ではなく、たぶん60年代終わりでも、進学するのは高校生全体の3割に届かなかったでしょう。60年代初めの安保闘争の頃は、それが若者全体の1割弱ぐらいですので、大学生というのはまだ本当にエリートだった。それでも10年間で3倍になる。これが60年と70年との違いになって表れた。急激に大衆化する中で、運動の末端に膨大な数の大衆層がいたんです。そういう流砂のように動いた連中の生き方については全然語られていません。

そういう人たちの多くは、赤軍派のように武装闘争に踏み出すだけの大胆さがなかったり、海外でパレスチナ民衆の闘争に参加するほどの跳躍力もなかったのかもしれない。私もそうです。特に先鋭的でもなんでもなかったのですが、それでも、あの解放感をその後の人生で抱き続けながら、発展させようとして生きてきた人はたくさんいます。そこから語らずに、〈68年〉から40年過ぎたからといって、それがどうしたんだと思います。そこを抜きにして、その時代のことを考えてもなんの意味もないと思います。

◇「ミッキーマウスのプロレタリア宣言」への「自作自註」

今のような〈68年〉論はあまりないのではないかと思います。平井さんのお書きになった「ミッキーマウスのプロレタリア宣言」の中にも、「未来の中にある過去」という表現があります。私たち自身も「背後の未来」として、〈68年〉を受け止めたいという思いがあるのですが、「ミッキーマウスのプロレタリア宣

言」という本について、私たちとしては、単なるノスタルジーではなく、まさにそこから現在にどう打って出るのかという、「戦闘宣言」というとちょっと大げさかもしれませんが、そのようなものとして受け取っています。そのような私たちの受け取り方について、著者である平井さんはどのように思っているのかということや、その本についての「自作自註」とでもいうようなことを、話していただけたらと思うのですが。

場末の印刷工場から「労働」を問う

1970年代の京都大学周辺というのは、当時の日本で唯一60年代風の強力な学生運動が残っていたところで、そのころ学生だった人たちは、別の生態系を育んだ「ガラパゴス島」だと言っていました。エリート大学そのものなんだけれども、「西部講堂」という古い建物を占拠して、外部の人たちを含めた自主管理組織が芝居やコンサートを続ける。今言ったような「解放感」が生きていたわけです。その京大の運動の中心的な担い手だった人たちの一人に、市田良彦さんという人がいます。彼はドゥルーズやネグリといった現代思想を専門としているのですが、その彼が教えてくれたことですが、「日本でこういうことが起きている」ということで「フリーター」についての特集が今年(08年)になってフランスやドイツの雑誌で組まれたそうです。

つまり、「フジヤマ」や「ゲイシャ」、「マンガ」といった世界的に知られた日本語がいくつかありますが、今やその一つとして、「フリーター」という日本語がどうやら世界的に流通しつつあるらしい。単に非正規労働者層や不安定雇用者層ということならば、世界中で増大しつつあるわけで、各国でもっと正確な言い方がある。しかし今の日本のように、移民ではなく、わざわざ社会の中に若年の不安定雇用労働者層を政策的に作り出しておいて、言説状況をコントロールしながら、何の生活保障もなく企業に都合の良い形で常にキープしておくというのは、世界的に見ても例のないことなのです。そのような状況が、戦後ずっとほぼ経済活動のみで世界的に知られている日本という国で生じていることが、フランスやドイツなどでは大きな驚きをもって受け止められている。私たちが思っているよりヨーロッパで大きな話題になっているようです。そのように、実は「フリーター」現象というのは世界的に見ても考えるに値することなのですが、何よりも私自身が洗濯屋を辞めて以来、ずっと前からそういう生き方をしてきました。

大日本印刷という国内で一番大きな印刷会社の商業印刷部門の古い工場が、新宿区の北の外れにある牛込榎町にあります。私は、その中で工員用の青い制服を着せられて、刷り上げる途中の印刷物を次々にチェックしていく内部校正という仕事に、30代から40代にかけて9年間ほど携わっていました。現在の自分にとっては、その時の体験が非常に大きなこととしてあります。

「校正」の仕事というと、何人もの文学者たちが認められる前の食えない時期に手を染めていたという逸話があって、ある程度の文字の教養がある人がしているような、なにやら知的な職業といったイメージがあるかもしれません。ところが、実際に印刷工場の中で行われる校正というのは、文字が間違っているとか、文章として変だとかいうことはどうでもいいことなんです。発注元の責任範囲で、印刷会社の責任外なら直さない。そこでの印刷物は、家具やデパートのカタログに、スーパーや不動産屋のチ

ラシ、宗教団体の機関誌、それから保険の約款や銀行のパンフレットといった、およそ文章として読んでも意味がないような類のものばかりなわけです。

ところが、値段や数字が間違っていたりしたら大問題でして、例えば、スーパーのチラシにある1000円の値段が100円になっていたら、その値段で商品売らなければならない。その店は何千万円という損害を出してしまうわけですね。そのリスクを防止するために、印刷工場の中で印刷ミスをチェックする部門が必要なんですけど、そういう仕事をやっていました。大会社の内部下請け会社が印刷原版を工場の中で製作していて、そのさまざまな段階に孫請け、アウトソーシング、長期や短期の会社や個人の契約、派遣の人間たちが大量に働いている。私の所属している校正事務所でも、マガジンハウスといった、きらびやかな出版物を出しているところや、朝日新聞の出版部といった大会社に行く人もいました。そういうところでは文化的な素養が求められたりするのですが、私は新参者だったので、とにかく食っていけるだけの収入が稼げる現場ということで、誰も行きたがらないようなところに3人のチームで行かされました。ギャラは安い、仕事はきつい、工場は汚い、駅から遠い、というわけです。

当時、私は35歳ぐらいでしたが、そのメンバーのチーフ格は、マガジンハウスの前身の平凡出版という会社で副編集長までやった人なのですが、上役を殴ってそこを辞めたという40代終わりで酒好きなおじさんでした。あとの一人はまだ20代で、前衛的な絵を描く静かな画家の卵。その3人で大日本印刷の印刷工場に回される。1980年代の半ばから働いたそこで、自分は多少書物を読んできたという自負やプライドといったものを、徹底的に剥ぎ取られるわけです。

その印刷工場で私たちに仕事を持ってくる部門の責任者は、拓殖大学出の体育会男でしたが、何かあるとすぐに私たちのところに怒鳴り込んでくるようなとんでもない奴だった。大きな印刷工場の内部というのは、本当に驚くほど乱雑なのです。本になるまで何段階も工程がある。その途中の「出力」というより、当時はデジタル以前だから試し刷りされた紙類があちこちに積んであったり、いろいろな原稿がそこらに置いてあったりして、工場中ぐちゃぐちゃな状態になっている。そういう混乱の中で、しばしば、原稿類が紛失してしまうのです。当時は「写植」といって、活字を写真の形で打ち出したものを切り貼りして並べて原版を作って、それをフィルムに取って印刷していたんですが、その過程で実にいろんなものがなくなるのです。

発注元から受けとった一番大事な原本が紛失したなんてことになると、会社として大変な責任問題になるので、そうなるとすぐ、私たちが作業している部屋にその拓大出の男が怒鳴り込んでくるわけです。さすがに私たちにはそこまでしませんでしたけど、学生時代にこいつは竹刀かなんかで後輩を殴っていたんだろうと思わせるような奴でした。そういうところで働いていたわけです。もちろん社会保障もボーナスも何もないのに、制服を着せられ、昼休みはラジオ体操をやらされて、掃除までさせようとする。私と画家の卵の若い男は絶対にやりませんでしたけど、もう一人のチーフ格は、「まあしょうがねえなあ」なんて言いながら、箒を握り、ラジオ体操をしていました。

そういった印刷工場での仕事全体が、バブル崩壊によってほとんどあっという間になくなってしまうわけです。つまり印刷工程が電算化されて、作業がDTPで行われるようになり、印刷工場での労働の内実が決定的に変わってしまうんですね。写真植字、組版、製版といった工程が一挙に圧縮される。その過程でたくさんの人たちが失職して、会社ごと、部門ごと消滅してしまいました。

そのような経験の中で、私としても一体このことは何なんだろうと考えざるを得ませんでした。全共闘運動に突っ走り、生き方が激変したことを、自分にとってマイナスだと思ったことはない。仕事はきつく、経済的には不安定だったのですが、そこから自分の人生をつくり直すということ自体は充実していた。私の運動仲間の中には、例えば、NECや読売新聞の部長クラスになったりして、一流企業の出世コースに戻っていった人間もいます。しかし、自分にとってそれは別にどうということもありません。むしろつまらないこと。インキで汚れた薄暗い工場で働くというのは、自分にとって何の苦にもならないことで、それは生まれ育った場所で無意識のうちに見てきたことに関わっているかもしれない。ただそこで初めて、現在のほとんど無意味で不安定な労働とは、プロレタリアとは、階級とは何なのかといったことを、正面から考えるようになりました。（*2）

全共闘運動や新左翼の活動家たちの間では、工場労働者としてのプロレタリアートこそが革命運動の主体であるというような古典的な「労働者本隊論」は、始めから遠い話でした。とにかく自分たちは自由に生きたいし、それが自ずと世界を変えていくんだという、少々楽天的にすぎるような雰囲気は初期には確実にあった。私や私の運動仲間、当時、本気でいわゆる「労働者」になりたいと思っていたような人間は誰もいなかったと思います。ネクタイにスーツのサラリーマンにもなりたくないけれど、制服を着た工場労働者にもなりたくない。私の場合、特に商人的、職人的な環境で育ったことが大きいかもしれません。

私は何度か三里塚にも行きましたけれども、正直言って「やっぱり、農業はできないなあ」というのが実感でした。あそこにあるのは毛沢東が言っていたような意味での「農村根拠地」なんかではなく、むしろ、都市型の農業です。千葉県は枝豆の有数の生産地なんです。私たちが飲み屋で食べるつまみの枝豆は、東京という大消費地抜きにはありえないんですよ。そういう市場と一体となった都市型農業であり、トマトなんかを作っているわけで、毛沢東の言っていたような農村根拠地論をあそこにあてはめるのは妄想です。逆にいえば、だからこそあのような形で、たくさんの都会の人間が三里塚に関わることができたんですけれどね。三里塚闘争は新たな都市性を発明しようとする運動じゃなかったのかと、今なら思います。

それでは、自分にとって最も現実的で身近な労働者というのは誰かという、それは新宿の街で働いている水商売の人たちでした。つまり、それまでの労働者観や、古典的な階級論の図式でいうと「ルンペンプロレタリア」と呼ばれる人たちです。社会変革の担い手としては当てにはならないし、新しい社会を作っていく主体にはならないだろうと思われているような、むしろ、ファシストの手先になる塵芥のような存在として考えられていたような人たちですね。半失業で熟練せず、未組織で規律のない労働者たちと思われている。生まれた時から自分の周りには、飲食店や小売業の末端にいるような人たちや、男女のセックス・ワーカーたち、自営商店の店員、旅館の仲居やラブホテルの従業員といった、膨大な数のサービス労働者たちが確かにいるわけです。そういう人間しか見たことがない。レーニンはいして熱心に読まなかったのですが、自分がそれまでに知ったマルクスや、トロツキーやローザ・ルクセンブルクまで持ち出してみても、そういう自分の目の前の現実と書物の中で言われていることとの距離があまりにも大きかった。長い間、その間をつなぐ言葉が何もなかったんです。パリの娼婦を謳ったボードレールに傾倒したベンヤミンや、植民地の押し潰された性を分析したファノンの言葉に向か

ったのは、そのせいだと思います。

バブル崩壊の余波が末端まで及んできた90年代の半ばだと思いますが、印刷工場の現場がなくなってしまうという体験をした頃から、少しずつそういう自分の生き立ちと労働や階級の問題を結びつけて考えるようになりました。工場労働や農業といった、いわゆる生産的な労働ではなく、新宿の街で性と酒を提供するサービス業をしているような労働者たちこそ、自分にとっては身近な存在でした。それはたしかに物や財を作るわけでないが、人間の深い本能に関わっている。実家の洗濯屋はそのさらに周辺産業です。それでは、工場労働者は本当に生産的な労働をしているのかどうかというと、実はくだらない物を作っていたりするんですよ。さっき言ったような印刷工場で刷っている不動産屋のチラシや、怪しい宗教団体の機関誌なんかは、はっきり言ってなくたっていいようなものです。スーパーのチラシも通販やデパートのカタログも、いらぬ物を買わせる怪文書に近い。それどころか自動車やビルさえ本当に必要なのか。そんなわけで、この頃から「労働」「階級」「経済」といったことを自分なりに考えて、いろいろなところで書き始めました。

東京の中野富士見町に、「プランB」という前衛的なパフォーマンスや、コンサートを企画している小さなライブスペースがあって、もう30年近く活動を行っています。そこで出しているフリーペーパーがあるのですが、そこで初めて「フリーター階級」という言葉を出して書いたのが10年ほど前のことです。しかし、当時は「フリーター」という言い方さえようやく知られはじめた頃で、「好きでふらふらしているプー太郎」と思われていた。「何を馬鹿なことを」という反応が非常に多かったですね。ただ、そこに出入りしているようなアーティストたちだけは、そうではありませんでした。なぜなら、彼ら／彼女ら自身がいわゆる生産的な労働をせずに、昔からずっと芸術活動をやりながら、食うためにフリーター的な生活をしてきたわけですから。

逆に、最も冷淡な反応しか返ってこなかったのは、それまで、左翼的で批判的な本や雑誌を出してきたような出版社の編集者たちです。かつては総評の一翼「出版労連」を形成し、戦闘的な労働組合運動を担ってきた人たちが、その後、社内でもある程度の地位を得るようになっていたのですが、そうした人たちに声をかけてみても啞然とされただけでした。「階級」や「プロレタリア」といった言葉こそ、彼らが今まで聞いてきて、散々痛い目にあわされる中で、80年代から90年代にかけてどうにか忘れようとしてきた苦い言葉だったのです。だから過剰反応してしまう。「今さらまだ、そんなことを言うのか」、「それだけは聞きたくない」というような反応しか返ってきませんでした。出版労連で労働運動をやってきたような人たちが、そういう反応を示したということに私は非常に驚いたのですが、逆に言うと、そうであればなおさら、考える意味があるとも思いました。

つまり、彼らにとっては、もはや自分たちの慣れ親しんだ図式では世界が見えなくなっているのです。「階級」や「労働」や「プロレタリア」といった言葉はもはや過去のものであり、むしろ、それ以上に忌み嫌うべき呪われた言葉なのです。なぜなら、半生をそこにかけながら、無残にも成し遂げられなかった自分たちの敗北の歴史を、それらの言葉によって否定なく思い知らされるからです。ですから、彼らには露骨にいやな顔をされました。彼らの多くは全共闘世代でした。そして、マルクス派の経済学者も同じような反応を示しました。

知人である優秀な経済学者に向かって、私がこだわっているような問題についてどんな文献がある

のか教えてくれとか、世界経済の状況はどうなっていくのかと聞いてみたのですが、明快な答えが返ってこないのです。それでは、今、起きてきているような「フリーター」現象についてどう思うかと尋ねてみても、せいぜい古典的なマルクス主義経済学の範囲内で、「ルンペンプロレタリア」とか、あるいはまた、社会的に有益な生産活動の枠組みを作りだしている正規の労働者に寄生して生きている、「被恤救民」という言葉が資本論に出てくるのですが、せいぜい、そういうタームで語るだけで、正面から、今、現実に起きていることについて論じることができない。出版社の管理職になり、大学教授になった元活動家たちには、実感が感じられないのかも知れません。

「文学」への帰還

それは、研究者や学者だからという面もあります。彼らはまず調査をして、十分な資料をそろえてから、ようやく考え始める。今起こりつつあり、今後もますますそういう傾向が強まるだろうということについて語れといっても、近代科学の原理から許されないことなのです。これは文学の仕事なのかもしれない。文学といっても、これまた壊滅的な現状なのです。ここ2、3年でようやく「プロレタリア文学」の新しい読み方が言われるようになりましたが、10年前は「プロレタリア文学」というのは、死語というか、存在自体が忘れられているという有様で、研究者でさえ非常に少なくなっていました。

いわば、未だ予感的なものでしかないものを、人間の経験を通じて言葉として紡ぎ出すという文学の役割は、今や重要であると思います。例えば、マルクスの洞察が現れるためには、シェークスピアや、バルザックといった文学者の存在が不可欠だった。実際、マルクスの書いた本には、シェークスピアや、バルザックの言葉が多数引用されていて、他のどんな経済学者や思想家たちよりも多いと言われています。貨幣や商品をめぐる資本主義的な倒錯への考察には、二人の作家たちの鋭い眼力が絡み合っている。そのように、文学と思想とは互いに手を取り合いながら、人の行為の深みを抉りだし、そこからさらに科学につながっていく。そういう人文学の形が成立していたと思うのですが、文学と思想のどちらも、今生じつつある、新たな労働や階級の問題としか言いようのない現象に手をつけることができていません。少なくとも、最近までそういう状態でした。

私は経済学や労働問題の専門家でもないし、社会学的な調査ができるわけでもない。単にフリーターの生き方をして運動に関わり、音楽に惹かれていろいろと書いているというだけの人間です。文学部に籍を置いたことがあるといっても、小説などたいして読んでいない。それが、「ミッキーマウスのプロレタリア宣言」という本を何度も書き直している内に、だんだん「小説のようなもの」になっていくのです。60年代の終わりに、私たちが運動を始めた頃、純文学というのは最も忌み嫌われたジャンルだったのです。それが実際にそうであるかは別にして、「純文学は死んだ」という空気が蔓延していました。それが、この本を書いている間に、自分の書く文章がどんどん「文学」化していくということを初めて経験しました。なにかこう、自分の感覚だけに根拠を持っているような表現ができるようになった。

私の友人でフランス文学・思想を専門とする鵜飼哲さんは、この本のことを冗談まじりに「現代の毛沢東語録だ」と言っていました。まあ、単に、同じような赤い表紙の本だからというだけの話なんでしょ

が、彼はとても鋭敏な人なので、ある種の諧謔と直感から、そう言ってくれたのではないかと思います。整えられた思想というより、不安定な日々を雑草のように生きるための「赤い野帖」といったところでしょうか。

「ミッキーマウスのプロレタリア宣言」では自分語りめいた話が続くかと思うと、永山則夫の小説や思想家のベンヤミンが重要な位置を占めていますし、現在の若い人たちの運動にもつながっていく。終わりの方には音楽の話が出てくる。ジャンルを超えてというより、自分の書く欲望がどんどんわけが分からない方向に進んでしまう。古くからの運動関係の人たちからは、異様な文体の変化によく分からないという反応が多い。当のフリーターたちの方が引き込まれているようです。一方、多くの女性たちがこの「ミッキーマウスのプロレタリア宣言」を、ある種の自伝的小説として受け取ったようで、はっきりした反応がありました。例えば、金井美恵子さんという私より少し年上の小説家がありますが、彼女はこの本をまったくの文学作品として読んでくれて、ある編集者に、あいつに小説を書かせろと伝えたという噂を聞きました。（*3）

私たちの世代はむしろ文学や小説を嫌い、その一方で、音楽を思想のように聴いて、肉体的な行動に走ったりしたわけです。今もし「文学的なもの」がありうるとしたら、それは徹底的に「非文学的なもの」に違いないと、私は60年代の終わりに考えていました。「文学」とか言っている奴こそ、文学には何の関係もないと思っていたので、それくらいなら街頭のデモにのめり込んだり、何か体を使って面白いことをやる方が、文学それ自体よりもっと文学的であると思っていました。そのように、長年、限りなく文学から遠ざかっていたのに、この本を書いたことをきっかけに、いわば初めて「文学」に目覚めたわけです。

先ほど、マルクスの思想が成立するためにはシェークスピアやバルザックの文学が必要だったと言いましたが、今、何が起きているのかを深く捉えるためにも、不安定な毎日を生きる自分たちが反応する肉体感覚そのものから、統計化されない言葉をつかみ出すしかない。例えば、マスコミなどで支配的な論調では、「フリーター」として生きる人間たちを、下手に処理したら有害物質が出てしまうようなダイオキシンとして、いかに害のないように処理すべきかといった「廃棄物処理」の問題にされています。個人の心理問題として、カウンセリングで解決しようとしたり、「ニート」や「ひきこもり」といったカテゴリーのゴミ袋に詰め込むことで、社会的な「ゴミ処理」の問題として扱おうとする。

こうした状況に対しては、とにかく今までの思想の枠組みを破壊してみなければ、何も見えてこないだろうと思いますし、そこから、私にとっては数十年ぶりに文学の出番がやってきたのだと強く感じています。「ミッキーマウスのプロレタリア宣言」という本を、私は別に文学作品として書いたわけではないのですが、期せずしてそのように読まれたというのは、やはり理由があったと思います。私は自分が小説を書けるとは思っていませんが、現在、起きている事態は、今まで私たちが経験したことのないことであり、5年や10年で片がつくことではないだろうと思っています。

「フリーター」減少という統計のカラクリ

つい最近報告された2007年度の厚労省調査によれば、日本国内ではここ3年間で「フリーター」として働く者が約30万人減ったという数字が発表されています。団塊世代の退職に伴って正社員の需要が増えたとか、景気が多少上向いたといった理由が、その根拠とされているようです。しかし、それは、東京都心部で出版フリーターとして生きる私の実感とはまったく違う。周囲ではフリーターたちはますます増えています。私が所属している校正の事務所に登録している人たちも、10年前はほぼ100人だったのが、数年前には200人規模になり、今は300人近くに増えています。長期や短期の派遣社員だった人たちが、毎日細切れのフリーターになり、少しでもいい条件を求めて派遣会社の移動も激しく、二重、三重の登録も増えるばかりです。親子が同じ工場の昼勤と夜勤で働いている人たちもいる。

昨年、私が驚いたのは、新卒でフリーター稼業に入ってくる人たちが現れたことでした。一人は、大学院に行きたいけれど親に余裕がないので、何年か自分で働いてなんとか大学院にとということで、私たちの事務所に来たわけです。他にも、東北の高等専門学校を出たばかりの女性も入っています。東京には出版社が多いから校正の需要があって、おそらく何千人という規模の人たちが働いていると思いますが、私たちの事務所には、不動産屋に勤めていた人から、80年代に有名な文芸誌の編集長をしていたような人まで、実に雑多な人間たちが流れ込んでくる。

私たちの事務所では、手取り時給2000円から2500円くらいが目標なのですが、印刷工場の相場は1500円くらいにまで下がってきています。天引き率の高い一般の会社では、ほぼ時給1000円くらいですが、一番下には、時給700円から900円という、コンビニのアルバイトと同じくらいのところもあります。

もちろん校正なんていうのは、出版産業で働く労働力のごく一部末端にすぎないので、現在の労働状況全体を代表させることはできません。しかし例えば、私たちが行く現場でも、仕事に関わってくる人たちは女性が多いんですが、ほとんど契約社員か派遣労働者です。契約や派遣の女性たちは自分が「フリーター」だと思っていないし、プライドがそれを許さない。官庁的なカテゴリーでも違うのですが、実際にはほとんど「フリーター」と待遇が変わりません。そうした派遣社員や短期の契約社員たちを統括しているのは、1年から数年の契約といった長期の契約社員で、さらにその向こう側によく正社員がいるという構図になっている。ほぼ10人に1人くらいしか正社員はいません。そのうえ会社ごと不安定なアウトソーシングの協力会社がいくつも関わって、小さいけれどそこでも同じような構図になる。これは製造業よりずっと細分化された非正規化が進んでいる。

現場では、そうした労務上の階層化がお互いよく見えないまま働かされている。自分たちに仕事を持ってくる人が正社員だと思っていると、ある日の昼休みに「時給いくらなの？」などと聞いてくるんです。そこで初めて、その人が契約社員だと知る。そのうえ、「そっちに移りたいんだけど」とか言い出すので、理由を聞くと、「何か月か後には契約が切れちゃうし、もう再契約はないみたい」と、言うわけです。

私たちの事務所は、法律上でいうと派遣会社ではなく、あくまで個人営業の自由労働者集団なんです。事務所は企業から発注された仕事を一人ひとりに割り振る単なる仲介をしているにすぎない。だから何の保障も会社資産もないけれど、マネジメント料を10%しか取っていません。ほとんどアナ

ルコ・コーポラティズムと言ってもいいと思いますが、「会社のふりをした社会」と私は呼んでいます。できるだけ会社を大きくしない。会社が利潤を上げないで、会員になるべく分配するという自己解体的な会社なんで、中間マージンを極力取らないようにしています。

今、印刷工場や出版社では、個人契約の人やフリーターを派遣社員化させようという傾向になっています。それはなぜかというと、海の者とも山の者ともつかない、素性の知れない連中が工場や、出版社の中に入ってきて仕事をしているという状態が大きなリスクになっている。そこから情報が流出してしまうのではないかと。例えば、オレオレ詐欺で使われたりするような個人情報のリストが盗まれて売買されるといった事件が起きた。印刷会社では、訴訟になり何千万円という損害賠償金を払わなければならないという事態も生じています。労働者を保護する労働法が「規制緩和」で骨抜きにされ、人間が物として売り買いされる一方で、「自己責任」という形で法的な縛りをかけようとする傾向が非常に強くなっています。「フリーター」を形の上で派遣会社の社員ということにして、履歴書を書かせて身元を確かめたり、会社に所属させて責任を負わせれば、情報漏洩をブロックできるということです。

派遣社員になれば、社会保険加入や有給休暇制を会社が設けなければなりません、実際はほとんどそういう保障や保護はありません。そのように、フリーターから派遣社員になると、労働統計上は「フリーター」の分類から外れることとなります。結局、そういった事情からくる形式的な変化によって「フリーター」の実数は減っているように見える。しかし、派遣会社の社員になったところで、毎日失業で保障もないという状態は一向に変わりません。これが、「フリーター30万人減少」の内情です。

また、一方では、正社員たちのフリーター化も進んでいる。どんどん企業の社会保険制度が破綻していて、社会保険に入っていない正社員がたくさんいます。正社員でいながら、国民健康保険に入っている人も増えています。企業向けの社会保険システムのノウハウを提供して事務手続きを請け負う会社に出向き、出版物を校正したことがあるのですが、とんでもなく単価が低かった。すごいコストダウンでした。顧客になる企業が大幅に減っています。今や、社会保険加入を積極的に停止する企業さえ出てきて、明らかに労働基準法違反なのですが、まかりとおっているという現状があります。年に何回も給料の査定を繰り返す。会社を移る社員がますます増えている。そのように、正社員の実情はほぼフリーターと変わらないわけで、そうした統計に現れない、事実上の「フリーター」や、非正規労働者が膨大に増えているのです。

これは別に景気が悪いからという問題ではなく、90年代以降、ネオリベラリズム政策が展開してきた、むき出しの資本原理主義経済によって、全世界的に生じていることです。そこに現われているのは何かと言えば、「フリーター」の世襲です。これは、エリートの世襲と並行して、既にはっきりと現れています。私たちの校正事務所でも夫婦や、親子、兄弟で働いている人は、めずらしくありません。そういう趨勢は、今後、もっとはっきりと現れてくるのでしょうが、学問の世界からの反応は本当に鈍くて、学者たちは、はっきり言うと、5年前の統計を元にとっくに死んでしまった現象を分析して「死体解剖」をしているだけです。

例えば、大塚史学の系統に連なる人で、佐藤俊樹という、それなりに優秀な若い東大の学者がいます。彼は総務省と提携して、ジニ係数という所得分布を現すための統計データ処理法を使って、日本の労働者の状況についての一連の調査・研究を行っています。その元になっている政府調査は、こ

れまで5年に1回のものが3年になりましたが、結局、全国調査した結果が出るのがさらにその3年後なんです。統計の取り方自体にも大きな問題がありますが、こういう時季外れの調査資料を元にして、そのうえ、学者たちはそれを何年もかけて研究するんですね。学者たちのそういう研究姿勢を、全共闘運動の中で私たちは既に批判していたのですが。

それでは、思想家はどうかというと、思想というのは本来的に先取りして状況を見るということがあるので、それにしても、今、起きてることを鋭く見抜くということは、なかなかできてはいません。ただ、ドゥルーズ／ガタリや、ネグリとかいった人たちは、深く創造的に予見する力がある人たちで、かなり先の状況を見越していると思います。（*4）

ある運動仲間の「歩み」から

「ミッキーマウスのプロレタリア宣言」というタイトルからして、わけのわからない本ですが、阿部嘉昭という私より6歳下の「サブカル世代」の書き手で、最近あちこちで、映画批評や音楽評論などの文章を書いている人がいます。彼は、ミクシーというインターネット上のコミュニティーのようなブログに書いている文章を元にして、「僕はこんな日常や感情でできています」という本を晶文社から出しています。その中で、私の「ミッキーマウスのプロレタリア宣言」について、「こりゃ、血の滲むような兄貴の世代の自叙伝だ」という真摯な批評文を書いてくれました。

私がものを書き始めたごく初期の頃に、ある雑誌にクレージーキャッツ論のようなものを書かせてもらったのですが、実は、その時の編集者が彼だったんですね。それだけではなく、70年代から80年代、私は配送の仕事で自転車につけた竹のかごに洗濯物を載せて、毎日新宿の街を走り回っていたのですが、そういう私の姿を彼は見ていたようです。彼はその思い出から書評を書き出しているのですが、非常に心が温まる良い文章です。とはいえ、私は一面ではクレージーキャッツについて書くような人間なんで、ただ「血の滲むような」という面だけでもない。工場にしようが、洗濯屋として歌舞伎町の怪しげなピンクサロンに出入りしようが、それはそれでとても面白いことでした。

かなり古い世代の人じゃないと触れていないかもしれませんが、マキシム・ゴーリキーというロシア文学の作家がいます。彼は「私の大学」という自伝的な小説を書いています。つまり、底辺で暮らす肉体労働者の世界に入っていくことが、彼にとって大学に通うようなものだった。その小説のことは、60年代に五木寛之が書いた「風に吹かれて」というエッセー集で知ったのですが、ゴーリキーや五木寛之を通じて、ある種のナロードニズムというか、社会の底辺層に向かっていくという傾きは、洗濯屋時代の私の中に染み込みました。

もちろん、意識的に「通俗作家」を演じるという面も五木寛之にはあります。それでも、朝鮮半島から九州の炭鉱町に引き上げてきて、東京では学生運動も出来ないくらいにアルバイトに明け暮れていたという体験が、彼を一人の「作家」にしたのは間違いない。70年代に五木寛之の本が好きだなんて言うとかかわりませんが、「通俗故に、我信ず」といいますか、彼の持つそうしたナロードニズムというのは、無視してはいけないと思っています。そういう意味では、自分にとって「私の大学」というのは、新

宿の歌舞伎町や2丁目の界隈の、最もいかれた人たちのいる地域で働いて暮らしていた経験が、それに当たるのかなと思います。

レジメにも書きましたが、もう一人、紹介したいと思う人がいます。彼は、中学・高校時代から大学まで通じた友人で、神奈川県川崎の百合ヶ丘駅という小田急線の急行が止まる駅から通っていました。今、再びそこに住んでいますが、中学や高校時代にはそこから籍だけ東京に移して、越境入学で新宿区内に通学していました。彼とは高校で一緒に全共闘運動をやるんですが、彼も私もジャズにのめり込み、授業を抜け出して一緒にジャズ喫茶に行くという、感覚的に近いものを感じていました。70年代の初め、同じ早稲田大学に入学したのですが、その直後に「川口君事件」という、革マル派が一人のノンセクト学生をリンチで殺してしまうという、後の「内ゲバ時代」のはしりのような事件が起こる。川口君は私たちと同じ年齢でした。その事件をきっかけとして、全共闘運動の最後の盛り上がりのような闘争が始まる。私はすでに洗濯屋の仕事に追われていましたが、その騒動の中で彼は大学を中退しました。

彼は高校生の頃、当時最も先鋭的なライブ演奏を繰り広げていたピットインというジャズ喫茶でアルバイトをしていたのですが、大学中退後、衰退する新宿を去って、京都にアルトサクソ一本持って移り住む。70年代には、京都の方が運動としても、文化的な面でも面白くなってきた。音楽活動と運動の両方に関わりながら、京都に10年近く住むことになる。今から思えば、70年代の京都で運動をやっていた連中の中には、私の話にも出た鶴飼哲さんや市田良彦さんだけでなく、崎山政毅や、富山一郎、細見和之といった、後に運動的なセンスを忘れない良質な学者になった人たちが何人もいたんですね。

しかし80年代半ばに入ると、時代の熱気は冷めていく。30代になった彼は、東京に戻って、東京外語大に入り直しました。ブランクがあって大学に入り直すという全共闘世代の生き方は、中国の文革世代を思わせる。そこで中国語を再び勉強して、30代の半ばを過ぎて卒業してから、三菱系の中国貿易商社に勤めた。ところが、北京支社を任される管理職になった40代になって突然、会社を辞めてしまいました。私は、彼が企業マンになった後も付き合いがあったのですが、サラリーマンになっても依然として、ネクタイがまともに締められないような男でした。もちろん私もできません。そして、生まれ育った川崎で地元の「里の森」を守る運動に取り組む。

今、彼は何をしているかという、寝たきり状態の母親の介護をするために、自宅に近い百合ヶ丘駅の立ち食いそば屋で働いています。翻訳で生計を立てようとしたのですが、食べていけない。大学を二つ出た、アルトサクソを吹き、中国語の堪能な50代の立ち食いそば屋です。世間的にはせつかくの優良企業を辞めて転落コースを辿った「全共闘の成れの果て」ということになるのですが、彼はそのような自分の人生に何の後悔もしていません。

一方で、さっきも出た塩崎恭久のような人もいます。彼は東大教養学部を出ると、日本銀行に入り、ハーバード大学の大学院に向かう。そこで、ケネディー大統領の父ジョゼフが寄付した「ケネディー・スクール」に籍を置いて、折から台頭してきた民主党系のネオリベラリストたちに出会うわけです。竹中平蔵や中谷巖と知り合ったのも、この時です。後に親を継いで自民党の政治家になり、リベラルな加藤紘一の側近から離れ、ネオリベラルとして安倍政権を支えた出発点はたぶん、この辺りにあるので

しょう。

私は「プロト・アナキズム」という言い方をしていますが、全共闘運動の末端活動家たちには、思想としてのアナキズムというよりも、「やりたいことをやるだけさ」というアナキーな発想が蔓延していたと思います。塩崎にしてもそういった心情は持ち続けていたように思いますが、彼の場合は、そのようなアナキーな心情を、利潤追求のためには世界中を市場化して、社会福祉といった国民国家のもつ最低限の保護機能さえも平気で利潤追求の場にしてはばからないような、資本主義のもつアナキーな動きに同調する方向に「接続」させてしまったのだと思います。

塩崎は現在、世界的なネットワークを持つ「ケネディー・スクール」の同窓会の日本支部会長をしています。彼のような生き方とは全く対照的な道を歩んだ人たちが、はるかに多い。かつてのリーダーであったり、思想家や大学教授、文筆家として名を上げたというのではない、それこそ、駅の立ち食いそば屋をしながら母親の介護をしている友人や、私が新宿の喫茶店で出会った無名の人たちの〈68年〉は、まったく語られてこなかったように思います。私の奇書は、永山則夫や山谷での体験だけでなく、印刷工場で付き合い合った人たちや、こうした友人たちの経験とが幾重にも錯綜して綾なされた本です。

◇「生産点」としてのストリートから「コモン」が生まれる

今のような平井さんの話を聞くと、「ミッキーマウスのプロレタリア宣言」と言う本も、もう少し深く読めるように感じています。ところで、今日ぜひお聞きしたいことの一つなのですが、この数年、フリーターや不安定雇用労働者といった人たちが、「生の保障」の解体に抗して街頭で声を上げるということが、あちこちで見られるような状況になってきています。平井さんは、そういうことを取り上げた先駆者の一人だと私たちは思っているのですが、平井さんは日本での「ストリートアクティビズム」の系譜や現状をどのように捉えていますか。

「生産現場」としての「街頭」にこだわり続ける

私が「路上」と言うときのネタを明かせば、67年か、68年頃に晶文社版の「ベンヤミン著作集」が出され始めたのですが、その「ボードレール」だったかの帯に「路上の思想家」というキャッチフレーズが書かれていたんです。津野海太郎という、長い間にわたって晶文社の編集長を務め、黒テントの芝居の台本なんかも書いた人がいるんですが、どうもその彼が書いたコピーのようなんです。

それがネタ元といえれば確かにそうなんです。さっきも言いましたけども、私は高校で運動を始めたわけですが、東大の学生だったら、自分がやっている研究や学問のあり方とか、大学の体制といったことが、当然、批判の対象になるわけですね。労働者であれば、賃金や労働条件といったことが、運

動の焦点になるはずですが、しかし、高校というのは、いわば通過点に過ぎないわけで、そこで何か生産的な活動や研究が行われているわけではありません。結局、高校生だった私たちがひと時でも解放される「リアリティ」はどこにあったのかというと、それは街頭にしかなかったのです。

当時、新宿の街頭で起きていることについて、ベビーブーム世代の若者たちが東京に殺到し、映画、演劇、音楽、文学の才能ある連中が、交通と文化の交差点に集中した結果、若者文化や騒動の震源地になっていると言われ方がされていました。しかし、私としては、本当にそれだけなんだろうかという疑問が、ずっとあったんですね。つまり、私は外から新宿の街に来たわけではなく、明治のお爺さんやお婆さんの代から、もっと言うと江戸中期から新宿周辺で働いて暮らしてきた家の子供だったんです。

私の実家の洗濯屋は、戦後直後から60年代前期までの最盛期には、10人以上の従業員を使っていたような時期もあるので、中小企業の経営者といってもいいのかもしれません。しかし、60年代後半から74年の父の交通事故にかけてほとんど家族経営の零細商店になってしまう。姉が早く結婚したので、1970年には、両親と私、弟の他にもう一人職人さんを雇っている、ありふれた町の洗濯屋にすぎませんでした。毎日のように、経営者である私たちの一家全員が、8時間労働の労働者よりもはるかに長時間働いていました。こうした家族の労働形態を見ても、古典的な意味でのブルジョア階級とか、プロレタリア階級といった区別が当てはまるのかよく分からない。そのうえ、お客さんである水商売やサービス産業に従事している人たちのことが頭にあって、彼ら／彼女らは労働者じゃないのか、だったら一体何なんだ、という問題意識にずっとこだわり続けていました。自転車で走る私も含めて、皆「路上」で暮らす人びとでした。

今、「路上」と言うと、音楽やファッションといった、いわゆるストリート・カルチャーのことが、ごく普通に語られています。もう、かつてのように傍流のものではないんですね。今やファッション業界では、自分のセンスを磨くためにも、ストリート・ファッションからどれだけ「奪い取る」かということが、切実な関心事になっています。東京の原宿や青山といった若者たちが集まる街の路上には、監視カメラが設置されています。それは警察や行政が「安全対策上」と称して、設置しているだけではない。ファッション産業に関わる人たちが、街頭を歩いている若者たちの姿をたくさんのビデオ・カメラで撮影しているのです。

そして、その映像からピックアップして、新製品の開発のためのアイデアやヒントを得る。そうした情報提供を手がける専門会社さえある。ストリートを行き交う若者たちのセンスを盗んでいるわけです。そういった街には、各種のブランド店が膨大にあるわけで、彼ら／彼女らが身につけている服やアクセサリといったものの組み合わせというのは、それこそ、無数にあるわけですね。そういったセンスというのは、ファッション業界にとって大変な埋蔵資源なんです。

つまり、「街頭」というのは消費の場であると同時に、そのまま生産と直結する展示場かラボラトリーのようになっているわけです。そのようなことは60年代の新宿にそのままあったわけではないのですが、しかし、その萌芽に近いものは当時も既にあったわけです。例えば、後に登場するコピーライターたちの多くは、あの時代に育ってきた連中です。糸井重里なんかもそうだった。彼のような連中が路上で磨いてきた言語センスが、後には企業による消費イメージ創出やライフスタイル戦略につながって

いきます。そこでは街頭や路上といった空間が、単なる消費や風俗の場ではなくて、生産や産業構造に直結するような状態になりかけていたんですね。

上から見下ろすと「文化資源の埋蔵地」、下から見上げると「サービス労働の作業場」。自分にとってのリアリティは街頭にしかないという思いで、単に若者風俗や時代現象といった見方を超えて、路上やストリートということにこだわり続けていました。その一方では、自分の頭の半分はマルクス主義にどっぷりと浸かっていて、生産や、労働とかいうことを常に考えているわけですね。

1974年に実家に帰った時、俺の存在は何もない、全くのゼロだとも思いましたよ。大学を中退して学歴もないし、何の技術も身に付けていない。体力もたいしたことないから農民にはなれないし、山谷や釜ヶ崎に行ったとしても何の役にも立たない。当時そういう「途方に暮れて」(立松和平の小説)いた連中はたくさんいたと思う。そういう意味では、自分の存在はゼロみたいなものじゃないかと思うのですが、『存在が意識を規定する』と言うけれども、そういうゼロみたいな自分の存在を規定しているものは、一体何なんだ』ということも、考えていたわけです。そういう混沌とした問題意識をずっと持ち続けながら考えたことは、結局、路上そのものがある種の「生産点」ではないかということです。皆さんもよくご存じの小倉利丸さんと私は、ほぼ同じような時期からものを書き始めたと言ってもいいと思うのですが、彼が最初に書いた「支配の『経済学』」という本の中の、現在の消費は生産と直結しているという一節を読んで、彼も自分と同じようなことを考えているのだなということも、強く感じていました。

そのような自分なりの街頭へのこだわりを解きほぐすヒントの一つが、ベンヤミンの「パサーージュ論」だったように思います。60年代後半には、まだその梗概といくつかの断片しか訳されていなかった。結局、本の形にはならず膨大なメモの山として残されたベンヤミンの「パサーージュ論」の断片しか、私は知らなかったのですが、そういうものを読んで大きな刺激を受けていました。ベンヤミンは、きらびやかなパリのブルバールで起きていることを単なる風俗現象としては捉えていないんですね。19世紀フランスのボードレールをはじめパリの路地に生きた詩人や作家たちの作品を素材にしながら、街に漂うオーラから資本主義批判の思想を作り出そうとします。今の時点から振り返れば、産業資本主義の先端に生じたことを顕微鏡で見つめたベンヤミンは、20年代の街頭で起きていることを、ブレヒト、コルシュ、ブルトン、ブロッホなど、彼の時代の最良のマルクス主義思想と結び付けようとした。それが頭のどこかであって、自分の街頭というものへのこだわりを、内側から支えていたように思います。

(*5)

フリーターたちの新たな「寄せ場」を

路上といえば、高円寺駅前でリサイクルショップを営んでいる、松本哉(はじめ)くんを中心とした「素人の乱」に集まっているような連中が、数年前、クリスマスの時期に六本木ヒルズの前で、皆でコタツにあたりながら鍋をやるという、こいつらバカじゃないかと思われるようなことをしているんですね。実は、このコタツの運動というのは意味があるんじゃないかと、私はずっと考えているんです。高校時代に全共闘運動に手を焼いた学校側が、学内での集会を許可制にすると言い出したんです。それに対抗す

るために私たちがどうしたかという、授業中に皆でトイレに行って、トイレで集会をやるんです。つまり、俺たちはトイレでたまたま一緒になっただけだということにして、30人ぐらいでトイレに行って、そこでぎゅうぎゅう詰めになって集会をやるわけです。それで、教師に文句を言われると、「授業をサボってるわけじゃないから、処分できないだろ。授業中、トイレに行っちゃいけないのか」と反論するわけです。笑っちゃうような批評性と体に迫る切実な具体性の両方がある。

そういうことを高校時代にいろいろとやりました。この手の奇天烈な運動というのは、全共闘運動の末端では、実は無数に起きたんですね。国家権力と正面衝突するとか、何とか法を「実力阻止」するとか、「帝大解体」といった、大上段に振りかぶった実態がよくわからないスローガンでは表現できない、群衆的な欲望が街でも学校でも溢れていた。運動のスタイルが面白くなきゃしょうがない。その種の欲望に結びつく奇想の流れのようなものは、ずっと私の中にはありました。

80年代には、洗濯屋をやりながら山谷に通うようになる。それこそ寄せ場では、具体性ということ以外、何もないですからね。仕事にあぶれた日雇い労働者のオッサンたちに対して、抽象的な理屈を言ってみたって、まるで歯が立たない。大学の活動家たちが振りかざすような大げさなスローガンというのは、具体的な状況の外側から大言壮語しているだけのことです。ドヤ街の立ち飲み屋で酒を飲んで仕事して、その辺の路上で死んでしまうかもしれないような人たちに向かって、そういうものすごく具体的で即物的な現実の中から行動が沸き出すような質の言葉を、どうやって突き出すかということが問題でした。

学生活動家がそのままの気分で、釜ヶ崎や山谷へ一度くらい行ったところで、オッサンたちに罵られるか、ぶんなぐられるしかないですね。本当に表情が変わるくらいでなければ、そこに居られるわけではないので、「学生さん」って言われちゃうだけのことです。藤本義一という人は野坂昭如系のエロい小説をたくさん書いていますが、「宝島」という雑誌が出始めた70年頃、創刊号だったか釜ヶ崎の暴動を扱った「セイガクドブ」という小説を載せる。当時釜ヶ崎では、学生っぽい連中は「セイガクドブ」と呼ばれていました。学生が労働者っぽい格好をして釜ヶ崎に行っても、顔つきも違えば、手も汚れてないし、目つきや、歩き方、言葉使いなんかですぐわかっちゃうんですね。そういう学生っぽさをからかいながら、それでも爆発する日雇いたちの活力を描いた面白い作品でした。そういう具体的な場の中から自分の皮膚感覚みたいなものを鍛え直して、そこからステレオタイプな運動を飛び越えるような形やスタイルといったものをどう作るかということに、ずっと興味がありました。

さっきも言ったコタツの例を出すと、80年代末に天皇ヒロヒトが死んだ頃に、早稲田大学の文学部の学生を中心にして、「秋の嵐」という活動家のグループができました。当時、原宿にまだ歩行者天国がありました。そのグループが最初にやったのは、歩行者天国の真ん中にコタツを置いて、私と反天皇制連絡会の天野恵一さん、それにアウトノミアや自由ラジオ運動、ガタリやネグリなどを最初に紹介した一人である粉川哲夫さんの3人を座らせて、コタツ・シンポジウムをやるということでした。思えばこれが、日本の運動シーンにコタツが持ち込まれた最初の「歴史的瞬間」でした。もちろんコタツに電気なんか入っていないですから、真冬の寒い時期の路上でそんなことをやらされて、正直言って、こいつら一体何を考えているのかと思いました。ただ、この発想は面白いなあと思いましたね。（*6）

コタツって、まあ「日本的」じゃないですか。それまでの批判的な運動というのは、コタツがあるような

昔ながらの家といった、そういう日本的な空間とは限りなく距離を取りたいという人たちの営みだったわけです。そういうものがきれいになくなりつつあった東京の80年代の、しかも最先端のファッション・エリア原宿の真ん中にコタツを持ち込んだら。これはファッション業界の人たちからすれば、ダサいもいいところですよ。こういう発想というか、「コタツの運動史」が延々と続いてきて、六本木ヒルズ前の路上のコタツと鍋が出現する。それが今日の「素人の乱」にまでつながっていったんだろうと思います。

そういった具体的な場所や空間への転覆的な配慮が、今とても重要だと思っています。日本の運動は抽象的な論理や歴史的脈絡にはこだわっても、そうした場所のもつ「磁場」をバカにしていましたね。現場の人たちはまた違いますよ。三池闘争のような炭鉱や、工場での労働運動だって、具体的な場所がなければできないわけがないので、だからこそ、とんでもなく面白いことが起きた。そのことをどんどん忘れていった果てに生じたのが、党派間の「内ゲバ」だと思います。やはり、そうした具体性を手放してしまったら、もうお終いだと思うからこそ、路上を「生産点」として考えたいというところがありますし、一見、何も生産していないかのように見える人たちが行っている創造的な「生産」にこそ注目しなければならぬと思っています。

渋谷望さんが『魂の労働』の中で介護労働について言っていることにもつながるのですが、80年代にいかがわしい週刊誌では、歌舞伎町界隈の風俗店で働いているお姉さんたちの仕事のことを「射精産業」と言っていました。これは何を「生産」していることになるんでしょうね。何かを生産するどころか、逆に、いかにして男性客に無駄なエネルギーを使わせるかということをして仕事にしているわけです。彼女たちの多くは30代から40代で、子供を抱えて埼玉県や千葉県に住んでいる、母子家庭のお母さんたちです。私が仕事で洗濯物を持っていくと、彼女たちに「洗濯屋のお兄ちゃん」とか言われてかわいがられました。そうかと思うと代金をごまかされたりする。そうやって、こっちもしたたかになっていくうちに、いろいろと世間話ができて、面白い話が聞けるようになるわけです。おそらく、思想が鍛えられるというのはそういうことなんですよ。

「素人の乱」の松本くんは、東京の下町で育った人だけれども、「素人の乱」の運動からはそういった自営業者や職人のセンスが滲み出ている。ですから、高円寺の駅前商店街のさびれた店を借りて、皆でリサイクルショップなんかを始めることに何の抵抗もないんですね。そういったことは、実はかつてもあった。もう亡くなってしまいましたが、釜ヶ崎で労働者向けに安いラーメン屋を始めた活動家がありました。運動が具体性を失ったということは本当は一度もないはずですが。その触感をもっと言葉にすれば後の人たちにも伝わるはずだし、そこからまた、次の運動が生まれてくるはずだということを、私はずっとと思っています。

「素人の乱」の運動自体がそれまで誰も思いつかなかったようなものですが、そういった思いもかけないようなことが出てこなければ本当は運動じゃないんです。そういう意味では、私にとって寄せ場の経験というのは歌舞伎町と同じくらい大きなことでした。寄せ場というのは、単にそこに住む日雇い労働者が悲惨な労働をさせられて、大酒を飲んで死んでいく場所というだけではない。そこにも人々の喜びや憩いがあり、共同の営みがあったんですね。大阪の釜ヶ崎や横浜の寿町は家族持ちも住んでいた。そういうことは当然ありましたし、孤独な男たちの街・山谷でさえ、やはりそういうことがありました。

そういったつながりがあればこそ、山谷の日雇い労働者たちの運動は、職業的な暴力集団であるヤクザからひどい目にあわされたりしても、なんとか持ちこたえることができたということがあります。ネグリたちに言わせたら、それこそが「コモン(共)」であり、共に生きるということだということなのかもしれません。そのような「コモン(共)」というか、文字通り、人々が寄せ集まる場所という意味での「寄せ場」の萌芽のようなものが、この社会の中でどのように新しい形で生みだされるのかが、自分にとって切実な関心としてあります。ぜひ、その方向に向けて動きたいという強い欲望が自分の中にあります。

赤木智弘との「出会い」から考える

朝日新聞社が出している「論座」という雑誌で、赤木智弘という人が書いた『丸山真男』をひっぱたきたい」という文章が、最近、話題を呼びました。このタイトルは編集者がつけたようですし、怪しげな仕掛けの中で彼の書いた文章が話題になったということがあるようですが、本人はそれほど意識していたとは思えません。(＊9)以前、アジア太平洋資料センターのPARC自由学校の講座で、赤木くんや雨宮処凛さんとの座談会に呼ばれました。その時、初めて彼と話したのですが、彼は閉じられた世界の中で生きている人です。私の父親が生まれた故郷が栃木県の南の方なのですが、彼も栃木の生まれで、高校を出て東京のIT技術専門学校に通う。コンピューターにデータを打ち込むオペレータの技術を学んでいたそうです。そこを卒業した後、しばらく東京で働いていたのですが、生活できなくて栃木の実家に帰ったということでした。

彼は、実家の近くのコンビニで時給700円で働いていると言っていました。コンビニで働きながらブログをやったりなんかしているうちに、そこで書いた文章が編集者の目に留まったことがきっかけで、「論座」に書くことになったという話でした。彼の文章は、はっきり言って、論文と言うには恥ずかしいものです。論理としてはまるで穴だらけ。それを批判するのはとても簡単なんですけど、しかし彼の書くブログの向こうにいる、ネット回線に繋がる膨大な人々の存在を無視できないという気がしています。そう意味では、別に論客としての彼に注目しても何の意味もありません。彼がやっているブログは、2ちゃんねるに近いような循環する独白のような文体ですが、それでも2ちゃんねると違い、彼には自分の名前を出してやっている潔さがある。その背後にある世界を窺うことができただけでも、彼と出会えてとても良かったと思っています。

彼の言っていることは、今のような社会のあり方を否定したり、批判しようとするのではなくて、ただひたすら「依存」したいということなんです。自分のような救いようのない、時給700円の稼ぎで一生暮らしていくしかない人間にとっては、東京に出ること自体が夢にすぎない。東京で暮らすためにはアパートを借りる保証金をつくる必要がある。それには親を置いていくしかないが、それさえできない。そして、自分のような人間が生きていけるように、せめて社会保障や福祉の制度設計を作り直してくれというのではなく、彼がひたすら望んでいるのは、団塊の世代が貯めこんだ退職金を自分のような人間のために吐き出して欲しいということなんです。一方で彼は、エリート層の女性と結婚して「ヒモ」になりたい。それも無理なら戦争になった方がまだましだといった、身も蓋もないことを主張しています。ヒモになりたい

ということ、高級なデカダンス文学の文脈ではなく、ただ単に個人的な文脈で言っている明け透けさには驚きましたが、それだけ彼の気持ちが切実だということは確かだと思います。

私は彼とのやりとりの中で、「なぜ、君はタテに依存するのか。せめてヨコに依存しろよ」と言いました。「依存」というのは神経症です。だから「自立しろ」というのはまったくの抑圧にしか聞こえない。「依存」から抜け出せないのなら、少なくとも「フリーター」同士で依存し合う方がましだろう。支え合えばいいじゃないかと言ったのですが、彼はその場では、ひたすら同じことを言い続けるだけでした>(*10)彼の文章を「論座」が取り上げたこと自体が驚くべきことで、そのぐらい、今、論理ということが後退しているのだと思います。現在、戦後から80年代ぐらいまでかろうじてあったような、私たちが依拠していた社会や世界、歴史などを論じる言葉の体系そのものが崩壊したということだと思います。

ただし、そういったものが崩壊したということは、必ずしもマイナスだけではない。今、生きている若い人たちがどのような言葉を持ち、どのように閉じられた世界に生きているのか、ということについての感覚を敏感に持たなければならないと思います。若い人たちが閉じられた世界にいるというのは、アウシュビッツのような形で閉じ込められているというのではなく、一人ひとりが自由に動いているように見えて、実は「出口」が見えないまま、個々バラバラに生きているということです。この感覚が分からないと、言葉を交わすことさえできないのではないのでしょうか。そのように、今、40年前と同じ言葉を話すことが、どんなに危険で暴力的なことか。そういう繊細さを持たないという意味でも、山本義隆や島泰三が書いた本には非常に落胆したわけです。

赤木智弘が書いているのは本当にただの眩きですね。ただの「垂れ流し」というか、携帯メールのようなぶつ切りの論理で、センテンス一つ一つが何もつながっていないのです。そういう孤立した感覚の孤島にいる人たちがどうやって自分の言葉を見つけるのか。しかし、それを上から説教するようなことは、自分にはどうしても考えられない。自分が生きているはずの社会を語る既成の語彙が崩壊している以上、そうしたぶつ切りの論理や言葉しか出て来ないという必然性は理解できます。彼のような人に対して、「歴史を知らない」とか、「戦争をしたがる連中に利用されるだけだ」と上から言ってみても、それ自体は正しいとしても、ほとんど通じないだろうと思います。共通する言葉が生まれるような具体的な場をどうやって創り出すのが、重要ではないかと強く思っています。

かつて永山則夫は1968年に4人の見ず知らずの人を銃で殺して、その翌年に逮捕されましたが、赤木智弘の場合は、最初から自分自身に銃口を向けているように思えてなりません。

◇「遠来の友」としてネグリを迎えたい

平井さんとしてはこれからの日本の運動の課題について、どのようにお考えですか。また、それと深く関わることだと思うのですが、3月に予定されているアントニオ・ネグリの来日に際して、平井さんも彼を迎えるためのイベントを企画しているとのことですが、ネグリを迎えるに当たっての平井さんの意図するところや思いを聞かせてもらえればと思います。

マルクス主義の「亡霊」の消えた今こそ、足下の「資源」の継承を！

世界中でいろいろな運動が起こっているのに、日本ではどうしてここまで停滞しているんだろうといった質問が、学習会や討論の場では必ずと言っていいほど出てきます。そのような質問に対しては、例えば、天皇制の存在だとか、市民社会の未成熟だとかいくらでも答えを挙げるができるでしょう。

これは、〈68年〉とは何だったのかという問題とも関係することなのですが、〈68年〉について語られる際に、その時代の「世界同時性」ということだけが華々しく取り上げられてしまいがちです。しかし、実際には歴史の外で生きられるわけではない。何を「歴史」として捉えるのかということ自体を、再審する必要があるとしても、60年代以前にも日本共産党やアナキストたちの動きなど、さまざまな運動があったはずですが、そうした運動の継承性や歴史性といったことは、常に忘却されてきました。例えば、新左翼は共産党を否定することから始まっていますが、そこには全く継承性がなかったのかといえば、そんなはずはないんです。

全共闘運動の指導者たちではない、その末端にいた大衆活動家の全共闘運動があったはずだし、その方がよほど大事だと思うのと同じように、今、私が興味を持っているのは、幸徳秋水や大杉栄といった、左翼運動の黎明期を創ってきたスターたちではない、自由民権運動や平民社の末端にいた人たちです。そのような意味で、私は、荒畑寒村という人に興味があります。幸徳秋水や、大杉栄といった人たちは女性を引きつける魅力があり、華々しく活動して小説や映画にも取り上げられたりしていますが、平民社やその周辺には、私が「ミッキーマウス」の本で書いたネズミのような人間たちがたくさんいる。荒畑寒村はその一人です。

彼は平民社の中で一番若いメンバーで、17、18歳の頃に足尾銅山で騒動が起きるとそこに駆けつけて、ジャーナリストとして記事を書いて送りました。彼は、足尾鉍毒事件に生涯を捧げた田中正造とも深いつきあいがあって、岩波文庫にある『谷中村滅亡史』という足尾鉍毒事件の本を書いています。寒村はロシア革命直後のモスクワに向かい、シベリア鉄道に乗ってタイガの大地をひたすら西へ走る列車の窓から、流刑されて凍土の下に死んだナロードニキやアナキスト、オールド・ボルシェビキたちの生涯を思うわけです。そうやって着いたモスクワで共産党大会やメーデーに参加して、6年目の革命に黒い影を見えています。これが1923年のこと。彼はナロードニキ、アナキスト、マルクス主義者たちを共通してとらえたような初発の衝動から、もうボルシェビキの内的崩壊を予感していたんです。おそらく、だからこそ全共闘初期の解放性に大きな共感を示したんじゃないか、と思うんですね。

新左翼は共産党を否定することから始まったわけですが、1920年代に日本共産党が結成されてから運動的にマイナスしか残さなかったかといえば、決してそうではないはずです。明治末の自由民権運動と困民党騒乱の敗北後、大正期に大正アナキズム運動が登場して、さらに日本共産党が結成され、徹底的に弾圧される。占領期に戦後革命の激しい社会闘争が展開されて、武装闘争まで行く。そして55年の「六全協方針転換」後に、戦後世代による新左翼が生まれる。こうして60年安保反対運動から70年代にかけて新左翼の時代が出現するわけです。若き活動家たちは、その度ごとに、絶えず前の世代の運動を否定することによって現れる。そうした傾向はとりわけ、新左翼世代に顕著です。原理主義化した党派たちがほぼ崩壊した今は、この循環から抜け出す好機だと思います。自分たちの足下にせっかく埋蔵されている貴重な運動資源をどう発掘していくか——という問題意識と重ね合

わせていかないと、いくら反ネオリベや反グローバリズムを唱えたところで、外来の流行思想をそのまま唱えているだけに終わってしまうのではないかと思います。

前回の「アンラーニングプロジェクト」の学習会のタイトルにも、「背後の未来」というアーレントの言葉が引かれています。「歴史の天使」は後ろ向きになったままで前方へと吹き飛ばされるという、ベンヤミンの有名な歴史についてのテーゼがあります。そのように、過去の出来事に未来の可能性を見るという姿勢が大事だと思います。今ようやく、ボルシェヴィズムやロシア革命だけでなく、マルクス主義、毛沢東思想、第三世界等の全部ひっくるめて、自分たちを呪縛してきたマルクス主義の亡霊がいったん消え失せるという状況になりました。そのように、私たちを強く束縛してきた構図が一度、完全に吹き飛ばされるという時代になって初めて、過去の運動を自分たちの資源として、そこに自分たちが未来につくりだそうとする運動の萌芽を見るということが可能になってきたのではないのでしょうか。（*11）先ほども言った、赤木智弘の文章は論理的には支離滅裂な吐きにすぎないけれども、そういう眼や耳で受け止めると、一揆寸前の百姓たちの自暴自棄な言葉にも聴こえてくるんです。

「コモン」の場として「ネグリ歓迎イベント」へ

さて、アントニオ・ネグリの初来日の話ですが、これは放っておけば、ネグリという有名な思想家が日本に来て、彼を囲んで東大や京大といった大学知識人が集まってシンポジウムを開くというだけのことに、絶対になってしまうだろうと思いました。そういったネグリ思想のアカデミズムへの囲い込みをいかにぶち壊して、違う方向に持っていくかということだけが、ネグリの歓迎プロジェクトに関わる上での私のモチーフです。

東京芸術大学の先端芸術学科に木幡和枝さんという先生がいます。彼女は、先ほども言った「プランB」というライブスペースを運営しながら、世界中のフリージャズ音楽家の招聘やパフォーマンスに関わってきた、純粋なアカデミシャンというより、むしろそうした表現活動を支えてきた貴重な人です。彼女は、学生時代に上智大学で英語を学んで、私も読みましたが、アメリカの黒人解放組織ブラックパンサー党の文献を翻訳し紹介した人でもあります。彼女は、最も良い意味で〈68年〉世代の活力や解放感覚を失っていない人です。その彼女から、「せっかくネグリが来るんだから、もっと面白いことをやりましょうよ。あの人たちにやらせるとつまらないことにしかならないわよ」と言われて誘われたのが、事の発端。もちろん、私は二つ返事で賛同しました。芸大では、東大や京大では出会えないような人たちを、ぜひネグリに合わせようという一連のイベントを企画しました。そこでは、六本木ヒルズの前でコタツで鍋会をするような人たちも含めて、「大ラウンドテーブル」のディスカッションを催そうと思っています。まあ、ネグリを囲んで、皆でコタツに入るというのも面白いのですが。

芸大での「大ラウンドテーブル」の前日に、東大の安田講堂で姜尚中さんと上野千鶴子さんを交えたシンポジウムをやるのですが、安田講堂にネグリが来るということ自体がすでにパロディですよ。でも、それをそのままやってしまうのでは、ただ東大の「度量」を示して箔を付けてしまうだけの話です。ネグリの講演会には千人ぐらいの人が集まるだろうと思いますが、今や東大でも、人文社会科学系の

大学院を卒業しても行き場のない、いわゆるオーバードクターがたくさんいて、フリーターと化しています。そういった現状について何もしないで、ネグリの講演会に来るような人たちに、芸大「ネグリ饗宴」の宣伝を兼ねて、その場でアジテーションをしようと思っています。

最初は、何人かでヘルメットをかぶって安田講堂に突入しようと思ったのですが、それではさすがにシャレにならない。東大と芸大は近いので、安田講堂から芸大まで無届けのサウンドデモをやる予定です。そういう形で、東大でのネグリの迎え方に対して、批評行為をしたいと思っています。

芸大の連中には何よりも手の技術があるわけです。ネグリ歓迎プロジェクトの案内チラシやホームページも彼ら／彼女らがつくったのです。東大や京大の人たちは、プロジェクトに乗っかっているだけのことで、東大や京大の人たちはそういった準備に動いていない。芸大での「ネグリ饗宴」には、芸大の外からも訳の分からないような人がたくさん来ていますが、私が「ミッキーマウス」の本に書いた、90年代の半ばに新宿駅西口地下通路に群生した段ボールハウスに絵を描いた武盾一郎(たけじゅんいちろう)という人も、そこに関わっています。そのように、「ネグリ饗宴」自体を、一つの「コモン」の場として作りだしたいと考えています。

私がネグリから直接、聞いてみたいと思うことがいくつかあるのですが、彼の父親はイタリア共産党の創設者の一人で、ムッソリーニのファシズム時代に投獄されて殺害された人です。戦後、彼は母子家庭で育ち、とても貧しかったそうですが、高校や大学時代は、底辺労働者たちの運動に関わっているようです。そのような経験が彼の根底にあったからこそ、60年代から70年代にかけてイタリアで、「アウトミア運動」と呼ばれる、党ではなく、労働者自身の価値創造性から始まる運動に関わっていくようになったのだと思います。

ネグリが「帝国」や「マルチチュード」といった本を書いている背景には、そうした貧しい幼年時代の体験や、経験してきたさまざまな運動現場での経験があるように思います。それこそ、先ほど言ったような、日本の学生活動家が寄せ場に行っても、顔つきが変わるぐらいでないと通用しないといった体験もしてきたのではないかと。そういう自分の思想を鍛え直すような日々を潜り抜けてきたからこそ、彼が今言っている「帝国」や「マルチチュード」、「コモン」といった言葉が生まれたのではないかと考えているのです。概念だけでは骸骨にすぎない。彼からはぜひ、その辺のことを引き出せたらと思っています。とにかく、有名な知識人を迎えてご高説を仰ぐというのではなく、「遠来の友」として日本の路面から彼を歓迎することを試みたいと思います。

ハリー・ハルトウニアンという日本研究者がアメリカにいます。その人が中心になって編集された、バブル崩壊以降の90年代の日本のことを論じた「ジャパン・アフター・ジャパン」という本があるのですが、来日に際して、ネグリにはその本を読んでもらっています。その本の中で、私たちにとても近いところにいる人たちが、日本の新しい運動について紹介しています。先日、彼がその本をむさぼるように読んでいるというメッセージが、彼のパートナーの女性から届いたばかりです。(＊12)

〈註〉 なお、以下の「註」は、編集者によるものである。

*0 90年代から07年までの〈68〉年論については、以下のものが目にとまる。

—備考

刊行年	著作者	書名(出版社)	分類	
1998	武藤一羊	「社会運動分水嶺としての68年」 (「20世紀の政治思想と社会運動」(社会評論社)所収)	史論	
1998	シリーズ20世紀の記憶 (西井一夫編)	(第1回配本)「バリケードの中の青春1968年」(毎日新聞社)	グラフィティ	
1999	佐伯隆幸	「現代演劇の起源」-60年代演劇的精神史」(れんが書房)	史論	
1999	シリーズ20世紀の記憶 (西井一夫編)	(第7回配本)「狼たちの時代1969-78年」(毎日新聞社)	グラフィティ	
2000	「映画芸術」 3月号	「足立正生 零年」	再録・記録/ 〈68〉年への ／からの視線 の交錯	
2001	立松和平	「光の雨」(新潮社)	フィクション	01年 映画化
2001	平沢剛	「アンダーグラウンド・フィルム・アーカイブス」(河出書房)	アーカイブス	
2001	「文芸」別冊	「赤軍 RED ARMY 1968-2001」 (河出書房)	再録・資料/ 視線の交錯	
2002	四方田犬彦	「ハイスクール記 1968年」	回想録／回 顧録	04インタビュー／04対談: 平井玄
2003	足立正生	「映画／革命」平沢剛インタビュー	回顧録／ロン グインタビュー ー	03対談:酒井隆史

2003	「情況」別冊	「特集 足立正生」	視線の交錯	平井「ひとつのタイムマシン」 足立「それじゃ浦島だ」
2003	「情況」7月号	「特集 68年革命と全共闘」	視線の交錯	
2003	矢作俊彦	「ららら 科学の子」(文芸春秋のちに文春文庫)	フィクション	対談:高橋源一郎 書評:高橋/上野/平井
2003	A・ネグリ	「ネグリ 生政治的自伝ー帰還」(作品社)	杉村昌昭訳	
2003	絳秀美	「革命的な、あまりに革命的なー1968年の革命」史論	史論	00-02年にかけて「早稲田文学」に連載
2003	B・ベルトリッチ	「ドリマーズ」(03フランス)	映画	04-06年日本公開
2003	M・ベロッキオ	「夜よ こんにちは」(03イタリア)	映画	
2003	M・トウリオ・ジョルダ ーノ	「輝ける青春」(03イタリア)	映画	
2004	赤瀬川原平	「芸術家・赤瀬川原平は、いかに時代をくぐり抜けたのか」(「美術手帳」04・8)	榎木野衣対談/回顧録	中平卓馬「80年安保はどうなっているか」
2004	海老坂武	「かくも激しき希望の歳月1966-1972」(岩波書店)	自伝3部作の2作目	
2004	大島渚	「大島渚1968」(青土社)	ロングインタビュー/回顧録	
2005	絳秀美他	「LEFT ALONEー持続するニューレフト『68年革命』」	絳によるインタビュー	映画:井上紀州「レフト・アローン」のインタビューの部分の収録
2005	絳秀美編	「1968年」	史論	
2005	高須基仁	「散骨」(光文社文庫)	フィクション	02-04年雑誌に連載
2005	平井玄	「ミッキーマウスのプロレタリア宣言」	戦闘宣言!?	書評:池田/平岡 対談:渡部
2005	島泰三	「安田講堂 1968-1969」(中公新書)	ドキュメント	
2005	F・ガレル	「恋人たちの失われた革命」(05フランス)	映画	

2006	山口文憲	「団塊ひとりぼっち」(文春新書)	史論	
2006	小坂修平	「思想としての全共闘世代」(ちくま新書)	史論	
2006	鴻上尚史	「ヘルメットをかぶった君に会いたい」(集英社)	フィクション	04年から雑誌連載
2006	大崎善生	「タペストリー ホワイト」	フィクション	
2006	絃秀美	「1968年」(ちくま新書)	史論	
2006	高祖岩三郎	「ニューヨーク烈伝」(青土社)	ニューヨークをめぐる／における運動 史論	06年から雑誌に連載
2006	府川充男編	「ザ 1968」(白順社)	史論・当時の資料	
2006	石川好	「60年代って何？」(岩波書店)	「双書:時代のカルテ」	
2007	府川充男	「ザ 1968」(白順社)	史論・収録	
2007	ガタリ+ネグリ	「新しい自由の空間」(世界書院)	杉村昌昭訳	85年の再訳・再刊
2007	鴻上尚史	「僕たちの好きだった革命」(「せりふの時代」07春号)	フィクション 台本	
2007	鈴木道彦	「異郷の季節」(みすず書房)	復刊	
2007	鈴木道彦	「越境の時 1960年代と在日」(集英社新書)	史論	
2007	編集委員会	「少数派労働運動の軌跡」(金羊社)	史論	
2007	ヒキタクニオ	「不器用な赤」	フィクション	
2007	高橋武智	「私たちは、脱走アメリカ兵を越境させた」(作品社)	ドキュメント	
2007	NHKBS2	「日めぐりタイムトラベル『昭和43年』」	TV	日大全共闘をめぐって
2007	渡辺眸	「写真集 東大全共闘 1968-1969」(新潮社)	写真集	寄稿(山本義隆)

- *1 平井玄さんの「高校全共闘」体験については、「〈東京全共闘少年〉論」（「批評精神」No.5）—「路上のマテリアリズム」（社会評論社・86）参照。また、四方田犬彦「ハイスクール1968」（新潮社・04）をめぐっての四方田／平井対談「少年たちの68年」（「週刊読書人」04・1・30）参照。
- *2 この点についての平井玄さんの90年代末の言及としては、「東京的無意識」（「現代思想」00年10月号）参照。なお、これは後に「階級的無意識」と改題されて、「暴力と音」（人文書院・01）に所収されている。また、同書所収の「甘く苦き新しきプロレタリアートへ」参照。
- *3 金井美恵子が朝日新聞社の広報誌「一冊の本」で連載している「目白雑録」というエッセイの中で、「ミッキーマウスのプロレタリア宣言」と、平井玄さんの「グラフィケーション」誌上での連載エッセイ「ぐにゃり東京」のことが好意的に紹介されている——「目白雑録2」（朝日新聞社・06）所収。また、渡部直己は、『ミッキーマウス』は実は小説ではないのか」と言っている。——渡部直己「面談文芸時評番外編」（「新潮」06年6月号）
- *4 2000年代に入ってから平井玄さんの「フリーター」論としては、「亡霊的プロレタリア」（「現代思想」05年1月号）参照。
- *5 平井玄「街路の世界性」（「現代思想」03年10月号）参照。
- *6 その「歴史的瞬間」の記録写真は、見津毅「終止符からの出発」（インパクト出版会・95）のP19に収録されている。
- *7 松本哉と「素人の乱」については、松本哉「貧乏人の逆襲！」（筑摩書房・08）、松本哉／二木信（編集）「素人の乱」（河合出書房新社・08）、松本哉「貧乏人大反乱」（アスペクト・08）参照。
- *8 「フリーター全般労組」については、その「機関誌」（?!）である「地球公論」参照。また、山口素明

×塩見孝也×三上治『『プレカリアート運動・現在』と『60代運動・経験』の対話』（「情況」08年9月号）

参照。

*9 赤木智弘『『丸山真男』をひっぱたきたい。31歳フリーター。希望は、戦争。』（論座・07年1月号）

*10 この座談会は、「PARC自由学校07」の講座『『不安社会ニッポン』を生きる』中の「ロストジェネレーションの闘争／逃走論」（07・9・29）として行われたもの。また、赤木智弘「若者を見殺しにする国」（双風舎・07）参照。

*11 平井玄さんはこのような発想に基づいて、08年11月に私・たちの企画：「米騒動から90年——私たちは『米騒動』から何を受け取るか？」に参加してくれた。その折りの発言については、いずれパンフ化する予定。

*12 残念ながら、ネグリの日本訪問は彼の来日の直前に、法務省が入管上の書類を要求するという日本政府の妨害によって実現しなかったが、芸大での「ネグリ歓迎イベント」は当初の予定通り、08年3月29日と30日に全てのプログラムが行われた。また、3月30日の「大ラウンドテーブル」では、電話回線を通じて、会場とネグリとの討論がおこなわれた。その直後の座談会「マルチチュードからコモンへ」（「現代思想」08年5月号）参照。

	36	46	56	66
ii - a	(S・11)	① (H・Y)	64 高知～	② (K・J) 68 富山
埴野謙一年表 〈背後〉の未来が現在と出会うとき	個人史	「戦後青春」の範型の下で	教育への幻想 60年安保闘争 フルシチョフ「スターリン批判」 「ハンガリー革命」ソ連による弾圧 56 カストロらキューバへ 吉本・武井「文学者の戦争責任」	北川四郎個人救援会 地域反戦―地域救済 富山大学闘争 新左翼潮流の地域化 チェ・ゲバラの呼びかけ「2つ、3つ、…」 アカデミズムへの違和と離反
	48	全学連	再生	日共との対立
ii - a		55 日共「6全協」	57 58 59 砂川闘争 全学連安保阻止行動で国会乱入 「共産主義者同盟」(フロント)	60年安保闘争 65 「三派全学連」結成 「ベ平連」結成 ベトナム反戦運動の展開 政治党派の離合集散 三井・三池闘争 66 前記大学闘争(早稲田など) 67・10・8 佐藤訪米阻止羽出闘争 ベ反委日特金突入 69・11 政治決戦―佐藤訪米阻止闘争 69・6 アスパック粉砕闘争 69・4 沖繩闘争 69・1 安田講堂攻防戦 69・3 三里塚・王子・新宿騒乱/東大・日大: 大学闘争―全共闘運動の全国化 ベトナム反戦の全国政治闘争化 佐世保 68・2 金嬉老事件 68・10 永山貝
ii - c	「同時代」史から 同「時代」史へ そして再び「同時代」史へ	社会運動の古典的範型―急進化 反日共	急進化の純化と古典的範型の解体との緊張 白立主義 vs 前衛主義	〈68〉 直接行動 党派×全共闘運動 全国政治闘争 vs 「社会」闘争 決戦主義 vs 行動的快樂
	にそくして 社会運動問題史 日本における (註・6)			

③

〈極私〉的終焉

④

集団形成

⑤

〈H・Y〉の死

⑥

一人の〈浦島太郎〉として

刑事弾圧

「新しい運動」への親和と違和

日カバ労組とふれあい「遊学塾」結成

「地域を拓くシンポジウム運動」

地域反原発・反学校管理運動

反公害・開発地域住民運動の衝撃

運動者集団を

党派でもなく個別運動体でもなく

大学闘争〈極私〉的終焉

政治への介入(87↓91↓95↓96・・)と展開

の全体化作用の創出へ向けて)

社会運動の構造化へ向けて(社会運動に対す

新しい生のスタイルの創造へ

運動者集団に深度を「創造的失業者」を

認められなかった問題を認めさせるように

聴かれなかった声を聴こえるように

抵抗——その限界

地方自治体のネオリベラル的再編への批判

「暗い森」をさまよって」

99↓03)「どこまで異星人たり得るか」

地域政治への介入の継続(97——)

創り出すことへ

保証されざる者の(生・労働・運動)を

ネオリベラリズム批判の模索

大学闘争の終焉

新左翼の拡散

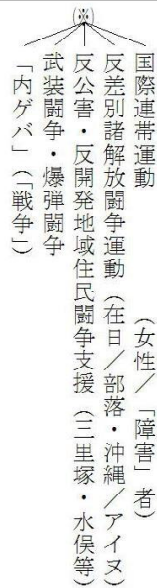
「新しい社会運動」という枠組み

「社会運動」のすみわけ(?!)

反ネオリベ
反グローバリゼーションの模索

運動の分岐(※)

- 69・6 アスパック粉砕闘争
- 69・11 「政治決戦」—佐藤訪米阻止闘争
- 70・6 反安保6月闘争
- 70・7・7 華青闘新左翼批判
- 71・11 ウーマンリブ大会 性差別告発
- 71・11 沖縄「返還協定」批准阻止闘争
- 72・2 連合赤軍浅間山荘銃撃戦
- 72・5 佐山事件差別裁判糾弾闘争
- 74・8 三菱重工爆破
- 74・5 東アジア反日武装戦線一斉逮捕



「新しい社会運動」という枠組みへの

70年代後半〜80年代にかけて資本主義の変容

(+エコロジー/反原発/反学校管理など)

80年代末「既存社会主義圏」解体

新自由主義(ネオリベラリズム) グローバリゼーション

70年代末〜80年代半ばサッチャー/レーガン/中曽根(サービス・情報化/消費過程の包摂)

94メキシコ「サパティスタ」の蜂起

99アメリカ「シアトルの乱」反ネオリベ/グロー

01アメリカ「同時多発テロ」

02「イラク戦争」—日本参戦

03「イラク反戦運動の世界的展開」

90年代後半からネオリベラリズム「構造改革」・パリゾムの世界的前進 01世界社会フォーラム始まる

「戦争国家」形成の加速度的展開

反G8へ

「生・労働・運動」の開花

反貧困ネットワーク

「プレカリアート」/「フリーター」運動の胎動

この頃左翼少数派組合の分裂続く

永山則夫事件

ポスト〈68〉

ポスト〈68〉をこえて

緊張

大学闘争—学生反乱

「会」闘争の自立
的快楽主義

急進化の残存
範型それじたいの解体

党派でもなく個別運動体でもなく生の新しいスタイルの創造

新しい「社会運動」の「制度化」

「新しい社会運動」への親和と違和

「社会(的工場労働者)運動」

新しい範型の模索

「新しい社会運動」のNPO・NGO化—半「革命」

社会運動の構造化へ向けて地域政治への介入

反ネオリベ/グローバリズム(生・労働・運動)の模索

「アンラーニングプロジェクト 07 第Ⅱ期

「〈背後〉の未来が現在と出会うとき

——浦島太郎物語」での論議から

12月2日、「アンラーニングプロジェクト 第Ⅱ期」では、「アンラーニングプロジェクト」を主催している「生・労働・運動net jammers」のメンバーである埴野謙二さんをお話し手に迎えて、学習会を行いました。

今回の学習会では、広い意味での社会運動に関わるようになってから、富山に来る60年代末の時期までの埴野謙二さんの「個人史」を、同「時代」史と重ねあわせながら、3時間余りにわたって語っていただきましたが、このニュースレターは、その話の中でとりわけ重要だと思われることをまとめたものです。



◇ 埴野謙二さんの話から

「背後の未来」としての〈68年〉

誤解はないとは思いますが、私は昔話をしたいわけでも、「武勇伝」を語りたわけでもありません。今回の私の話のねらいとしては、「アンラーニングプロジェクト」の学習会の中で渋谷望さんや小倉利丸さんが話してくれたような、ようやくこの国でも登場してきた全世界的な反ネオリベリズム／グローバリゼーションのうねりに連なるような動きを、日本の社会運動の流れといった長いスパンの中に据え直してみたいということがあります。

まず最初に、『「背後の未来」が現在と出会うとき』という今回の私の話のタイトルについて、話したいと思います。「背後の未来」というのは、もちろん私が作った言葉ではなく、ハンナ・アーレントという、深い洞察に満ちた政治についての考察を繰り広げた政治哲学者が使った言葉だそうですが、その言葉がどこで使われているのか私は正確には知りません。それではその言葉をどこから取ってきたのかということですが、イタリアにパオロ・ヴィルノという人がいて、「君は反革命を覚えているか」という文章の中で「背後の未来」という言葉を使っているのです、それをそのまま使わせてもらいました。この「反革命」という言葉をヴィルノがどのように使っているかが大事なことなので、そのことについてちょっとふれたいと思います。

国家や既成の社会の秩序の転覆・破壊をねらうような革命運動に対して、それを国家権力の側が暴力的に押し潰したりするような動きのことを、普通、「反革命」と言うわけです。そのような意味に加え

て、ヴィルノが言っている「反革命」というのは、「反転された革命」ということなのです。つまり、革命や社会運動の側の力を逆手に取って、運動の側が問いかけている問いやそれに対する答えを国家や資本の側が取り込み、流用することで、秩序の維持や支配のために使っていくことを、ヴィルノは「反転された革命」という意味で「反革命」と言っているわけです。1968年をピークとする世界各地のいろいろな動きが最後の輝きを放ったのが、小倉さんの話の中にも言及されていたイタリアでの1977年の「アウトノミア」運動の展開であるわけですが、ヴィルノが言う「反革命」というのは、1980年代のイタリアや、この間の日本などで、そのような運動のもっていたパワーを支配の側が「盗用」してネオリベラリズムが展開されていくような状況を具体的に指しています。

最近、1968年という年にカッコをつけて、〈68年〉という言い方がされることが多いのですが、1968年というのは、ベトナム戦争に反対する反戦運動が全世界で同時代的に展開され、同時に、学生を中心とする若者の反乱がまるで申し合わせたかのように一挙に噴出した年です。日本に即して言うと、普通は1960年代の半ばから70年代の始めまでの数年間の時期を〈68年〉という呼び方で言っていますが、日本でも、ベトナム反戦運動や大学を中心とする学生の叛乱といったものが活発に繰り広げられたわけです。当時の高揚した気分や、世の中が激動しているといった雰囲気、今、伝えようとするのはなかなか難しいのですが、そのように、かつて無いほど世界中が同時発生的に大きく揺れている時期でした。

もう一度まとめて言いますと、〈68年〉というものが持っている潜在的な可能性がまだ全面的には汲み尽くされていないという意味で、ヴィルノは「背後の未来」という言葉を使おうとしているというように理解してもらえればと思います。現実的には国家権力の暴力的な弾圧によってどの国でもそれは押し潰されていくわけですが、〈68年〉というものが持っていた可能性というのは完全には汲み尽くされていないし、まだ潜在的に大きな可能性を孕んだものとしてあるということを言いたくて、私も今回の話のタイトルに「背後の未来」という言葉を使ったわけです。

それでは、『背後の未来』が現在と出会う」ということはどういうことなのかといえば、〈68年〉をピークとする社会運動の大きな流れは、国家権力によって暴力的に押しつぶされ、その一方でヴィルノの言う「反革命」を通して秩序の側に盗み取られて流用されていくのですが、それでも歴史の中の伏流水のようにその後もその流れは途絶えることなく流れています。日本の場合には残念ながらまだそこまでいっていないのですが、まさに今この時代に、ネオリベラリズム／グローバリゼーションに対抗するような運動が、現在、世界の各地で激しく展開されています。そのように、歴史の伏流水のような形を取りながらも、現在まで〈68年〉というものが流れてきているのだと私は思っていますので、『背後の未来』が現在と出会っている」という言い方をしているわけです。

そのような象徴としての〈68年〉からの「帰還者」、または一人の「浦島太郎」として話したいというのが、今回の私の話の大きなモチーフとしてあります。

〈68年〉が解体させた「社会運動の古典的範型」とは

今回の話のためにお手元にあるような年表を作ってみました。この年表について少しだけ説明しておきたいと思います。年表の上の半分は、私の「個人史」ということになりませんが、振り返ってみて、西暦で言うと最後に「6」がつく年が、どうも私の生きる上での大きな節目にあたる年のようです。私が生まれたのは36年で、46年は日本国憲法が公布された年ですがこれはどうでもいい。また、56年は、私がその後同伴者となった者と出会った年です。66年というのは私が就職して高知へ行った年ですが、そこである人物に出会ったことが、私が生涯このような道をたどる上での大きな契機であったと思います。76年というのは後でまた説明しますが、残念ながら(68年)をピークとする大学での学生の叛乱が終息し、これからどうしようかと思ひながら、言わば私個人としての「大学闘争」はこれで終わりにしようと思った年です。その後の86年という年は、地域でいろんな運動をするためにも、自分なりにある種の「集団」を作っていくとする大きな契機になった年です。それから96年は同伴者が亡くなった年です。その後10年経った2006年というのは去年のことですけれど、私がもう一度何とかがんばらなくてはと思い始めた年です。

年表の一番下の「日本における社会運動問題史にそくして」というのは、私の人生での半世紀の時間の流れを、日本における社会運動の歴史や問題史としてもう一度捉えなおしてみようとした部分です。

年表の真ん中の部分に、「『同時代』史から同『時代』史へ　そして再び『同時代』史へ」という見出しをつけましたが、私にとって同時代史というのは二つあります。同じ時代に生きて、一緒に時代をつくってきたとか、自分も少しはそれに参加したということを感じる時代、つまり「個人史」の日付と社会運動の流れの中での日付とが対応するような時代を表すのが、時代にカッコをつけた同「時代」史という言い方です。もう一つの「同時代」史というのは、これはただその時代に生きていたというだけで、別に社会運動の流れの中での日付と対応する「個人史」の日付があるというわけではない時の言い方です。

ところで、年表の下の「日本における社会運動問題史にそくして」の部分の一番初めのところに「社会運動の古典的範型」と書きました。(68年)というものが日本の社会運動の流れの中でどのような意味で大きなターニング・ポイントであるのかを知ってもらうためにも、それまでの運動の古典的な「範型」とはどのようなものであったかについて、少し説明が必要ではないかと思ひます。その根底にあった理論は、言うまでもなく古典的なマルクス・レーニン主義に基づく革命運動論や革命組織論です。それに即して言いますと、例えば、マルクス・レーニン主義で武装した一握りの指導部があるわけですが、これは前衛党ですから、二つあったらどっちがより前衛かということになるわけで、一つの国には必ず一つの共産党のような前衛党しかないということになっています。その共産党の指導部がその社会のすべての社会運動を指導するという立場にあり、とりわけ、経済的利害を軸に組織された労働者を階級的に自覚させるという使命を、共産党の指導部が担うということになっています。

ですから、「労働者本隊論」とも言いますが、前衛党によって率いられる革命勢力の「本隊」は基本的には労働者階級であり、その他の社会運動は、言わば「枝葉」なわけですので、基本的には労働者の階級闘争に従属した位置しか与えられていません。例えば、女性解放運動は必要だけでも、それは革命が実現すれば解決するんだと、大まじめに考えられていました。いろんな差別の問題も、そ

うことは放っておけというわけではないのですが、革命運動が成功すればそんなことは自ずから解けていくと、本当にその当時は思われていたのです。

ただ、その革命がどういう種類の革命であるかということについては、どの社会もみな同じではないのですから、例えば、まだまだ近代以前の封建的遺制が残っているような社会での革命は、「民主主義革命」というのが中心になり、ある程度近代化や工業化が進んだ社会で、基幹産業部門の労働者の勢力がある程度は存在する社会での革命は、「社会主義革命」であるといったように、革命の性格とか種類というのは、指導部が世界情勢を見ながら判断することになります。しかも各国に一つずつ前衛党があるといっても、それらがばらばらにあるわけではなく、ロシア革命以後はコミンテルンと呼ぶこともあります。世界中の共産党や前衛党がソビエト共産党を頂点とするピラミッド状に構成されていました。

だいたいこれが1950年代の半ば頃までの運動状況で、そういう古典的な「範型」がずっと全世界的に続いていたわけです。私がそういうことに目覚めたのは1950年代の半ば頃ですが、それ以後というのはそういったマルクス・レーニン主義的な運動の「範型」が徐々に崩れていくことが始まる時代なのです。後でまたお話ししますが、そういった「範型」を最終的に社会運動の主流から追いやったのが、〈68年〉だと言ってもいいでしょう。

◇ 同「時代」史としての〈68年〉を語る

共産党から自立した学生運動の登場とその限界

少し気恥ずかしい言い方ですが、私や私の次の世代ぐらいまでは「戦後青春の範型」とでも呼ぶようなものがあって、若者が自分が生まれ育った家や親への違和感や疑問から、社会への批判意識を懐くようになり、先程言ったような古典的な運動の「範型」に関わっていくという道筋が、共通の経験としてあったように思います。

一私が大学に入ったのが1955年ですが、「経済白書」が「もはや戦後ではない」と言ったのがこの年のことであり、また、保守党と左右の社会党がそれぞれ一本化されて与党の自民党と最大野党の社会党で国会の多数を占めるという、いわゆる「55年体制」が成立したのもこの年のことです。また、社会運動ということで言えば、この55年は、いわゆる「六全協」で、共産党が「民族独立行動隊」や「山村工作隊」によるそれまでの武装闘争路線を完全に放棄して、人々に「愛される共産党」へと転換しようとした年でもあります。

一当時はいわゆる「ポツダム自治会」で、大学生であれば自動的に大学自治会に加入することになるので私もそこに入っていました。そこでの自治会の活動は、「トイレトペーパーをきちんとそなえろ」とか「学生食堂のメニューを改善しろ」といった「日常生活要求運動」や、ロシア民謡やフォークダンスといった「歌とおどり」が中心でした。私は、そうした傾向に対して、思想的に受け入れられないという以前に、なにせ、歌とかおどりとかいったことが苦手だったもので、肌にあわないという思いを強くしていました。

そうした共産党の中央部の方向転換とは対照的に、50年代後半からは、「砂川闘争」といった反基地闘争が活発化し、そうした反基地闘争に学生も支援として加わることをきっかけに学生運動も勢いを盛り返し、58年には、それまでの共産党よりの学生組織とは別に、「共産主義者同盟(ブント)」が結成されました。

56年に、当時のソ連共産党書記局長のフルシチョフによる「スターリン批判」がありましたが、日本でも、それまでの共産党を中心とする運動の中でその名前をあげることもタブー視されていたレオン・トロツキー(彼はスターリンとの権力闘争に敗れて亡命先のメキシコで暗殺されたのですが)の思想を復権させようという動きがありました。そうした動きの中から50年代の後半に「トロツキスト同盟」が結成され、そこから更に「革命的共産主義者同盟全国委員会派」が形成されて、「ブント」と共に後の学生運動の一翼を担う政治党派・組織の母胎となりました。

東京では戦前から都内のいくつかの大学の学生が貧しい人たちの中に入って社会奉仕を行う「セツルメント活動」というものがあり、中には医療活動も行うようなグループもありました。「セツルメント活動」というほどのものではないのですが、私個人の活動としては、「子供会」に参加して、貧困層の人たちが住む地域に入り、子どもたちに勉強を教えるといったことをしていました。当時はまだ印刷工場でもたくさん手作業の部分が残っていましたが、そうした作業を行う労働者たちが住んでいた長屋横町が文京区にあって、そこでの「子供会」の活動を通じて、後につれあいとなった者との出会いがありました。

—50年代末から60年にかけて大きな高揚を迎えたのが日米安保条約の改定をめぐる「安保闘争」でしたが、闘争の盛り上がりの中で、59年11月に、当時の「全学連」の学生たちが「我々の国会だ」と氣勢を上げながら、国会に「乱入する」ということがありました。私たちは「お焼香デモ」だといって批判していましたが、当時の総評・社会党ブロックや共産党といったいわゆる「革新勢力」によるデモは、「革新」議員が詰めている国会前の「請願所」までアピールに行っては引き返してくるといったスタイルだったのに対して、「全学連」の学生たちは、街頭で警官隊との衝突を怖れずに激しいジグザグデモを行っていました。

そのように、当時の「全学連」は共産党と対決しながら、後の新左翼の先駆となるような戦闘性を発揮する一方で、政治的な経験の不足から来る限界性を免れていませんでした。もう少し後の時代であれば、せつかく国会に突入したのですから、そこを占拠して国会議員たちを一室に押し込めて、面と向き合って問いつめるというようなことをしたと思うのですが、当時の「全学連」の学生たちは、その時の社会党の委員長だった浅沼稻次郎のあいさつを受けた後、そのまま引き揚げてしまいました。結局、当時の岸内閣の強行採決により、新安保条約は成立させられてしまったのですが、マスコミの論調も、強行採決ではない民主主義に則った国会審議を訴える一方で、学生たちの「暴力」的な言動を戒めるといったものに集約されて行きました。

当時はまだ「革新勢力」といわれるものの力が強くて、労組などが動員をかければ多くの人たちを集めることが可能な時代でしたので、学生たちの行動力や戦闘性が違う形で発揮されれば、もっと激しく大きな運動として展開される可能性もまったくなかったわけではないと思いますが、「安保闘争」は結局、「壮大なゼロ」として終わってしまいました。

高知時代の運動経験から

教育の力で社会を変えることができるのではないかという幻想を抱いて教育学部に入学して、研究者の道に進むことには抵抗がなかったのですが、私が在籍していた教育学部というところは共産党のシンパが多く、そこでのアカデミズムのあり方には違和感を抱くようになっていきました。それは一つには、大学院に入ると学生の頃よりも大学の教官との距離が縮まって、その分、口では立派な理念を語る教官たちの人間として嫌な面が見えてきたということもあります。また、共産党の「対米従属論」に基づき、共産党よりの「革新」的な教育学者たちが、日本が「自立」するためにも国民形成が教育の大きな課題だとする「国民教育論」を唱えていたことにも、大きな違和感を感じていました。

そのような事情で、いつまでも東京の大学にはいたくないなと考えていたところに、66年に高知大学の教員としての就職の話があり、高知に行くことになりました。就職のために、初めて高知に行った時には、東京から文字通り1日がかかりで、「ずいぶん遠いところに来てしまった」とつくづく思いましたが、先ほども言いましたが、その高知でのある人物との出会いが、その後の私の生き方に大きな影響を与えることになりました。その人は四国山脈のふもとにある山村の出身で、彼の兄弟たちは皆、中学校を卒業した後、就職しているのですが、彼だけは高校に行かせてもらい、高校卒業後いったんは就職したのですが、どうしても勉強がしたいということで大学に入ってきたのです。

彼は生涯定職に就くということのないまま、生を終えましたが、自分が生まれ育った場所との関係に、ずっとこだわり続けてきた人で、自分はそこから「逃亡」してきた者なのか、それとも「追放」された者なのか、あるいは「脱出」してきた者なのかというような問いをずっと抱き続け、それを「変革」の思想の原点にすえようとし続けた人です。その人と出会ったことで、私としては、もう大学のアカデミズムのようなものはどうでもいいと思えるようになりましたし、その人と一緒に高知で何かできないかと考えるようになりました。

これは後になって知ったことなのですが、フルシチョフによる「スターリン批判」が行われた56年に、カストロやゲバラたち総勢わずか9人の革命家たちがグランマ号という小さな船で亡命先のメキシコから故国キューバに戻り、その3年後に親米・独裁的なバチスタ政権を打倒して、キューバ革命を成功させました。ゲバラはその後、カストロ革命政権の閣僚のポストを捨てて、ゲリラ活動を行うのですが、その中で「三大陸人民機構」に向けて発せられた「2つ、3つ、数多くのベトナムを！」というメッセージがあって、それは当時、とても感動的なものでした。

一また、私が高知にいたころに、強い印象を受けた出来事としては、67年10月の「佐藤訪ベト阻止闘争」があります。この時初めて、学生たちが「ヘルメットと角材」というスタイルで街頭闘争を闘ったことは、ゲバラのメッセージに次ぐような鮮烈な印象を受けました。

「安保闘争」でも60年6月15日に東大の学生の樺美智子さんが国会の南大門で警官隊によって死にされるということがありましたが、この「佐藤訪ベト阻止闘争」でも山崎君という学生が警察の警備車によって轢死させられました。また、ほぼ彼の死の少し後で、エスペランティストの由比忠之進さんが、

アメリカによるベトナムへの軍事侵略に抗議するために焼身自殺するということがありました。

そういったことに衝撃を受けながら、周囲の学生たちと一緒に研究会を行っていましたが、その中で政治「死」から貧困による窮乏死まで含めて、「人が街頭で死ぬとはどのようなことなのか」を考えようと思いました。

—アメリカのベトナムへの軍事侵攻が激化するにつれて、全世界的にベトナム反戦運動が活発化しましたが、日本でも総評・社会党ブロックや共産党による反戦運動・反戦活動がありました。この時期の画期的な動きとして、「ベ平連」という既成の「革新勢力」から自立した、ネットワーク型の組織によるベトナム反戦運動が初めて登場したといわれています。

—高知にいた私も、高知大の学生や、高知市内の女子大の新聞会の学生、それに総評・社会党中心の「反戦青年委員会」に対して飽き足りない思いを持つ人たちなどと一緒に、「共同行動戦線」というグループを結成し、68年5月に高知市内で初めてのベトナム反戦デモを行いました。しかし、先ほどから私が言っているその人と私が一緒に行動していると、「彼が言いたいのは、こういうことなんだよ」というように、どうしても私が彼の言葉の「解説者」のような立場になってしまい、彼との関係をどうしていくのかということが難しくなっていくということと、ある程度は高知でも運動の形ができてきたという思いもあって、68年の秋に高知を離れて富山に来ました。

大学闘争からの「問い」をどのように引き受けるのか

60年代後半は、日本全国でベトナム反戦運動が激しく展開された時期であると同時に、大学での学生運動も活発化し、全員加盟の「全学連」から本当に運動に関わりたい者の自由参加による「全共闘」方式へと学生運動のスタイルが大きく変わりました。そのような時代の雰囲気の中で、マンモス大学でそれまで学生運動をやるような学生がほとんどいないと思われてきた日大の「全共闘」の、デモなどやったということがない学生たちが初めて大学の外の大通りに出て、「300メートル・デモ」を行うという感動的な出来事がありました。

当時の運動の渦中にいた者たちには共通して、高度成長期の微温的な日常性から自分を解放するという快感や、大学教育といった自分を日常性に縛り付けている制度からの解放感を感じていたように思います。政治党派の「決意主義」や「決戦主義」というものは見えやすいと思いますが、その当時の「行動的快樂主義」とでも呼ぶようなものは、後の世代の人にはなかなか理解しにくいことだと思います。そのただ中に身を置いてみなければ、ただたわいないことを言っているだけのことのように聞こえるかもしれませんが、そのように、「自分が走ることで世界が変わる」といった実感や、何もしなければ自分が窒息させられてしまうような閉鎖的な壁に自分の体でぶつかることで突破することができるという快感は、とても大きなこととしてあったように思います。

—高知大にはいわゆる新左翼の人間がいなかったのですが、富山大にはいくつもの政治党派が入っていて、大学の自治会選挙の結果が報じられていたりするのを大学新聞で見て、ずいぶん大学の雰囲気がちがうんだなと感じていましたが、全国の多くの大学と同じく、富山大学でも68年の冬に学

生たちが大学本部を封鎖するということがありました。多くの場合、その始まりは大学当局がまちがって学生を処分したり、大学の会計が不明瞭であるといったささいと言えささいな問題がきっかけでした。実際、共産党やその影響の下にある学生は、大学が民主化さえすればそんな問題は解決するんだと言っていたわけですが、それがあつという間に、「大学を解体しろ」というところまで進んでしまつて、その展開のスピードの速さが一つの快感でした。

一当時、学生たちの間では、「あなたにとって、～とは何か」という問いかけのスタイルが流行っていましたが、例えば、学生が大学の教官に向かって、「あなたにとって大学とは何か」とか、「あなたにとって研究とは何か」といった問いを直截に投げかけるわけです。しかし、そのような問いに対して、ほとんどの教官は、制度の上では大学というものはこうなっているといった「制度の言葉」でしか答えようとしていないわけです。学生の側は、制度について聞きたいわけではなくて、「あなたという人間の実存を支えている、あなた自身の言葉で答えよ」ということを求めていたのです。しかし、そういった問いには大学側は答えようとしていないために、あちこちの大学で学生たちは大学当局と大衆団交を行つて何とか「制度の言葉」ではない言葉を大学関係者から引き出そうとするのですが、結局、最後までそうした問いがうけとめられることのないまま、「大学を正常化しなければならない」ということで、大学当局は学内に機動隊を導入していくこととなります。

翌69年の1月に、有名な東大の安田講堂の占拠をめぐる攻防戦が3日間、繰り広げられました。しばしば、安田講堂占拠・攻防戦が日本の学生運動のピークであるような言い方がよくされますが、実際に闘争が全国の大学にまで拡大したのは、むしろその後のことでした。安田講堂占拠・攻防戦のように、権力の弾圧に屈せずに最後まで闘い抜くという姿勢は確かにカッコいいのですが、そのような「決意主義」や「決戦主義」に対しては、違和感を感じていました。

一そのように全国各地の大学が学生によって封鎖されるという状況に対して、文部省は「大学運営臨時措置法」を成立させ、学生による大学封鎖に手をこまねいているような大学には予算や補助金を削減すると脅しをかけました。結局、それによって、69年秋にはほとんど全ての大学で学生によるバリケードが解除され、大学が再開されました。

当時、大学闘争に共感するような大学の教員に対して、マスコミなどで「造反教官」などという言い方がされていました。大学闘争が鎮圧され、収束に向かおうとする中で、それらの教官たちの中には大学をやめる人たちもいましたし、その一方で、大学闘争での問題提起を受けとめて、大学に残つてがんばろうとした人たちもいました。

一学生による大学批判に対しては私自身も学生と同じように考えていたし、言おうと思えばいくらでも学生よりも過激なことを言えたのですが、大学闘争というのは、所詮は学生の闘争です。それに対して、私自身としては、「大学教員闘争」はどうありえるのかという課題を大学内でやりぬこうと考えていました。実際には大したこともできなかったのですが、とにかく、機動隊に守られるような中での入試の試験監督はしないと通告しましたし、大学の教授会には出ないことにしました。また、授業中で、学生とどれだけ「対決」できるかと考えてきましたし、もう大学闘争以前の状態には「復員」はしないということを買きたいと思つてきました。

69年11月に「佐藤訪米阻止闘争」があつたのですが、各政治党派ではそれを「政治決戦」と位置

づけて、大きな闘争の盛り上がりをつくり出そうとしたのですが、結局、それが、様々な政治党派や「全共闘」を含めた広い意味での「新左翼」の運動が実質をもって展開されていくことの「終わりの始まり」になりました。そのような「決意主義」や「決戦主義」によって、〈68年〉の運動の中にあつたような「行動的快楽主義」というものは、逆に後退していったように思います。

大学闘争が国家権力と大学当局によって鎮圧されていく状況に対して、当時、「個別学園闘争から全国政治闘争へ！」ということが盛んに主張されました。しかし、「～から・・・へ」と転換するということの重みとその文句の中味とが本当につりあっているのかという疑問がありましたし、そこに見られる「決意主義」・「決戦主義」的な発想には違和感がありました。

一それに対して、私が考えていたことは、大学闘争から「全国政治闘争」へという図式ではなく、大学闘争にあたることを社会の諸領域で展開しなければならないのであって、政治闘争や国家権力との直接対峙という平面とは別に、「社会闘争」というものがあるのではないかということでした。例えば、大学でいえば学長を頂点に教授会までも含めた大学当局というものがあつて、そういった「社会権力」との闘いという、政治闘争には集約されないような個々の社会的領域での運動・闘争というものがある。そのことを教えてくれたということが、私にとっての大学闘争の大きな意義でした。そうした社会運動を自立的な運動として展開できないかというのが、私の考えていたことでした。

そのような社会的領域での運動実践としては、例えば、東大の「赤レンガ」と呼ばれる一角に、精神科のインターンや若い医者が集まって患者の人たちと共に抑圧的ではない精神医療のあり方をめざそうとする動きがありました。しかし残念ながら、そうした社会的諸領域での運動というものはなかなか広がっていきませんでした。そういった「社会闘争」につながる「一筋の細い糸」が、70年7月7日の「華青闘」による新左翼批判だったと思います。

当時、出入国管理法が改悪されて在日外国人の政治活動を規制しようとしたのですが、それに対する反対闘争の一翼を担ったのが在日の中国系の若者たちでした。70年7月7日という日は、日中戦争の発端となった盧溝橋事件から40年にあたるということで集会が行われたのですが、「日帝打倒！」を掲げながら、在日外国人が直面しているような日本の中での日常的な差別の現実に向き合つてこなかったということ、を、「華青闘」のメンバーたちは、その場にいる活動家たちに向かって厳しく批判しました。日本帝国主義を本当に打倒しようとするのであれば、それを日常的に支えている差別的な社会のあり方を変えること抜きにはありえないし、それ抜きに街頭で権力と対峙する行動をいくら重ねても、日本帝国主義というものに抽象的にしか向き合うことができないという批判として、彼らの問題提起を言い換えてもいいでしょう。それに対して、今に至るまで日本の社会運動はきちんと答えることをしていないように思います。

一私の語る〈68年〉に対して、同じ時代を共に生きてきた人たちからはぜひ、意見や批判をいただけたらと思いますし、それについて今まで何かしら聞いたことがあるという人たちには、イメージを喚起できたらと思います。とにかく、楽しくて面白い、心がおどるような時代でした。それは、別にただ当時を回顧したいということではなく、〈68年〉というものが今に至るまで継続しているんだということを言いたい。がために、今回このような話をしてきたのだということ、最後に言いたいと思います。

◇ 今回の学習会を振り返って

今回の「アンラーニング」の学習会での埴野謙二さんの話は、次回に続くもので、まだ途中の話なのですが、その中の大事なポイントだと思うことについて少しふれてみたいと思います。

今回の学習会で語られていたような、〈68年〉の運動の中での「行動的快樂主義」や「自分が走ることで世界が変わる」といった実感は、社会保障・福祉の容赦のない削減や、法的保護剥奪の「合法化」がもたらす現在の私たちの「生きがたさ」とは、対極にあることのように思えます。しかし、ヴィルノが言う「反転された革命」としての「反革命」として現在を見ることの内に、私たちが「生きがたさ」を生きているこの時代の状況がどのようなものかを改めて捉え直し、それに反撃するための手掛かりがあるように思います。

現在、「フリーター」と呼ばれるような労働の形も、最初は、まだ日本経済が好調だった時代に、企業に束縛されることなく生きていくための「ライフスタイル」として選択したという場合が全くなかったわけではありません。しかし、今では、それはもっぱら企業が低賃金・無保障で労働力を手に入れるためのものになっているというように、人々の自由への要求を資本の「価値増殖」の源泉へと「反転」させるというのが、「反転された革命」の分かりやすい例でないかと思えます。

—あえて皮肉な言い方をすれば、旧来の社会秩序を覆し、それまで自らを縛り付けてきた様々な束縛や規制を突破する快感を満喫しているのは、世界の果ての果てまで、そして私たちの生きることの全てを「商品原理」・「市場原理」で覆い尽くそうとしている、グローバル化した現在の資本の側のように思えます。まさにその点において、ネオリベリズムが〈68〉年の「反革命」だと言えるのではないのでしょうか。

今年は〈68年〉から40年目を迎え、当時の様々な出来事それ自体はまちがいなく過去に属することになっています。しかし、私たちが直面する「生きがたさ」として〈68年〉後の「反革命」を日々生きているという逆説的な意味でも、〈68年〉は私たちの現在と無縁ではありえません。

今回の学習会の中で話された、〈68年〉を生きていた学生たちの「行動的快樂主義」と、渋谷さんの話の中に出てきた高円寺の「素人の乱」が選挙運動という名目で高円寺駅前での連日の野外ライブ・ダンスを行って「解放空間」をつくりだしていたことや、小倉さんの話の中で紹介された、世界各地で巨大人形や仮装といった祝祭的な雰囲気の中でネオリベ／グローバリズムへの憤りや抗議を表現している抗議者たちの姿とは、互いに重なり合うものではないでしょうか。

そのような協働で生み出される楽しさの経験を、この社会の中でどのように生み出すのかということに向けて、〈68年〉の経験を改めて「活用」することが、「反転された革命」としての現在の状況を「革命」へと転換しなおすための一つのヒントとなるように思います。

(「アンラーニングプロジェクト・ニューズレター08年1月号」から)

アンラーニングプロジェクト 第Ⅱ期

—「＜背後＞の未来が現在と出会うとき—

——浦島太郎物語 Part2」での論議から

1月13日、「アンラーニングプロジェクト 第Ⅱ期」では、昨年12月2日に引き続き、「生・労働・運動 net jammers」のメンバーである埴野謙二さん話し手に迎えて、学習会を行いました。今回の学習会では、大学闘争の敗北後、新しい運動を地域でつくりだしていこうとした時期から、ネオリベリズム／グローバリズムに対抗して、現在、日本の各地で生まれつつある「保障されざる者」の反乱の兆しに呼応するような動きを、どんなにささやかではあれ、この富山でもつくりだそうと考えるようになるまでの埴野謙二さんの軌跡を、話してもらいました。以下は、その時の話の重要なポイントであると思われることをまとめたものです。

◇ 埴野謙二さんの話から

「大学教員闘争」に終止符を打ち、「地域」へ出る

60年代末の大学闘争の中での学生たちからの「問い」に対して、大学闘争の当事者にはなりえない自分としては、「大学教員闘争」はどのようにありうるのかを考えることでその「問い」を受けとめようと考えたというところまで、前回、お話したと思います。

70年代に入って、かつて、大学当局と協力して機動隊を導入したり、学内のバリケードを解除したりして、学生たちからの「問い」を抹殺していった教官たちが、次々と何事もなかったかのように定年退職していくのを目の当たりにして、それに対して何もできない自分自身への怒りも含めて腹立たしい思いであふれかえっていたし、自分は決して、大学闘争前の状態には「復員」することはしないと考えていました。しかし、その一方で、大学で何か新しい運動が始まるということは、今後もうないだろうという思いもあり、その頃から「大学教員闘争」ということにこだわり続けるよりは、むしろ、「地域」に出ていきたいと考えるようになっていました。

〈68年〉後の数年間は、日本での運動がかつてのような状況を規定するだけの凝集力を失ない、全共闘運動も含めて、総体としての新左翼運動が解体していくと同時に、運動が課題ごとに分岐していく時代でした。日本での新左翼運動が、連合赤軍内での同志リンチ殺人事件や、新左翼の政治党派による「内ゲバ」といった、後の世代が政治的な運動に関わることを尻込みせざるをえなくなるような大きなマイナスを残したことは、言うまでもありません。しかし、そのマイナスがどんなに取り返しのつかないほどの大きなものではあっても、それが、共産党を頂点として様々な政治・社会運動がピラミッド状に組織されるという運動の「古典的範型」を解体させ、その後の固有な意味での社会諸運動が生起する新しい地平を拓いた。この国での広い意味での社会運動に、後戻り不可能な、取り消し不可能な一線を画したということだけは、ぜひ、言っておきたいと思います。

70年代の後半に、自分の周りの学生たちと大学内でちょっとした「騒動」を起こしていくことをしたり

もしていましたが、彼ら・彼女らが卒業した後も、一緒に継続的に運動ができないかということで、能登原発の問題や反管理主義教育の運動に取り組んでいきました。その時の自分としては、政治党派でもなく、特定の個別課題に取り組むというのではないような運動集団をつくりたいという思いが強くありました。

—70年代以降、体制化して闘うことを放棄してしまった大労組から分裂して独立した労働組合をつくり、小さくても、労働者としての尊厳と誇りにかけて資本と闘うことをめざす「少数派労働運動」が日本各地で登場してくるようになりました。70年代初め、魚津の日本カーバイト工業の労働者たちも、企業内の組合から分裂して、少数派労働組合の日カバ労組を結成しました。以前、国鉄の魚津駅のすぐ側に、木造の古い組合事務所があって、電車で魚津駅を通るたびに、組合事務所の壁にスローガンが掛かっていたのがよく見えていて、日カバ労組があるということは、その結成当初からすでに知っていたのですが、ただ気軽にそこに遊びに行くわけにはいかないという気持ちが長く続いていました。

—81年に、日カバ労組の元委員長がポーランドの「連帯労組」を訪ねて交流を行ったのですが、帰国後のポーランド報告集会を一緒に企画したことがきっかけとなり、日カバ労組との交流を深めていくことになりました。ちょうどそのころ、今はもうありませんが、「日本読書新聞」という書評紙に、小倉利丸さんが、「支配の経済『学』」というタイトルで連載を行っていました。それは、資本による労働者の包摂のありようを、工場や生産現場の外での「消費」—「再生産」過程までも含めて捉えようとするもので、当時、非常に斬新さを感じました。82年に「遊学塾」を結成して、日カバ労組の人たちと一緒に「支配の経済『学』」の勉強会を行いました。そのことも含めて日カバ労組とは関係を深めていきました。

「創造的失業者」をつくりだす集団の形成へ

85年に、ある市内の中学校が男子生徒の頭髪を「丸刈り」にしようとしたことに対して、私と私の仲間が生徒への聞き取りを行っていたおりに、その中学校の教員ともみ合いになり、私はそれを理由として、逮捕されるという刑事弾圧を受けました。それに対しては、私の仲間たちだけではなく、日カバ労組のメンバーたちも励ましにかけつけてくれ、連日のように街宣車を出して警察への抗議活動を行ったり、駅前でも不当逮捕に抗議するビラを配ったりしてくれました。ある意味では、その刑事弾圧を契機として、集団の凝集力が一挙に高まったということがあります。また、そのことをきっかけとして、富山大学の学生寮を軸に活動をしていた学生たちが出入りするようになり、私たちのメンバーに加わることになりました。

ちょうど、その頃に、私たちの事務所の隣で、小さな食堂兼駄菓子屋を営んできた老夫婦が余所に移ることになったのですが、他で就職しなくても自前で集団のメンバーが働く場をつくりだしたいという思いから、そこを買い取り、街角のうどん屋を始めました。そのための準備を進めながら、これからは、今までの自分たちの生き方のスタイルを大きく転換することに踏み出していき、普通の意味での「生活者」や「市民」であることをやめることになるのだな、と考えていました。

イヴァン・イリイチという人が、「創造的失業者」ということを言っているのですが、例えば、4人のメン

バーがいて、その内、3人が働いてお金を出せば、一人は働かなくても、好きな運動をやって他のメンバーが働いている昼間でもいろいろと活動できるということです。実際に自分たちも、集団のメンバーとして「創造的失業者」をつくり出すということに踏み出しました。このように、党派でも個別課題の運動体でもない集団を目的意識的に組み立てることに踏み切ったという意味で、86年という年は、私にとって大きな転機でした。

富山市議選への挑戦

大学闘争の敗北以後、日本でも、それまでの社会運動に加えて、エコロジーや女性問題といった新しい運動課題も含めて、後に「新しい社会運動」と総称されるようなものが登場してきました。そのような運動グループが、政治闘争とは区別されるものとして、社会的な平面を基盤に据えて運動を展開していこうとしていることに対しては、自分も共感を抱いていました。その一方で、これは今でも続いていることだと思いますが、「新しい社会運動」の当事者が直面している様々な問題が決して互いに無関係であるはずはないのに、ある種の運動の「住み分け」のようなものが進んで、自分の取り組んでいる運動と自分の隣の人の運動との関係が本当には問われないままになっていくことに対しては、大きな違和感がありました。

—87年に私の同伴者を候補者として、富山市議会選挙への最初の挑戦を行いました。日カバ労組では70年代初頭から独自に候補者を立てて、魚津市議会選挙に取り組んできたこともあって、私たちが富山市議選挙への挑戦を決意するに際して、日カバ労組の人たちからのうながしが大きな契機となりました。ただ、私自身としても、市議会選挙への取り組みを通じて地域の政治への介入を試みることで、社会運動が個別課題ごとにバラバラなものとしてあるのではなく、相互の関係を深めつつ全体化作用を生み出していく契機にしたいという思いがありました。その後も何度も市議選に挑戦しては、得票数をのばしながらも落選するということを繰り返してきました。

93年の冬に私の同伴者の身体の〈異変〉が明らかになり、94年の春に入院して手術をしました。退院後、病院の医者からは、「元気だった頃の60%ぐらいのことしかできませんよ」と言われていたのですが、60%どころか、120%のがんばりを発揮して、95年によく市議選への初当選を果たしたのですが、富山市による桐朋学園大学誘致をめぐる、さまざまな問題点が浮上するということがありました。議会内の私の同伴者と議会外の私たちとの連携でそれらをまさに「当方問題」として可視化することに取り組み、市民の中で「争点」化することに、それなりに成功しました。

私自身としては、どのような問題であれ、既成政党に揺さぶりをかけ、市一議会に、波乱を起こすことをねらっていたので、まずまずのスタートでした。

「異星人」であることを

96年に私の同伴者が病のために亡くなってしまった後、市議会選挙のことをどうするのかずいぶん

と考えました。自分としては積極的に市議会に出たいというよりもむしろ、私の同伴者の選挙を応援し続けてくれた地元の支持者の人たちの強い思いに背中を押されるようにして、私自身が候補者となって、99年の市議選に挑戦しました。桐朋学園大学誘致を問題化した時点とは、ほんの数年の間に、状況が大きく変わってしまって、「市民参加」が行政批判の言葉ではなくなり、むしろ、「市民参加」や行政と市民との「協同」ということを自治体の側が積極的に言い出すような時代になっていました。

ちょうど90年代半ばからの数年間というのが、日本社会がネオリベリズムや「ポストフォーダイズム」の時代に入っていき大きなターニングポイントであり、「構造改革」の名の下で、グローバル資本主義の展開のための条件整備が進められていくという時代状況でした。私が市議会に入った99年の第145国会は、いわゆる「有事立法」「国歌国旗法」、「盗聴法」、「住民基本台帳法」、それに市町村合併の推進に向けた「地方自治法」の改正などを一挙に成立させるというような、支配の側のからの攻撃が段階を画するようなものになりつつありました。

また、行政の領域で言えば、ちょうどその頃から日本でも、「NPM(新行政管理)」の手法が導入されるようになりましたが、実務の決定・運営はできるだけ行政組織の下部のレベルにゆだねる一方で、行政組織のトップは企画・運営やチェックに専念するというものです。同時に、行政が住民サービスを提供することからできるだけ「身軽」になるための方策という面と併せて、「市民参加」や「市民に開かれた行政」を謳うことで行政の社会保障・福祉からの「撤退」を正当化するというイデオロギー的な面からも、とりわけ社会福祉の領域で、NPOや市民ボランティア団体の行政による活用や「体制化」が進行していきました。

このような意味で、市議会では、日本の地方自治体がネオリベリズムにもとづく「構造改革」にしたがって再編されて生きつつあることを否応なく実感させられました。このような状況に対して、賛成と反対の態度表明を上手に使い分けることが、政治の「玄人」ということなのでしょうが、市議会に入ると、あることにだけ賛成して他のことには反対するということは困難なので、それなら自分は政治の「素人」でかまわないという思いで、全部のことに反対するという立場を貫こうと考えました。一方、このような状況に対して、自分の考えていることが市議会でも通用されるわけでもなく、NPMや「市民参加」路線に対する私の批判はなかなか理解してもらえませんでした。議員だった頃に、行政側の人や他の議員から、「あなたの言っていることは市民に通じない。もっと分かりやすく言えないのか」とよく言われましたが、私としては、逆に、議会に対してどこまで「異星人」であり、また、「異言語」を話す存在であり続けられるか、ということに挑戦しつつ、地方自治体及び行政官僚のネオリベリズムへの「転向」を批判したいと思っていました。

市議会の中で私がこのような屈折した時を過ごしているなかで、01年の9月11日に、「テロ攻撃」といった言い方はしたくないので、それを正しくは何と名付けるべきなのかはよく分かりませんが、ニューヨークでの「事件」がありました。市議会では、その「事件」の死者に対する追悼の意を表するだけでなく、「事件」の実行者に対する非難決議をあげるということになりました。アメリカがパレスチナ人民を中心にしたアラブ民衆に行ってきたことを問わないで、その「事件」の実行者たちだけを非難できるのかという、ささやかな抵抗の気持ちから、その決議の日には議会を欠席するというようなこともありました。

反ネオリベ／グローバリズムの波に「再起」を促される

99年にアメリカのシアトルでのWTOの閣僚会議が、十万人規模の抗議者に包囲されて流会に追い込まれるということがありましたが、それは、世界規模での反グローバリズム運動の盛り上がり、人々の目に明らかなものにまで高まったことを象徴する出来事でした。また、それより少し前の94年、メキシコ・チアパス州で「サパティスタ」が「武装蜂起」を行いました。彼らの闘争は、武力による権力奪取を求めるのではなく、「自分たちが、ここにこうしていることを認めよ」ということを求めるという点で、他の反政府武装組織にはない、非常にユニークなものですが、彼らはちょうど普及したばかりのインターネットを通じて、メキシコ国内と全世界の人々に闘争への支援を訴えていましたので、メキシコ政府も簡単には手が出さないという状況が生まれていました。その「サパティスタ」たちが、「武装蜂起」を行ったのが、ちょうどアメリカとメキシコの間で結ばれた北米自由貿易協定が発効する日のことでした。

この北米自由貿易協定によって、アメリカとメキシコの労働者たちが互いに競争関係に立たされることに対して、アメリカの労働組合のナショナル・センターの執行部内で、メキシコの労働者との連帯をつくり出そうとする勢力が主導権を取ったことから、組合運動の活性化が進みました。数年前にAFLとCIOは分裂してしまいましたが、多数の労働組合がシアトルでのWTO閣僚会議への抗議行動に加わったのは、この二つがまだ共にAFL-CIOというナショナルセンターをつくっていた時代でした。AFL-CIOを構成していた大労組の一つが、「チームスターズ」という運輸労働者の労働組合ですが、その組合員たちがウミガメのコスチュームを着たエコロジストの活動家たちとシアトルで一緒に抗議行動を行ったことから、「トラックとウミガメの連合」という言い方がされたりしました。そのように、反対行動の組織や運動方針を別に統一しなくても、WTOを互いの共通の敵と認識して、共同行動を行うといった、広い意味でのアナキズムの運動スタイルがそこに生まれて、大きな国際会議が開かれ、何万人という単位での反対・抗議行動が行われるたびに、その後だんだん洗練されていきます。

一現に、昨年ドイツのハイリゲンダムでのG8サミットでも、抗議行動に集まった活動家や運動グループは、「平和」的なデモ行進から、本当にG8サミットを実力で阻止しようとする動きまで、様々な運動スタイルを含んだものでした。しかし、ドイツのG8サミットへの抗議行動では、意見の対立もあったようですが、運動のスタンスの違う者たちを排除することなく、最大限、共同で反対の意思を表明するための陣形をつくるのが試みられました。そのように、ヨーロッパやアメリカの反グローバリズム運動では、必ずしも同じスタンスではない者たちが、共通の敵に対して共に立ち向かうという経験が蓄積されているように思いますが、日本にいる私たちにとっても、運動の課題やスタンスが異なる者同士がどのように連携できるかということは、大きな課題であるように思います。

市議会議員を辞めた02年からの数年間、私はただただ「妄想の海」をただようばかりで、何もできない状態が続きましたが、その中で、くりかえしくりかえし、自分がこれまでやってきたことをこれで終わりにするのかと自問してきました。そしてようやく、06年頃から、もう一度「再起」して、全世界的な反ネオリベ／グローバリズムの動きに呼応するようなものを、日本の中から、どんなに小さなものであってもつくりだすことに挑戦していきたいと考えるようになってきました。——私自身は、それを「浦島太郎の帰

還」として、捉えたいと思っていました。

— 昨年(2019年)の4月、障害者運動団体のメンバーなど、私たちがこれまで富山で運動を行うことを通じて出会ってきた人たちと一緒に、「もうたくさんだ！ 大行進」というものを計画しました。その中で、それぞれの参加者が、「社会保障・福祉の切り捨ては、もうたくさんだ！」、「私を自由に生きさせろ！」など、自分がこの国に生きていて、もうたくさんだと感じたり、自分が切実に求めていることを路上で訴えるというところを行いました。現在、この国では、多くの人々が過酷なまでの「生き難さ」に追い込まれるということがかつてなかったほどまでにせり上がってきていますが、今ようやく、一方で雇用の不安定化にさらされている「フリーター」や不安定雇用労働者などの、他方で社会保障の縮減による「生の保障」の破壊にさらされる人々の「保障されざる者たち」の反乱・抵抗の兆しとでも言うべきものが、少しずつ登場しつつあるように思います。この世界の中で大きな「生き難さ」を抱えながら生きようとする自分自身が一つの「闘い」であるような人たちの、そのようなまだ名前のない動きを、私は仮に「生・労働・運動」と呼んでいます。そのように人々が動き始めたことに対して、自分が生きている場所でどのようなつながりをつくりだしていけるのかということが、今の自分にとっての大きなテーマだと考えています。

〈68年〉からの「浦島太郎」として立ちたい

ここで〈68年〉からの〈帰還〉という問題——「浦島太郎」の〈帰還〉という問題に少し触れておきたいと思います。

〈68年〉からの〈帰還〉は、決して〈68年〉からの40年近い時間の経過から自然に生み出されたわけではありません。ここに至るまでに〈68年〉がどんなにサンタタル扱いを受けてきたことか。一方で、実際に〈68年〉を経験した人の多くは、しばしばそれを、かつて自分はこれだけ果敢に戦ったんだという「武勇伝」や、自己正当化のための物語に矮小化してきました。〈68年〉を直接経験しない者たちが〈68年〉に向ける視線の貧しさと、〈68年〉を経験したものが現在に向ける視線の貧しさが、つりあいがとれているような状況がこの数十年、続いてきたと思います。

そのような状況を打破する糸口を私たちに与えてくれたことが、酒井隆史さんや渋谷望さんといった人たちの功績だと思います。ネオリベリズムを〈68年〉が提起した問題を資本・国家の側が「盗用」して反転させた「反革命」として捉えなおすことで、「ポスト68年」としてのネオリベの「終わりの始まり」を提示すると同時に、〈68年〉に潜在していた豊かな可能性にもう一度私たちの目を開かせてくれました。そのような意味で、〈68年〉を経験しない者がそれに向ける視線と、それを経験した者が現在に向ける視線とが、ようやく交差することが可能になってきたように思います。

— この近年、「68年の帰還」という現象が、比喻としても、事実としても現れているように思います。比喻としての「68年の帰還」ということと言えば、お配りして資料の「註10」にもありますように、私が知っている範囲でもこの数年で、〈68年〉をテーマとする評論や小説がたくさん出版されるようになっていきます。それは、〈68年〉を距離を置いて捉えることを可能にするだけの時間が流れたということではなく、事実としての「68年の帰還」とでも言うか、いわば、〈68年〉それ自体が「帰還」するという現象が起きて

いるように思います。

「註11」で、アントニオ・ネグリの「超越論的な〈帰還〉」という言葉を用いました。ネグリはイタリアでのアウトノミア運動に対する弾圧による収監を国会議員になることでいったんは免れた後、再収監の危機を脱して、83年から97年までの14年間、フランスに亡命していたのですが、まだ多数のアウトノミアの活動家が獄中に囚われているような状況の中で、逮捕覚悟で97年にイタリアに帰国します。彼のようなケースは、事実としての「68年の帰還」の一例といっても良いように思います。ネグリは、01年のイタリアのジェノヴァでのG8サミットに対する戦闘的な反対行動に励まされたことに触れながら、「〈帰還〉とは抵抗と未来を媒介することができる言葉です」と言っていますが、事実としての「68年の帰還」とは、〈68年〉からの「浦島太郎」たちが現在に〈帰還〉することで、過去の闘争・抵抗と今まさに生まれつつある新たな動きとが「連結」されるということであり、それが、「〈背後の未来〉が現在と出会うとき」という言葉で私が言いたいことです。

あらためて現在、そのような意味で、有名な活動家・理論家というのではなく、いわば「無名兵士」の〈68年〉が、浮上してきているように思います。そのことの核心にあるのは、かつての政治党派が色濃くもっていたような決意主義や決戦主義というのではない「行動的快樂主義」というか、身体を動かしてアクションを起こすことを通じて、自分が解放される、自分をとりまく世界や何よりも自分自身が変わるという「快感」を、もう一度日本の社会運動に取り戻すということであり、そのことを通じて世界の反／オルタナグローバリゼーションのサイクルに、この国の社会運動が参加する可能性を豊かにするのではないかと、ということです。

◇ 今回の学習会を振り返って

正確な引用ではないかもしれませんが、以前ある雑誌で読んだ、反ネオリベの運動の活動家たちが集まった座談会の中で、「左翼とは、世界の反対側の出来事を自分の裏庭のことにように感じるという遠近感が壊れた人間であり、その意味では常にマイナーな存在である」というフランスの哲学者のジル・ドゥルーズの言葉が言及されていました。とりわけ、〈68年〉を直接経験していない者が、単なる懐古趣味や過去の時代のエピソードということを超えて、その画期性やそれに内在していた可能性を探ろうとするのであれば、そのことの意義は、地理的な遠近感にとどまらず、時間的なものまでも含めた自分たちの遠近感を意図的に攪乱することにあるのではないのでしょうか。

—これまでの「アンラーニング」の学習会の中でも紹介されたように、「フリーター」・非正規雇用労働者による「若者労働運動」などにも表れているように、〈68年〉の「盗用」・「反革命」である現在のネオリベ的な時代状況がもたらす現在の「生き難さ」のただなかで、今、「保障されざる者たち」のまだ名前のない動きが生まれつつあります。私たちが自らの遠近感・遠近法をあえて攪乱して40年の年月を越えて〈68年〉と現在の状況とを「接続」させ、〈68年〉を「出来事」として捉える視線を獲得することが、そのような動きを未来の「出来事」の兆しとして捉え、それに形を与えていくことへの一つの糸口であるように

思います。また、〈68年〉の可能性やポテンシャルティーへのそのような「接続」は、私たちの存在を、資本の利益追求のための単なる「資源」や使い捨ての「商品」に切り縮めて、次々に「消費」しては「廃棄」といった現在の社会のあり方への抵抗を試みるための手がかりでもあるでしょう。

前回と今回の話しを通じて、埴野謙二さんは〈68年〉の運動の中にあつた「行動的快樂主義」について、何度も強調していました。そのような〈68年〉の運動の中にあつた楽しみや快樂の要素は、もっぱら「消費主義」的な枠組みで資本の側に回収されてしまっています。しかし、そういった快樂の「消費」を求めれば求めるほど、その代償として賃労働という形での企業への従属を深めざるをえないと同時に、快樂を提供する側のプログラムや「商品」を一方向的に「消費」する受け身の立場になるという意味でも、従属性を深めざるをえません。そこには、楽しさを求めることと、この社会を生きていく上で否応なく負わされる「生き難さ」を少しでも減らすこととの回路は最初から断たれてしまっています。

〈68年〉の中での楽しさの経験は、何もしなければ窒息しかねないような社会の生き苦しさを打破することと、体を動かして行動を起こす解放感とが不可分に結びついていたという意味で、「消費主義」的な枠組みでの楽しさの追求とは、対極にあるものだと言えるでしょう。「アンラーニング」の学習会の中の渋谷望さんの話にもあつたように、現在、党派的な決意主義や倫理主義への否定・反発が政治色を示すこと自体を忌避するという形で表れてしまって、アメリカのイラク攻撃に反対の意思を示すための街頭行動でも、武力攻撃への怒りをあらわにするよりも、楽しく「パレード」しましょうというふうになりがち傾向があります。しかし、「生の無条件の肯定」とは、社会的な不正義への怒りも含めて、「生き難さ」を負わされる私たちの生身の感情がそのまま肯定されることでもあるはずです。

そのような意味でも、〈68年〉の運動の中にあつた「行動的快樂主義」の要素を現在の運動の中でどのように取り戻すかということは、今の私たちにとって大きな課題であるように思います。

なお、〈68年〉から40年後に、〈68年〉のくみつくされてはいない可能性(=〈背後の未来〉)を、自らの生の軌跡の現在に引き寄せ、今日のまだ名前のないアクション群と連結させようという今回の埴野謙二さんの話は、あつかう時間の長さという点からも、また、〈68年〉を「年表」上の事柄としてしか知りようもない世代へ伝えようという無謀さ(!?)という点からも、さらには、付けられていた〈註〉の膨大さという点からも要約することは、とても難しものでした。そのような意味での要約の不十分さを補うために、埴野さん自身の「レジュメ」と自身作成の「年表」(のようなもの!?)を、次号のニューズレターに収録しておきます。その「レジュメ」に従えば、「4. 終わりに」のCにあたる部分は、「アンラーニング・プロジェクト・第Ⅱ期」の最後の4月6日に、あらためて語ってもらう予定です。

(「アンラーニングプロジェクト・ニューズレター08年4月号」から)

埴野謙二

アンラーニングプロジェクト第Ⅱ期

〈背後〉の未来が現在と出会うとき——浦島太郎物語

I . 〈68年〉への視線と〈68年〉からの視線

その奇妙な「均衡」

今年は〈68年〉からちょうど40年目になるわけですが、とりわけこの国では、〈68年〉への視線というのは、きちんとつくられてこなかったと言ってもいいでしょう。それは、〈68年〉に対して視線を向ける側の問題であると同時に、〈68年〉を通った側の問題でもあるように思います。いわば、〈68年〉に対する視線と〈68年〉を通った側からの視線の二つが、ちょうど変な具合に釣り合いがとれてしまったまま、この40年近い時間が過ぎてしまったのではないかという感じが、私にはとても強くあります。

〈68年〉を通った人たちの側からの視線というのは、要するに、単なる「酒飲み話」に墮してしまっているのです。酒のつまみに、俺たちは若いときこんなにかんばったんだとかいった昔の「武勇伝」をひけらかすような話になったり、あるいは、政治党派の正当性を裏付けるような話になったりするとかいったように、〈68年〉を通ったはずの人たち自身が、非常に矮小化された言い方でしかそれを語るができないということが、ずっと続いてきたと思います。そのような貧しいあり方とちょうど釣り合いをとるかのように、「〈68年〉なんてたいしたことはなかったんだ」ということを言いたがったり、更には、「〈68年〉なんて覆い隠してしまえ」とか、「〈68年〉世代というのは、後の世代に迷惑をかけることしかしていないんだ」といった嘲笑や非難が続いてきたのではないかと、思います。そのように、〈68年〉に対する「視線」と〈68年〉からの「視線」の両方の貧しさが変に釣り合いがとれてしまっていて、〈68年〉というのが非常に小さなことにしか見なされないという状況が、ずっと続いてきたと思います。

この前のフランスの大統領選挙でサルゴジが当選しましたが、彼の有名な選挙スローガンの一つが、「もう〈68年〉は起こさせない」だったんですね。80年代の初めのフランスでは、社会党のミッテランが大統領をしていた時期がありましたが、彼のブレインになった人たちの中にはフランスでの〈68年〉を通った人たちが結構いました。ですから、〈68年〉の持つ秩序を維持しようとする側にとっての違和性や異物性といったことが、それぞれの社会にとって違うわけで、フランスなどではそういうことが決してなくなってはいないのだと思います。日本の場合は残念ながら、「〈68年〉に始末をつけよう」なんてことは誰も言ってくれないので、逆に〈68年〉をちゃんともう一度登場させることで、いろんな人たちから「それに始末をつけよう」と言わせたいというのが、私の個人的な思いとしてはあります。

その「均衡」を破ったもの

そのように、〈68年〉への視線というのは大変冷ややかであったり、非常につまらないものであったという感じが私には強いのです。そういった〈68年〉に対する視線と〈68年〉からの視線の釣り合いの貧しさをようやく本当に打ち破ったのが、酒井隆史さんとか、以前「アンラーニングプロジェクト」でも話し手に迎えた渋谷望さんとかいった人たちではなかったかと思っています。

つまり、80年代の中頃の大学に卡ろうじて残っていた学生運動の最後の片鱗のようなものの中にいて、身体を動かしたいと思っていたような一群の人たちがいたわけですが、酒井隆史さんや渋谷望さんといった人たちもそういった世代の人たちです。その人たちは、現在のネオリベラリズムがつくりだしている状況を、〈68年〉が提起した問題を逆に資本や国家の側が「盗用」という意味での「反革命」として捉えて、「ネオリベラリズムというのは間違いなく〈68年〉に対する『反革命』だ」ということを、初めてこの国できちんと問題提起した人たちだったと思います。酒井隆史や渋谷望といった人たちが登場することでまちがいなく、この国での〈68年〉への視線というものが変わり始めました。同時に、そのことが〈68年〉を経験した側からの発言を改めて引き出すことを促したという意味で、初めて〈68年〉に対する視線と〈68年〉からの視線とが「交差」することを可能にしたのではないかと思っています。

そういう意味では、この国で、ポスト〈68年〉の「終わりの始まり」を切り開いたのが、そういった人たちではないかと思っています。日本の場合も間違いなく、90年代の末ぐらいからポスト〈68年〉の「終わりの始まり」が始まっているのではないかと思ひますし、「ポスト〈68年〉をいかに越えるのか」ということが、この国の社会運動の基本的な課題になってきているように思ひます。そのように、酒井隆史や渋谷望といった、この国でネオリベラリズムに対する認識をきちんと提示する人たちが登場するようになったということの意味は、非常に大きなこととしてあります。

Ⅱ．〈68年〉からの「浦島太郎」の帰還

ネグリの場合

同時にそれと相前後して、いわば、〈68年〉から帰還した「浦島太郎」たちとでも言うべき人たちが、この間登場して来ているように思います。文字通り「浦島太郎」として帰還したような人たちもいるし、ある種の比喩として「浦島太郎」の帰還と呼ぶのが良い場合もあります。事実としての帰還と比喩としての帰還の両方を含めて、今、「浦島太郎」たちが還ってきているのではないかと、私はある時点から考えるようになってきています。

事実としての「浦島太郎」の帰還の例ですが、70年代のイタリアでの「アウトノミア運動」を中心的に担うと同時に、その理論化を進めてきたアントニオ・ネグリという人がいます。後にネグリを含む一群の人たちは、とりわけ英語圏では「オートノミスト」と呼ばれています。「アウトノミア」というイタリア語は英語の「オートノミー」と同じ意味ですが、日本語で言えば、「自律」ということです。

その「オートノミスト」の中心的な人物としてネグリがいるわけですが、イタリアでは70年代の半ば頃から少しずつ運動間の分岐が始まり、イタリアでも日本の連合赤軍に近いような「赤い旅団」というグループが登場するようになります。「赤い旅団」というのはいわゆる左翼武装グループですが、それがイタリアの元首相でキリスト教民主党政首のアルド・モロを誘拐して、結果的には彼を殺害することになってしまうわけです。それに対して、警察の側はネグリをその有力な指導者だと見なして、声紋学者に依頼して、モロの誘拐の際に電話をかけたのがネグリであり、誘拐・殺害事件の首謀者がネグリであるとでっち上げるようなことまでして、ネグリを含む多数の「オートノミスト」の活動家を逮捕しました。その数年後、イタリアのある政治組織が、ネグリを自分たちの政党の国会議員選挙の立候補者にして当選させたのですが、国会議員には不逮捕特権があるので、彼は一度は国会議員として釈放されるのです。

ところが、その数ヵ月後には、イタリアの国会でネグリの議席を剥脱するための決議が挙がり、再び逮捕されそうになる直前に、彼はフランスに亡命して、その後、長い間、そこで亡命生活を送ります。彼は亡命者であり、フランスでは政治活動が簡単にはできない立場ですので、自分たちが経験したイタリアでの「アウトノミア運動」を理論化する作業を通じて、自分たちの思想をもう一度練り上げるということをしていました。今はもう亡くなりましたが、フランスにはフェリックス・ガタリというユニークな知識人でもあり、活動家でもある人がいたのですが、ネグリはそのガタリと組んで本を書くということもしています。

1997年になってから、ネグリは、フランスでの亡命生活を打ち切ってイタリアに帰国すると宣言したのです。自分が帰国することで、かつてのイタリアでの70年代の苛酷な弾圧の中で大勢の活動家が逮捕されて今もまだ獄中にいたり、イタリア国外に亡命していたりする人たちがたくさんいるという状況をもしかしたら変えることができるのではないかという思いが、ネグリ個人としてはあったのではないかと

と思います。そのように、「イタリアに帰るぞ」と公言して帰国したわけですから、当然、イタリアの空港で逮捕されてしまいました。私はイタリアの刑法のことをよく知らないのですが、イタリアでは日本と違って、ある時間帯には強制的に刑務所の中にいなければならないのですが、昼間は自由に外に出て過ごしてもいいという刑罰があるらしくて、彼は何年かそうした段階を経て、今では完全に法的には自由の身になっているようです。ネグリはイタリアに帰国することを自分でも「帰還」と言っていますが、彼の場合は、事実としての「浦島太郎」の帰還ということの、代表的な事例に当たるだろうと思います。

足立正生の場合

日本の場合で言いますと、60年代の末から70年代の初めにかけて、「若松プロ」という映画のプロダクションがあって、そこは今でも映画を作っています。その監督の若松孝二という人が面白い人で、私が若い頃は世間ではよく「エロダクション」とか言っていましたが、60年代半ば頃は、いわゆる低予算の「ピンク映画」を作っていた人です。彼はなかなか太っ腹な人で、大学の映画サークルで映画を創っていたり、既成の映画会社の枠を超えて自分が撮りたい映画を創りたいというような人間を、どんどん自分のプロダクションに入れるわけです。

その中に足立正生という、日大の映研出身の人がいたのですが、彼は若松プロで何本か映画をつくっています。足立正生の本来の映画のスタイルは決して政治主義的なものではなく、今の時点から振り返ってみると、彼は、政治と映画とを二分法的に考えることをのりこえることを目指していたのではないのかと思います。その彼が若松孝二と組んで、パレスチナゲリラの根拠地へ行って、パレスチナゲリラの生活ぶりを撮影して、「PFLP——日本赤軍」と書かれている下に「世界革命戦争宣言」という文字が入るタイトルのドキュメンタリー映画を作るわけです。足立正生はそういう映画をつくる一方で、その当時、「風景映画」と言われましたけれども、10代の若さで銃による連続殺人事件を起こした永山則夫について、殺人事件そのものを取り上げるのではなく、永山則夫の辿った軌跡を追う映画を創ったりもしています。とにかく、映画作家としては大変ユニークな人です。

七十何年だったか正確には覚えていないのですが、日本の新左翼の赤軍派に属していた人たちで、「アラブ赤軍」という形でパレスチナゲリラの闘争に参加するということで、アラブ世界に飛び込んで行った人たちが何人もいました。そのリーダー格に重信房子という人がいて、彼女自身も2000年に日本に潜入していたことが発覚して逮捕されました。彼女のことは私はあまり「浦島太郎」とは思えないのですが、同じような時期に、足立正生と彼の仲間たちは、当時活動の拠点置いていたレバノンから国外追放になるわけです。足立正生自身は出入国管理法違反とかいったことはありますが、日本の警察によると、具体的な犯罪に関与していた形跡がないのです。ですから、そういう罪状で日本の刑務所内に囚われていたのですが、彼の場合も日本における事実としての「浦島太郎」の帰還の例だと言ってもいいように思います。ただ、足立正生自身は、「私は日本に帰ってきたんじゃない、日本に来たんだ」という言い方をしていて、自分は日本に帰還したという言い方をしていません。ですから、私が

彼のことを「浦島太郎」と呼ぶのは、彼の思いを否定する言い方になってしまってあまりよくないのかなという気もしますが、とにかく、彼についてはそういったことが具体的な事実としてあるわけです。

比喩としての帰還

そういった例がある一方で、事実としての「浦島太郎」の帰還というだけではなくて、比喩として「浦島太郎」の帰還ということまでも含めて考えると、この数年間に思いのほか、たくさんの「浦島太郎」たちが還ってきているということがあるのではないかと思います。

私はそういうことが気になっているもので、なるべくいろんな分野のものを気をつけて見るようにしています。その中でも私が特にユニークだと思うのは、80年代に登場したいろいろな演劇集団の一つを率いていた、鴻上尚史(こうかみしよじ)という人が書いたものです。私は日本の演劇について特別に知っているわけではないので何が彼の代表作かは知りませんが、早稲田大学の出身だそうです。彼は演出家であると同時に劇作家でもあるのですが、その彼が初めて書いた小説が、「ヘルメットをかぶった君に会いたい」というタイトルの本です。

その本のあらすじを言ってもあまり意味のかもしれませんが、要するに、彼が言っているのは自分たちの世代が大学に入った時にはもう何もなかったということなんです。それでも早稲田大学という、ある政治党派が拠点にしているところですから、そういった連中は大学の入学式にビラまきをしたりするわけです。その小説の鴻上自身に当たる主人公が、60年代の終わりのテレビのドキュメンタリーといったものを集めた映像を通信販売で買って見ていると、早稲田大学のキャンパスのあるところで当時の学生たちがビラまきをしている風景が映っていて、その映像の中のある女性が非常に魅力的に見えたというのです。それで、その人はどういう人だろうかとか、今何をしている人なんだろうと思って、一生懸命彼女のことを追跡するわけです。その途中で、「そういうことをいつまでもやっている、どうことになるか分かっているのか」というような、脅迫状まがいのものが送られてきたりするのですが、結末を手短かに言ってしまうと、彼女はある政治党派の活動家であり、現在もそうだという話なんです。

鴻上という人がどうしてそういう小説を書こうと思ったのかということは、やはり理由があると思います。彼が小説ではなく、自分の体験談として書いていることなのですが、彼が大学を受験するために岡山駅で新幹線に乗ろうとした際に、反対派の学生たちが開港間際の三里塚空港の管制塔を占拠するという出来事があって、それを駅の待合室のテレビで見ている、「ああ、こういうことがやれるんだ」ということで、とても衝撃を受けたのだそうです。その時の衝撃を彼はずっと忘れないでいて、「今、リアルであるというのは、どういうことだろうか」ということについて、真剣に考えていると言うわけです。

彼の演劇作品に「リンダリンダ」というのがあるのですが、それは、有明湾を干拓地にしようとする計画に反対して、有明湾のムツゴロウをもう一度生き返らせようとしているグループが、同時にロックバンドを組んでいるという話なんです。そのグループに元過激派というおじさんが入ってくるというような話を台本に書いて、芝居として演出しています。昨年のことだったと思いますが、彼はまた、「僕たちが好きだった革命」というタイトルの芝居を上演しています。たまたま、その台本に当たるものを見つけたの

で読んでみたのですが、要するに1969年当時の高校生が文化祭か何かで高校闘争に近いことをやるのですが、そこに突入してきた機動隊が撃ったガス銃の直撃弾を食らって意識不明になって、それから40年近く意識不明のままだったのが、今の時代に目覚めたという設定なのです。ある意味では似合っているんじゃないかと思うのですが、その役を演じているのが中村雅俊です。その主人公は、時代が変わったということを自分では認識できないので、昔のままの姿でまた元の高校に戻って行くのです。そこから始まるドタバタ劇が「僕たちが好きだった革命」という芝居なんですけど、これなどはまさに「浦島現象」だと思うのです。

なぜ鴻上という人がそんなことをいつまでも心にとめているのか、私は全面的に分かるわけではないのですが、つまり、「俺たちは世界に触れたことがないんだ」という思いの一方で、「あの時のあの人たちはまちがいなく世界に触れていた」と思っているということなんです。もう少し言えば、「リアルであることが不可能な時代に自分たちは生きているが、どうしたらもう一度自分たちがリアルになれるのかを考えたい」ということではないかと思います。

注意して見ていると、そういった小説や演劇なども含めて、今、「浦島物語」というのはいろいろと出てきています。今回は上手く話すことができませんでしたが、〈68年〉とは何だったのかを考える際の一つの焦点になることとして、1968年の10月21日の「新宿騒乱事件」という出来事があります。その日は、新宿に何万という人たちが集まったのですが、当時の党派の名前で言えば、中核派が新宿駅での米軍用の貨物列車の阻止闘争を行ったのですが、他の党派は別の場所で同時展開で闘争を行っていて、その中のブントという政治党派は防衛庁への突入闘争をするわけです。その時の実行隊長だった人が書いている、とにかくまともな世界に生きていない、エログロナンセンスめいたことを生業にしている人をモデルにした小説があります。

その他にも、「サウスバウンド」という映画にもなった小説があります。作者は奥田英朗という人で政治的な題材のものを書いたことはないと思いますが、ある一家が東京から南の島に移住するという話で、その父親で元過激派という人が主人公になっています。

いわゆる「2007年問題」というのがあって、団塊の世代が一斉に退職するとかいうことと全く無関係ではないとは思いますが、結構、そういった話が登場しているわけです。「狂気の桜」という渋谷を舞台にした映画があって、右翼的な青年団のようなグループが渋谷の街で暴れ回るといった話なのですが、その原作を書いた作家で、ヒキタニクニオという人が「不器用な赤」というタイトルの小説を書いています。

その小説は、今の時代に生きていても面白くないという高校生の女の子が主人公なのですが、その子はとにかく目茶苦茶に暴れたいんですよ。別に誰かに頼まれてやっているわけじゃないんですが、それこそいろんなところの看板を塗り替えたり、ポスターを真っ赤にしてしまったりというようなことをやるわけです。その彼女の仲間になるのが、在日の高校生の女の子だったりするんですが、その手助けをするしかないおじさんがいて、それが元過激派なのです。つまり、爆弾をどう作るのかというような話を、一生懸命高校生の彼女らにするのです。

そういう話は、単なるエピソードに過ぎないという面もありますし、たかがそれだけの話だとも思います。しかし、私としては作者はなぜ今、そういう話を書いたかのかがどうしても気になってしま

います。今まで紹介したのはむしろ愉快的な話だといってもいいようなものですが、中にはもっと暗い話もあります。大崎善治という作家も政治的な題材を扱ったことのない人だと思いますが、その人が書いた「タペストリーホワイト」という小説があります。

その小説のストーリーを簡単に紹介しますと、ある姉妹がいるのですが、大学に入学した姉が政治党派の内ゲバの「誤爆」で殺されてしまったことに対して、妹がそれがどうして起きたのか知りたいと思って、姉と同じ大学に入るのです。これは本当にひどい話なんです、**A**という党派が**B**という党派の誰かに対して暴行を加えようとした時に、その**B**という党派のメンバーだと思っていたら実際には別の人を殺害してしまったということは、内ゲバ事件の中でしばしば起きています。それで、妹の方が姉を殺した連中をどうにかして突き止めようと思って、自分からむしろ窮地に陥っていくような状況を作ってしまうという話なのですが、本当に読んでいて苦しくなるようなところがあります。妹が姉の世代の人たちについて、「あの人たちは、自分たちがやりたい放題やっていた」と言うのですが、「その後の私たちに何が残されたと思うの」というのが、妹の方が絶えず口にする言葉なのです。「私たちが高校に行ったときには高校はめちゃくちゃに荒廃していたし、何か建設的なことなんて考えられるわけがなかったわよ」と、その妹は言うわけです。

〈68年〉それ自体の帰還

ある程度の時間がたったから、少しは客観的に当時のことを見られるようになってきたせいなのかなという気はしますが、そのようなものも含めて、現在、「浦島太郎物語」というのはいろいろと出てきているように思います。私としてはそのようなことの、言わば、集大成として〈68年〉自身が還ってきているんだと思いたいところがあります。

その際に、現実的に帰ってきているのは、ネグリや足立正生というある特定の個人であったり、比喩的に言えば、ある物語だったりするわけですが、その背後には、個々の帰還者ということを超えて、〈68年〉自体が帰還していると言いたいという思いが自分としてはあります。ネグリ自身が自分のイタリアへの帰還について触れている文章がありますが、その中で彼は、「超越論的帰還」という言い方をしています。それは、個々の事例を超えて成り立つ「帰還」というあり示しているのではないかと思います。私の話の「註」として、ネグリが自分の帰還について触れた部分を引用しましたが、その部分を読んでみたいと思います。

「1968年を闘った我々にとっては、帰ること・戻りことは我々が70年代に着想したことを建設するということを意味するのです。それは昨年2001年ジェノバの闘い(イタリアで行われたG8サミットに対する抗議行動—引用者註)が、我々に明証してくれたことです。そこに現出したのは、政治的主体と、 Kommunismusへの過程の新たな相貌です。帰還は抵抗と未来を媒介することができる言葉です。さらに言うなら、それは時間と空間の移動を通して、抵抗を未来に投射することができるものです。」

今読んだネグリの文章の中の、特に終わりの2行で彼が書いているようなことを、私は言いたいのです。つまり、先ほどから私が言っている「浦島太郎」というのは、「抵抗と未来を媒介することができる」

存在ということですし、それが、私の話のタイトルにある「背後の未来が今と出会う」ということの意味なのです。

「帰還」をめぐる忘れられないこと

言い忘れていましたが、「帰還」という言葉で私がとりわけ、印象深く覚えていることが一つあります。先ほどから、今、〈68年〉からの帰還者が登場しているのではないかという話をしてきましたが、実はすでに、ずっと前に〈68年〉から帰還した人がいるのです。その人は、中平卓馬という写真家で、現在も写真を撮り続けていますが、60年代の写真の世界での反乱者とでも言うべき人です。彼と同じ時期から同様に先鋭的な写真を撮り続けてきた森山大道という人もいますが、その人は今でも現役の写真家です。世間では森山大道のほうが有名ですが、日本の写真史のある時期を画した「プロヴォーク」という写真家のグループがあり、二人ともそのメンバーです。中平卓馬という人は70年代に倒れてから、一種の記憶喪失症に陥るのです。彼は大酒飲みで破天荒な生活をしていたのですが、70年代のある時期から記憶喪失した状態がずっと続くのです。

彼の友人で赤瀬川原平という人がいますが、この人も過激な人で、60年代のある時期に千円札の模型をつくるというようなことをしました。それが偽札だということで警察が摘発し、実際に裁判事件になって最終的には敗訴するのですが、そのように意表をつくアクションで芸術の世界をかく乱した人です。そういったアクションを生起させた人々を、当時の警察庁長官が、「あいつらは『思想的変質者』だ」と言ったそうです。残念ながら今はそういう人は少なくなっていますが、敵ながらなかなかうまく彼のことを言い当てているように思います。

70年代の終わりの時期に、中平卓馬がその赤瀬川原平に電話をして、「ところで80年安保はどうなったんだ」と尋ねたそうです。これは笑い話に近いのですが、つまり彼は70年代の途中で記憶喪失状態になって記憶がそこで止まっているのです。彼にしてみれば、かつて60年安保闘争や70年安保闘争のうねりがあったのと同じように、70年代の終わりに80年安保闘争があるはずだと思って、赤瀬川原平に電話をかけたわけです。その話がとても感動的で、私なんかは涙が出そうになってしまうのですが。

ところで、日雇い労働者の寄せ場の山谷を舞台にした「山谷^{やま} やられたらやりかえせ」という映画があります。その映画を製作中の映画監督の佐藤満夫という人が、80年代に山谷の日雇い労働者の運動とそれを押しつぶそうとする右翼暴力団とが激しく対立する状況の中で、右翼暴力団のテロによって殺されましたが、それを受け継いで映画を完成させようとした山岡強一という人も同じように殺されるのです。60年代末に、東大安田講堂を学生たちが占拠して攻防戦が繰り広げられましたが、佐藤満夫はその時に安田講堂に立てこもった学生たちの中にはいませんでしたが、当時の東大の法学部で機動隊との激突を経験して、その後、運動の世界から遠のいていたようです。しかし、やはり、そのことに自分として決着をつけなくてはいけないと思ったのが、山谷に関わるようになった初発の動機だそうですが、そういったことも80年代の半ばにすでにありました。ですから、「浦島太郎」は今になって始め

で登場したわけではなくて、80年代の半ばにはすでに登場していたわけです。

80年代に入ってようやく少しずつ、〈68年〉の経験や体験を原点にして、小説や短歌などを書く人たちが出てくるようになりました。残念ながら若くして亡くなってしまいましたが、桐山襲(かさね)という小説家があります。彼は「パルチザン伝説」という小説でデビューしましたが、それは「東アジア反日武装戦線」という爆弾闘争を中心に闘争を展開したグループをモデルにした小説です。結局は決行されなかったのですが、そのグループが計画した「虹作戦」というのがあって、昭和天皇が那須の御用邸に行く時の「お召し列車」を爆破しようという作戦だったのですが、それをモデルにしてその小説を書いています。桐山襲には「連合赤軍事件」を扱った「スターバート・マーテル」という小説もありますし、他にもいくつかの小説を書いています。90年代に入って惜しくも亡くなりました。

今も活躍している人ですが、道浦母都子という女性の歌人が「無縁の前線」という歌集を80年代に出していて、それは彼女自身の運動経験を短歌にしたものですが、そういういくつかの文学上の試みがあります。こんなふうに、まだまだたどってみることはできますが、このあたりでおきましょう。

「浦島太郎」の話はこれくらいにしますが、実は私が一番話したいことはそういうことなんです。かなり世代限定的で、しかも個人的な観点から話していることなので、他の人にはあまり参考にならないかのではないかという思いもあるのですが。とにかく、渋谷望さんや小倉利丸さんがこのアンラーニングプロジェクトの学習会で話してくれたことを、もう少し長いスパンに置き直して捉えなおしてみたいという思いもあって、長々と話してきました。かつての60年安保闘争や、〈68年〉という時代を無名の活動家として生きた記憶を胸に秘めたまま、その後の人生を生きている人たちが今でもたくさんいると思うのです。当時の有名な活動家だけが闘争を闘ったのではなく、運動というのはむしろ無名の兵士の眼で語られるべきだと思いますが、〈68年〉というものがもっている、まだ汲み尽くされていない可能性をもう一度取り戻すというか、そういった人たちがこの社会の中でもう一度正面に出てくる時期が来たという思いが、今の私には強くあります。

Ⅲ. まとまらないまとめ

私にはこの国の政治党派が60年代、70年代にもっていた「決戦主義」や決意主義というものがどうしてもいいと思えないということがずっとあって、前回の私の話の中で「行動的快樂主義」という言い方もしましたが、むしろ、自分が解放される「快感」のようなものをどれだけ自分のものにするかというの方が、ずっと大事なはずだと思っています。つまり、運動を通じて自分が変わることはすごく楽しいことなんだということが、もう一度日本の社会運動の中で回復されなければいけないと思います。運動というと何かこう苦しいことであったり、しんどくても歯を食いしばってもやるということなんかではなくて、自分が変わることの喜びや楽しさが世界を変えることなんだというような運動感覚を、今こそ取り戻さなければいけないのではないかと思います。この前の「アンラーニングプロジェクト」の学習会で、渋谷さんが紹介してくれたような、「家賃タダにしろ！」と言いながら東京の街頭でデモンストラーションをやっている、いわゆる「素人の乱」のような人たちは、やはり、快樂を追求しているわけです。日本の社会では、快

楽を追求することは無思想で節操のないことに見られがちですが、そうではなくて、それは良いことなんだということを運動としてちゃんと表現しなければならないと思います。

共産党から自立して、60年安保闘争を主導した共産主義者同盟という政治党派が、「綱領」のようなものを創ったのですが、「全世界を獲得するために」というタイトルです。それが出された当時は私もそれなりに注目しましたが、よく考えてみると、「全世界を獲得する」と言う時の、その獲得する人はどこにいることになるのでしょうか。大真面目に言うと、世界を獲得する人はその世界の中に入っていないのかということになります。60年安保闘争をリードした人たちの運動感覚にはそんなところがあったとも言えます。それが〈68年〉ではそうではなかったということだと思います。人間が作ったこの社会で人間の可能性をどれだけ開花させうるのか、そのために自分の生の新しいスタイルを創造するための「実験」をどのように行い、今ここでどのように自分を解放することができるのかという試みが存在したということが、〈68年〉という出来事の真髄だと私はずっと思ってきました。今、それとほとんど変わらないようなことが世界的に展開されている反グローバリゼーションや反ネオリベの運動の中で、様々な形で追及されているように思います。

運動の他者との向き合い方を変える

そのように、今までにない社会と人間の生の可能性を追及するか、さもなければ窒息してしまうという意識が、〈68年〉の核心にあると思います。ただ、日本における〈68年〉の限界ということもあって、それもきちんと見定めなければいけないと思います。広い意味で新左翼と呼ばれた日本の〈68年〉の運動の中で、新左翼の政治党派と全共闘運動との二つは、互いに他者関係にあったと思います。例えば、日本共産党といった旧左翼と対比して見てみれば同一に見えるのですが、運動のスタイルとしては、新左翼の政治党派と全共闘運動というのは本来は互いに他者関係にあったはずで、これは倫理主義的な言い方に聞こえるかもしれませんが、その二つが相互に他者として尊重しあうことができているのかという問いは、今でも残り続けていると思います。

ですから、当時言われていたような、「個別学園闘争から全国政治闘争へ」というスローガンに対して、自分としては違和感がありました。そういう「溝」が本当はその二つの間にあって、それはそう簡単にまたぎ越せないものだったはずで、それは今でも宿題だと思います。それから、広い意味での新左翼総体と、〈68年〉の後、全国各地で起きてきた社会運動とはそのような他者関係にあったと思いますし、それは、その後の様々な反差別闘争とも他者関係にあったと思います。

他者関係というのは、ただ同一化すればいいとか、都合よく一部だけを貸し借りすればいいということではなくて、自分とは異なる相手のありようをお互いに尊重しながら、共に世界に向かっていくという、ある種の連合性や共闘関係をどうやったらつくれるかという問題として立てなければならないものだと思います。そういった自分と異なる運動の他者との間に確かな関係をきちんと成立させようとする事無しに、相手を強圧的に屈服させるか、相手の持っているものを自分に都合よく勝手に使ってみたりするということにしか、他者関係がつくられてこなかったということが、日本の〈68年〉の運動の限界とし

であったと思います。残念ながら、そのことは、今でもこの国での運動の大きな課題として残っています。

愚直に〈68年〉を生き続ける—若松孝二

今日の私の話の中で、〈68年〉から帰還した「浦島太郎」とでも言うべき人たちのことを何人か紹介してきましたが、もう一人だけ私が紹介したいと思う人がいます。

この国での事実としての「浦島太郎」の帰還の例として、足立正生について話した際に、彼が所属していた「若松プロ」の若松孝二という人について少し触れましたが、その人のことについてももう少し詳しく話したいと思います。彼は昨年、「実録連合赤軍 浅間山荘への道程」という映画を製作しましたが、その映画は今年になって少しずつ全国各地で上映されてきています。72年に「連合赤軍」と名乗った左翼武装グループが、浅間山荘で日本の国家権力との銃撃戦を行って、全員逮捕されるという出来事が起こりました。そこで何があったのかについては今改めて触れることはしませんが、日本における新左翼運動のある意味での一つの帰結だったとは言えるでしょう。私自身としては、自らを「連合赤軍」と名乗った人たちの考え方には違和感がありますし、その出来事自体が今でも何らかの運動的な意義をもつものであるとは、もう考えていません。しかし、それはまちがいなく、〈68年〉の運動の一つの終わり方として、大変衝撃的なことであったと思います。

彼が映画を撮り始めた60年代半ばまでの時期というのは、今の時代と違って、性というものをあからさまに見せるのではなく、性に関わる表現がもう一つ手前のレベルにあった時代ですが、若松孝二という人はそういう時代に「ピンク映画」と総称されるような映画をつくっていました。色々な映画会社がピンク映画をつくっていて、それぞれの会社の特色があるわけですが、若松孝二は映画の世界に登場したばかりの頃から、非常に独特な映画作りをしてきました。それまでの日本の映画界では、まず、映画会社の撮影所に入って、助監督などをやりながら修業を積んで映画監督になるというルートが存在していたのですが、彼は全くそのようなルートを通らずにピンク映画の監督になったのです。

1950年代の終わりに映画産業がピークを迎えた後、それが60年代に斜陽化していく時代に、その隙間をぬって性そのものをテーマとしてピンク映画というものが登場するわけです。ピンク映画というのは、とても制約が大きくて、とにかく200万円ぐらいの低予算で短期間でつくらなければならないのです。もちろん、ある種の需要があったのでそういう映画がつくられていたのですが、若松孝二はその時々政治闘争に関わる問題を映画の中で扱っていました。ピンク映画は1時間半弱ほどの長さしかないのですが、その中に必ずいくつか性的なシーンを入れなければならないというのが「お約束ごと」になっていました。彼は、そういうシーンを入れながら、映画の中で自分の言いたいことを表現することを試みていました。

彼の初期の作品で「壁の中の秘め事」というタイトルの映画が、ベルリン映画祭に参加したということがあって、そこに参加した経緯は分かりませんが、そこで彼の映画が上映されたことを、日本のオーソドックスな映画評論家たちは、日本の国辱だと言って騒いでいました。私はその映画をずいぶん昔に

見たので、その正確な内容はあまり覚えていないのですが、ピンク映画会社は映画にどぎついタイトルをつけるものなので、「壁の中の秘め事」というタイトルはまだお上品な方です。そういった扇情的なタイトルの影に隠れて、当時の意欲的なピンク映画の監督は、自分が撮りたいような実験的な映画を撮り続けていたのです、彼はそうした映画監督たちの先駆者でした。

その後、60年代の半ば以降、彼は自分で「若松プロ」という独立プロダクションをつくり、そこにいろんな人を自由に出入りさせるのです。それまでの日本の映画会社はとてつもなく閉鎖的なところで、自分の会社の映画作りの枠を一生懸命に守って、自分の会社の気風にあった映画監督を育てるということをしていました。ところが、若松プロでは、来るものは拒まずという感じで、そこにいろんな才能を持った人たちが、いわば水滸伝の話の中の梁山泊のように集まってきていて、大学の映研などでくすぶっていた才能のある人たちが出入りするような自由な雰囲気のある場所になっていました。〈68年〉の時代に入ると、映画館の外で激しい動きがいろいろと起きてきますが、若松孝二はそういった時代の動きに呼応するような映画をつくることを、かなり意識的に努力していました。その彼がそれからおよそ40年ぐらいたった後、自分が映画に関わる道を選んだ以上、「連合赤軍事件」という出来事について、映画人として自分なりにそのことに対する取り組みをしたいということをつくったのが、「実録連合赤軍 浅間山荘への^{みち}道程」という映画です。

実は、連合赤軍事件を映画にしたいと思った映画監督は、他にも何人かいますが、その中には途中で挫折した人もいます。立松和平という小説家がありますが、彼は連合赤軍事件を題材にして「光の雨」という小説を書きます。その小説を素材にして、小説と同じく「光の雨」というタイトルで高橋伴明という映画監督が映画をつくりました。その映画は、「光の雨」という小説を映画にする過程を映画にするというかたちになっています。

ところが、若松孝二は今の俳優を使いながら、その俳優たちをとことん鍛えることをして、自分の映画の中でかなり正確に連合赤軍事件を描いているのです。70年代のいつのことかは正確に覚えていませんが、日本赤軍と名乗ってアラブに本拠地を置いていた左翼武装グループが、飛行機のハイジャックを何度か決行しました。その中で一番有名なのが、ダッカで日本航空の飛行機をハイジャックした事件で、日本の刑務所に投獄されていたかつての日本赤軍やその他の政治犯及び、刑事犯を釈放することを求めました。当時の福田首相はハイジャックで人質となった人たちの身柄と引き替えに、「超法規的措置」でそれらの人々を刑務所から釈放させました。それによって、連合赤軍事件の当事者が何人か日本の刑務所を出てアラブに行くわけです。若松孝二は、その人たちにアラブで会っていて、かなり細かく連合赤軍事件の経緯を聞いていたようですが、それに基づいて、かなり正確に事件の様子を映画で表現しているようです。

そのように、若松孝二は、日本の映画会社で映画監督になるための正式なルートや、それまでの映画作りの手法から大きく外れたところから登場して、自分のプロダクションに一癖も二癖もあるような連中を受け入れながら、この国で自由な映画作りをするということをごんばって続けてきた人なのです。言ってみれば、彼はいい歳になっても映画の世界の長老や大家になることを拒否して、いつまでも一介の映画監督として自分のやりたいことを徹底的に追求することを貫いてきた人だと思います。

「実録連合赤軍 浅間山荘への^{みち}道程」という映画を撮ることで、彼はかつて自分が色々と触発され

てきた〈68年〉という時代が含んでいた問題を、自分の責任として今の時代につなげるということをしようとしたのではないかと思うのです。私は残念ながら、まだその映画を見ていないのですが、そのように彼がまさに愚直にこの映画をつくったということは、私にとって大変感動的なことです。私はそれと比較できるようなことを何かしてきたわけではありませんが、私自身もそのように、〈68年〉という時代に孕まれていた可能性を現在につなぐということ、どんなに愚直な形であれ、やり遂げなければという思いに駆られ続けてきました。

彼のような人が、そのような映画をつくることによって〈68年〉を今につなげようとしたことは、〈68年〉が今、帰還しつつあるということの一つの現れだという思いもあって、今までの〈68年〉をめぐる話の締めくりとして、少し長くなりましたが、彼のことを紹介しました。

iv. おわりに—〈68年〉から40年／「米騒動」から90年

「米騒動」—民衆の「自主的米価設定」行動

今年は〈68年〉から40年目に当たるということで、〈68年〉ということをもぐって長い時間をかけて話してきましたが、この富山に即して言えば、今年は1918年の「米騒動」から90年目でもあるわけです。私はこの「米騒動から90年」ということを大きく考えていますが、米騒動について考える際には、富山の「米騒動」だけを見るのではなく、もっと全国的な視野が必要ですし、特に関西方面に広がった「米騒動」まで含めて考えなければならぬと思っています。

この場の皆さんは、富山の「米騒動」についてはよくご存じかと思いますが、「シベリア出兵」を見越した投機などによって急激に米価が高騰する中で、富山湾沿いの水橋や滑川、魚津といった町々の「細民」の女房たちが、県外へ米が運び出されることを実力行動で阻止したり、米穀商店へ集団で押し掛けて米の廉売を要求したことから、「米騒動」が始まるわけです。その当時のとりわけ貧しい人々にとって、それこそ、米というものは人が生きることの保障を象徴するものだったと思います。米騒動は富山から始まって次第に西の方に広がっていきますが、広がれば広がるほど米騒動は勢いを増していきます。とりわけ大阪周辺では、米騒動は、一種の都市暴動であるかのような様相を呈して、地域によっては軍隊まで出動するわけです。また、炭坑での労働争議と結びついた場合も、警察だけではなく、軍隊までも出動することがありました。

この日本社会では、「米騒動」に類似することは明治時代に入ってから富山だけではなく全国各地で様々な形を取りながら継続してきたのですが、近代という時間の中で、名もない大衆が特定のリーダーや政治組織からの指導といったものなしに、まさに自分たちの生の保障の象徴である米をめぐる路上でそのような騒動を繰り広げたということは、現在でも大変大きな意味をもつ出来事であったと思います。

たまたま私がそんなことを考えていましたら、三里塚闘争の一つの行き着き方としてそこで「実験村」

ということ掲げて、農をめぐる様々な取り組みを行っている人たちが企画している集会の案内が目に入ったのですが、その集会のタイトルが「まちの困民・村の困民」です。その中で、「村の困民」ということで話をする人は、私どもが懇意にしている、山形県の置賜盆地で百姓交流会という農民のグループで活動している人です。まさにこの「困民」という言葉が、この国で今の時代を言い表すような言葉になっているのではないかと思います。

今から90年前に、その当時の困民たちの「一斉蜂起」とでも言うか、米の搬入の実力阻止や米穀商店を集団で占拠して値上げ前の価格で米を売ることを要求するといった、まさに自分たちの生の保障の象徴である米をめぐる直接行動が各地で繰り広げられたのが、「米騒動」なのです。富山の「米騒動」の場合は裁判にかけられるところまでいった人はいないかったのですが、富山から西の方へ行くほど、騒動は過熱化したので、その中で逮捕されて裁判にかけられた人たちがたくさんいるわけです。「米騒動」で実刑判決を受けたのは、ほぼ全員がいわゆる被差別部落出身の人だったそうです。全国水平社は「米騒動」から少したってから結成されるのですが、そのことにも象徴されるように、90年前の「米騒動」は、そのような運動を可能にした時代の始まりだったのではないかと思います。

「米騒動」—東アジア民衆闘争の一環として

もう少し言うと、「米騒動」というのは、1917年のロシア革命のいわば渦中に起こったとも言えるのではないかと思います。米騒動が起きたのは1918年ですから、1917年のロシア革命のすぐ後のことですし、それから、米騒動はまだ第1次世界大戦の最中のことですから、それとの関連で、朝鮮では日本の植民地支配に抵抗する「三・一独立運動」がありますし、中国では、日本の帝国主義的な圧力に反対する「五・四運動」が展開されました。

このように、米騒動はロシア革命とのいわば世界的な同時性をもつ出来事ですし、東アジアでも、「三・一独立運動」や「五・四運動」といった一連の動きが起きているわけで、まさに「米騒動」もそのような東アジアでの民衆運動の大きなサークルの中にあると捉えてもいいと思います。つまり、民衆の時代が始まるのです。とりわけ日本は後発資本主義国家なのですが、第1次世界大戦の「火事場泥棒」的な経済成長の中で、日本の資本主義も独占資本主義の段階に突入していき、「米騒動」以後、日本での労働争議の件数はうなぎ登りに増加して、いろんな工場や職場に労働組合が結成されていきます。それに対抗して、国家の側でも、現在の社会保障・社会福祉にあたるような社会政策というものを、初めて真剣に考えなければならぬ段階に入ります。

ですから、日本史の研究者の間では、大正期を日本における「社会の発見」の時代だと見る人たちがかなりいます。明治という時代は、いわば、社会抜きに国家だけで「富国強兵」というスローガンを掲げて近代化路線を突き進むわけですが、大正期になると、社会という単位が国家という単位とは相対的に別なものとして存在するということが人々の意識に上り始めます。「社会的なものの成立」という言い方もされますが、国家の側が社会秩序の安定のために、社会政策を通じて社会保障政策を真剣に考えざるをえない時代に入ります。

このように、大正期になって社会という言葉が盛んに使われるようになりますが、それから昭和期に入ると、社会という言葉は押し並べて左翼的な匂いがするものとして、国家の取り締まり対象になるという時代がすぐにやって来ます。大正期といえば「大正デモクラシー」といわれるように様々な社会運動が活発に展開されていましたが、支配者側と民衆側との双方が、社会という言葉を経営的に使わざるを得なくなったのが大正という時代です。そのような時代の風潮の中で、選挙権を万人に与えよ！という運動の流れが大きな勢力となり、大正期の終わりには普通選挙が実施されることになるわけです。それと同時に、治安維持法も成立するわけです。

「米騒動」—社会運動の開花を促したものとして

そのように、社会という人間の集合性が国家から区別され、ある広がりをもつものとして多くの人々に意識されるようになると共にいろいろな社会運動が起こってきて、大正期には、いろんな思想にもとづいた労働運動が展開されます。その中でもとりわけ私が個人的に興味をもっているのは、いわゆる大正アナキズム系の労働運動です。アナルコサンジカリズムといった言い方もしますが、アナキストの大杉栄が生きていた時代では、それが一時期、日本の労働運動の主流を占めていたような時期もありました。しかし、大杉栄が虐殺されてからは、日本の労働運動からアナキストの影響は衰えていきます。もちろん、その他にも、「青鞥社」といった女性解放運動もあれば、「水平社」を中心にした被差別部落の解放運動もあるというように、大正期には、現在の日本社会に存在する様々な課題に関わる社会運動の大部分が登場しています。そういう時代の始まりが、米騒動ではなかったのかと思います。

それがそのすぐ後の昭和期に入るとどうなってしまったかは、皆さんもよく分かっていると思うのであえて言いませんが、大正期は、ほんの短い間に豊かな多様性をもつ様々な運動が花開く時代だったのです。今から思うと残念なことですが、ロシア革命が曲がりなりにも成功して共産主義政権が当時の世界で唯一ロシアで成立した後、周囲の国々がロシアを包囲して、革命を圧殺しようとするのと同時に、それをロシアの外に波及させないための軍事的介入を行いました。そのような他の国々からの強圧的な包囲と軍事的介入によって、一国社会主義というかたちで、ソ連の中だけで革命を維持するしかなくなってしまうのです。

そうした状況の中で、世界中のいろいろな国々の社会主義や、共産主義革命を目指す運動が、ロシア革命を擁護することを自分たちの運動の主要な課題にせざるを得ないところまで、追いつめられていきます。同時に、そうした世界中の革命運動や社会変革を目指す運動がコミンテルンという形でソ連共産党を頂点としてピラミッド状に編成されて、世界の国々のいろいろな社会運動をモスクワの共産党本部が指導するという傾向がどんどん強くなっていきます。その余波が日本にもやって来ます。

大正期には有名な「アナボル論争」というのがありますが、アナキストたちとロシアのボルシェビズムを支持する人たちの間で、とりわけ労働運動をめぐる、激しい論争が大正期の終わり頃に繰り広げられます。残念ながら、アナボル論争は大正アナキズムの中心的な人物であった大杉栄が憲兵隊に虐殺されてから次第に勢いがなくなり、日本の社会運動の中心はマルクス・レーニン主義の勢力にな

っていきます。そのような意味で、大正期というのは、前の私の話で使った言い方で言えば、共産党や全国規模の労働組合を頂点として諸社会運動がピラミッド状に組織化されるという、社会運動の「古典的範型」が形成され始める時代であり、同時に、大正期に豊かに花開き始めた運動がそこに収斂されてしまって、運動の多様性がボルシェビズムに切り詰められてしまった時代であったのです。以前、渋谷さんに「アンラーニング」の学習会で話してもらった際に、「米騒動」について触れていたことの意味が今になって分かってきたように感じています。「アナボル論争」後、日本共産党の指導の下で日本の社会運動が「古典的範型」に切り詰められていく以前の、大正期の雑多でエネルギーにあふれた運動の可能性に注目したいというのが、渋谷さんの言いたいことだったと思います。そのような意味で、「米騒動」は時代を切り開くものであったと思いますし、それをいろんな意味でいじくり回してみたいんです。今年は「米騒動から90年」ということで、社会運動の「古典的範型」の成立以前の大正期の運動が豊かに展開されることの出発点が富山にあったんだということ、「米騒動」の発祥の地であるこの富山の中で言っていきたいと思っています。

この08年という年に、90年前の米騒動について考えることの意味は、まさに米騒動から100年目を迎える今から10年後の2018年という時までには、私たちが新しい社会運動のあり方を創り出すための手がかりを探るとのことだと思っています。言い換えれば、「米騒動」からは100年目に、〈68年〉からは50年目になる2018年までの今後10年の間に、この国での社会運動が、〈68年〉を一つの転機として解体されてきた社会運動の「古典的範型」に変わる、新しいモデルというものをどのように作りだすことができるかということが、私たちに問われているのではないかと思います。そのような意味で、米騒動から90年、〈68年〉から40年目に当たる今年08年は、自分たちにとって大きな意味を持つ年にしなければいけないと思っています。

〈68年〉から40年 G8を迎え撃つ

今年の08年7月に、北海道の洞爺湖畔でG8洞爺湖サミットが開かれます。G8サミットは、一昨年はイギリス、昨年はドイツといった順番で開催されてきました。この間、G8サミットが開催されるごとに、G8サミットというものが世界の民衆をどれだけ苦しめてきているのかということに対する反撃として、イギリスでもドイツでも何万人という人々が集まって、それに対する激しい抗議行動や阻止行動を繰り広げることが行われてきました。そのG8サミットが日本にやってくるわけです。G8サミットをこの後どうするのかということもちろん大事なのですが、そのことよりも、むしろどのように日本の社会運動がどのようにG8洞爺湖サミットを迎え撃つのかということの方が大事だと思っています。

全世界的にそれまでの社会運動に対してもはや後戻りができないような「分水嶺」を画したということが〈68年〉の大きな意義だったと思いますが、それ以後、私たちは「ネオリベ反革命」という「ポスト〈68年〉」を生きているわけです。この国でのG8サミットの開催を迎えて、日本の社会運動がそれを迎え撃つことを通じて、「ポスト〈68年〉」を私たちは本当に超えることができるのだろうかということが、問われているように思います。言い換えれば、G8サミットを迎え撃つことの中で、〈68年〉に匹敵するよう

な新たな「分水嶺」を、日本の社会運動はつくり出せるのか、そして、今、世界各地の民衆による反グローバル化の「闘争のサイクル」に、この国の私たちが本当に参加できるのかということがあるのではないかと思います。そのように、私たちがG8サミットを迎え撃つことを通して、先ほどから言ってきたように、「米騒動」からは100年目、〈68年〉からは50年目に当たる、今から10年後の2018年に向けた新たな社会運動を、私たちはどのように創りだしていけるのかという「問い」への手がかりが生み出されるのではないかと思います。

私たちも微力ではありますが、この間、「富山県平和運動センター」の人たちに対して、共にG8サミットを迎え撃つための共同行動を提起して、「G8を問う！共同行動・富山」を発足させ、G8サミットについての学習会や講演会、街頭行動を一緒に企画しているところです。

ずいぶん長い話になりましたが、私が生きてきた自分の個人史と私が生きてきた同時代史を結びつけながら、〈68年〉というものが持っていた未だ汲み尽くされていない可能性を、新しい社会運動の「範型」を創りだすことにつなげていきたいという思いから、話をしてきました。自分でもちょっとセンチメンタルな気分になっているところもありますが、先ほども紹介した、アントニオ・ネグリがイタリアに帰還した時の文章の最後の部分を、今日の話のしめくくりとしてもう一度読み返してみたいと思います。

「帰還は、抵抗と未来を媒介することができる言葉です。さらに言うなら、それは時間と空間の移動を通して、抵抗を未来に投射することができるものです。」

私は自分のことを恥ずかしげもなくネグリと比較するつもりはもうどうありませんが、私にしても、彼が言うような意味での「帰還」を一人の「浦島太郎」としてを成し遂げたいという思いが強くあります。今までの私の話を、その「帰還」の途上からの一つの報告だと思っていただければ幸いです。

* 追記:「米騒動」から90年については、08年11月23日に平井玄さんと山口素明さん(フリーター全般労組副委員長)を迎えてもった『「米騒動」から90年——私たちは『米騒動』から何を受け取るか?』の記録(近刊予定)を参照されたい。

井田久翁

それは喫茶店から始まった

——私の1968年—1973年——

—以下に掲載するのは、今回の「アンラーニング」でとりあげた(68年)を、学生ときわめて近いところにながら、それとはちがった位相でくぐった人からよせられたものである。なお、タイトルや見出しなどは編集者がつけたものであり、それが寄せられたもののおびている色合いやにおいをそこねることになってはいないか、気がかりである。

編集のつごうで、よせられてから時間がたってしまったことを、あらためておわびする。

I . 砺波地区反戦青年委員会結成前後

HT君から、砺波地区に反戦青年委員会を作るので参加しないかと誘いを受けたのは、1968年の秋だったと思う。即座に参加する、と答えた。私の心は決まっていた。反戦の活動をやれば、生きていくことにおいて不利益な事があるだろう。しかし、「ここでやらないことで後で後悔するよりは、やったことで後悔するほうを選ぼう。」

たしかKN駅近くの喫茶店「スギハラ」だったと思う。そこに富大の「社会学同」の活動家だったHT君とリーダー格のK君、そして、K君の中学の同級生ですでに社会人になっていた人が居た。名前は思い出せない。G君は居なかったと記憶している。

K君から、砺波地区に労働者の組織として反戦の組織を作りたい、「社会学同」としては高校生・中学生まで組織出来ないかと考えている、という話があった。それから、最近の東京や大阪での闘争の様子などを聞いた。たわいない話だが、革命が成功したら次はどうするとK君に聞いたら、真面目な顔してロケットに乗って宇宙に行って革命をやると言って理屈を並べたので、みんなで大笑いした。そこで初めて「ブント」の政治機関紙「戦旗」を手にする。カタコトと走る加越線の列車の車内の中で、これから始まるであろう事柄に、期待を膨らませながら、HT君と共に家路に着いた。

なぜ、HT君から反戦・政治運動の誘いを受けたかといえば、その年のお盆休みにあった同級会で顔を合わせたHT君は、自分は学生運動をやっている、10・8羽田闘争に参加したという話をした。それに対して、私は、「三派全学連」の行動には共感すると言った。そんなやりとりがきっかけだったのだと思う。私が「三派全学連」にシンパシーを感じる組織労働者であったことが、大きな理由であったと思

う。

初めてのデモは、北陸三県の大学の新左翼の党派と社会党の一部の労働者が小松市の航空自衛隊に対して、自衛隊反対・小松空港軍事化反対のスローガンで集会を開いた後のデモだったと思うが、よく憶えていない。富山からのデモ隊は、チャーターしたバスに乗りこみ、小松市に行った。市内のどこかの運動公園だったと思うが、そこに北陸三県のデモ隊は集結した。富山からは中核派、社会党の労働者、少数だが緑のヘルメットのフロントが来ていた。金大からは、革マル派、中核派、福井大からは、青ヘルの解放派が多数来ていて、運動公園は赤旗とヘルメット姿の人で埋め尽くされ、壮観であった。

型通りの各セクトの挨拶の演説があり、各セクト間で演説に対するヤジがあった。集会も終わりに近づいた頃に、突然、中核派と革マル派との間で、乱闘騒ぎが起きる。中核派の言い分によると、革マル派の掲げたスローガン「小ブル急進主義を乗り越えて」は、この現にやっている集会の主旨とは違うから、「小ブル急進主義を乗り越えて」の横断幕は掲げないように抗議したら、突然、革マル派の方から殴りかかってきたそうである。初めて見る「内ゲバ」騒ぎに少し驚いたが、HT君は、こんなものだよとニコニコ笑っていた。それから小松基地までジグザグデモをして、何事もなく、チャーターしたバスで富山へ帰った。――

バスの中で、K君から月刊誌「現代の眼」を読むように勧められる。「朝日ジャーナル」は読んでいたが、「現代の眼」は読んだことはなかった。それからは、「現代の眼」を読むことによって、新左翼の知識を身につけて行くことになる。(革マル派の「小ブル急進主義を乗り越えて」のスローガンや運動組織方針が、どんな政治的な意味や状況を生み出すか、まだ分からなかった。)

68年秋に、砺波地区反戦委員会の結成の集会が開かれる。十五、六人ぐらいしか参加者はなかった。K君が、G君らとやってきた。参加者の多くは、G君らの仲間の電電公社の労働者だった。それから、三十歳前後の女性がやってきた。中原遼子と名乗った。後に、中原とは変名であり、革マル派の人間であることが明らかになる。雨がひどい夜の集会だった。K君が、参加者が少ないので反戦青年(準備)委員会にしようと言った。

反戦青年委員会の結成を呼びかけるビラの基調報告は、ベトナムの解放戦線の闘いのことや、世界各地でのベトナム反戦運動の高揚の中で日本の労働者も共に戦おう、といった内容だったと思う。K君が書いた文章だと思うが、最後に、「権力に思い知らせてやろう。」と結んであったのは、印象に残っているし、当時の雰囲気が出ていると思った。とにかく、反戦青年委員会は、動き始めるはずだったが、動かなかった。理由は、支援するはずのK君たちに富大経済学部で端を発する学園闘争が起きたこと、また、反戦青委の中心的役割を果たすはずのG君らが、総評電通の労組が沖縄返還運動を現地沖縄でやるために、反戦青委の活動を止めたことによる。これは痛かった。約3ヶ月、ただG君からの連絡を待つしかなかった。

反戦青委の結成集会から3ヵ月後、私たちは、集まった喫茶店で、反戦青委の運動をやることを確認した。4、5名しか集まらなかったが、このメンバーでやるしかなかった。そして、とにかく、運動方針のスローガンを決め、砺波地区反戦青年委員会として、デモに参加することにした。4月の初め頃、社会党・総評主催の「ベトナム戦争反対！ 安保反対！ 沖縄を返還せよ」の集会とデモに、四、五人だった

と思うが参加した。そこで、中核派のSさんを見た。中核と書いた白のヘルメットを被って、中核派の政治機関紙「前進」を集会参加者に売っていた。私も一部「前進」買った。そこには中核の主張として、**4・28**沖縄闘争では「首相官邸を占拠せよ」と書かれていた。デモはもりあがった。

その頃の社会党・総評の人たちは、まだ、やる気が十分だった。ジグザグデモをやり、道路に座りこみ、デモ隊を規制する機動隊に激しいヤジを浴びせたりもした。雨の中の富山市内をデモ行進する中で、デモ隊の後方で、機動隊と誰かが激しく争う音がした。後で新聞で知ったが、富大の全共闘系の学生たちが、労働者のデモ隊に合流しようと阻止線を張る機動隊と激しく揉みあう音だった。

Sさんと「富山反戦労働者市民会議」（という名称だったと記憶している）についてだが、Sさんの印象は、静かな雰囲気の中に強い意思を漂わせている、極めて日本的なリーダーといった感じであった。Sさんは、**60**年安保闘争当時からの富大の活動家で、革共同中核派に属し、中核派の反戦青年委員会や「富山反戦労働者市民会議」のリーダー的存在であった。また、「富山反戦労働者市民会議」の多くは不二越をレッドパーージされた人たちで、根っからの労働者だったので、私たちと気があった。何回か、Sさんと彼のグループのメンバーたちと話す機会があったが、Sさんは、**60**年安保闘争当時、全学連が国会突入した時の状況を楽しそうに話してくれた。また、不二越をレッドパーージされた人たちは、ほとんどアルバイトで生活を支える状態にもかかわらず、顔は明るかった。

4月になって、砺波地区反戦青年委員会として、**4・28**沖縄闘争に向けた独自の政治集会を開くことにした。G君の尽力のおかげで、多くの若い労働者が集まってくれた。その中で、**2**人の高校生がやってきた。工業高校の生徒だった。高校生らしく、なぜ、「安保反対」と言わず、「安保粉砕」なのか、「安保粉砕」とは何を目指しているのかなど、いろんな質問をあげてきた。それらの質問に、私たちが一つ一つ、「新左翼」の考えを話すことは、楽しい事柄であった。

ここで、一つの出来事が起きる。後で分かったことだが、**2**人の高校生が集会の会場に入ってきた時、**2**人の後に**1**人の男が後を付けるように付いて来て、ちょっと会場の中を見て、帰っていった。男は工業高校の生活指導の教師だったのだ。二人の高校生は、後で学校の教師に、二度と政治的な場所には出入りはしません、というような誓約をさせられる。

4・28沖縄闘争の砺波地区反戦青委の基調報告の文章を書いたのは中原さんだが、安保闘争・沖縄闘争の状況や問題点を指摘しており、的確性という点でなかなか良い文章だったと思う。砺波地区の総評系の労働組合や、社共の関係する団体の中で書かれている文章の水準を超えていたと思う。

反戦青委の内部は、三者それぞれであった。G君は、職場内で、日共・民青に対抗できる社会党系の組織を作りたかったし、中原さんは反戦青委や職場で、革マル派的な人間を生み出したかった。私は、**10・8**羽田闘争以降の新左翼運動・全共闘運動を評価する人間を、反戦青委・職場で求めている。

G君とはともかく、特に中原さんや革マル派とは、感性というか考え方に肌に合わないものがあった。革マル派という党派は、きわめて日本的なインテリゲンチヤーの感性を持つ党派だと思う。反日共・反スターリズムを核として党派を結成していくわけだが、論理としては良く分かるが、現実感として何か違うな、と感じていた。中原さんや革マル派と論理的に対抗するには、「朝日ジャーナル」や「現代の眼」などを読んでいくくらいでは対抗できないので、富大学園闘争が始まってから、連絡できずに

困っていたHT君やK君らに、思い切って学園封鎖中の富大で会いに行くことにした。

大学の正門は、椅子と机を積み上げて封鎖してあった。正門横の通用口から大学構内に入りようとしたら、ヘルメット姿の男がいた。私は、「大学の中に入りたい。私は、労働者である」と言ったら、ヘルメット姿の男は、一瞬迷った感じだったが、「いいだろう」と言って、大学構内へ入れてくれた。大学構内は、大学を封鎖した学生たちで行われている、自主的な大学祭の最中であつた。大学構内を歩き、HT君や、K君を探した。

初めて入った大学の印象は、「大学と言ったって、大きな教室がいっぱいあるだけではないか」という感じだった。黒田講堂や、文理学部の建物などを巡り、薬学部の建物に来たとき、K君らの「社会学同」のグループに出会った。K君は、「社会学同」の十数人のグループの前で何やら演説し、「これから、薬学部を占拠する」と叫んだ。それからは、薬学部の建物は、「ブント-社会学同」の拠点の場所となったようだ。私は、K君に声をかけ、話をした。砺波地区反戦青委のその後の様子を伝え、「ブント」の政治機関紙「戦旗」をくれるように頼み、また、全国の闘争の様子を聞いた。K君は、砺波地区反戦青委は潰れたと思っていたらしい。私は、今の砺波地区反戦青委の様子を話し、メンバーは少数だが、G君を中心になんとか活動していることを伝えた。その時は、HT君には会えなかった。そして、それからは、月の日曜日の何回かは、封鎖中の大学の構内で過ごすこととなる。

Ⅱ. 富大「ブント-社会学同」と富大闘争

富山大学の「ブント-社会学同」のメンバーについて、私が知っていることは少ない。名前がわかるのは、リーダーのK君・HT君・T君（T君は、ブントから赤軍派へ、それから社青同解放派へとセクトを移動した人物である）・大阪出身のI君ぐらいである。

富大闘争の発端は、経済学部内の二人の教授が対立して、教官たちの派閥対立が学生たちの授業にまで影響を及ぼしたため、そのことに反発した学生たちが教官を批判し、授業や大学の在り方、知識人とは何かを追及したことである。

まず、セクトに属さない「一般学生」といわれる学生たちが、闘争運動の前面に出てきて、全国で起きている学園闘争に習い、学部の校舎をバリケードで封鎖した。そして、教官たちに、学部内のゴタゴタを学生を含む自己の力で解決を図るように要求し、対峙した。

闘争が長期化する様相をおびるようになると、党派・セクトに属する人たちが前面に出てくるようになり、学内闘争を70年安保粉碎闘争に向けた政治闘争へとリードするようになる。このような変化は、IK君に言わせると、「どうすることも出来ない違和感を感じた」。IK君は、闘争の始まり頃に逮捕され、下獄後は闘争の前面に立つことはなく、一定の距離を保っていた。（IK君はHNさんと共に、富大闘争での救済の活動に当たられた人である）

ここで、HT君の学生運動のきっかけについてふれておく。HT君から聞いたところによると、10・8羽田闘争が起きる半年前の砂川闘争に、日共・民青のメンバーたちと現地砂川での集会・デモに参加する。日共・民青は、雨の中での傘差しデモ。中核派は、雨のなかで激しく機動隊と衝突した。HT君

はべつに、日共・民青の思想や行動に共感していたわけではなく、当時の大学自治会を日共・民青が握っており、その活動家の多くがF高校の先輩たちだったため、誘われて、自然と日共・民青の自治会活動を手伝うようになった。それだけのことである。

日共・民青の活動に対する釈然としない気持ちから、砂川闘争の後、日共・民青を離れ、10・8羽田闘争では、中核派の一員として参加した。10・8羽田闘争以降の新左翼の街頭闘争・ゲバルトカンパニヤ闘争が続く中で、HT君は、K君と知り合う。K君が、「オレと同じ高校じゃないか。後輩ならオレのところ来い。」と言って、「ブント・社学同」に誘った。60年安保からの純粋な政治革命集団の「富大中核派」よりも、反「マル学同」として、文学サークルから出発した「富大社学同」のほうに気が合ったらしい。確かに、一人一人個性的な人間が多かった。裏を返せば、イカゲンさ、イカガワシさを漂わせた人たちの集団であったことは確かであり、またそれが魅力的であったのだろう。

封鎖バリケードの薬学部の風景といえば、警察から逮捕状が出ているK君が寝泊りしていた。机と椅子を片付けた教室の床に布団を敷き、その中で本を読んでいたK君を、今でも思い出す。私が、どんな本を読んでいるのかと聞くと、当時の日共を支持するただ一人といってもいいぐらいの哲学者？柳田氏の、初歩的な「弁証法的唯物論」を論じた本だった。私になぜ、そんな本を読むのかと聞くと、K君は、簡単で分かりやすいと言った。K君らしい考え方である。

K君は、大学闘争の中で、「富大社学同」のリーダーとして、大学構内の施設の破壊行為の責任者として警察から逮捕状が出た時、すぐに富山の地を離れ、逃亡生活に入った。K君の話によると、関西—中国地方—四国と渡り歩き、東京・関東—東海地方と逃亡を続けていた。その逃亡中に、K君の父上が亡くなられた。K君は、父上の葬儀を警察が監視する中で、一瞬のスキをついて父上の霊前で手を合わせ、すぐに逃走するというスリリングな場面があったと聞いた。今から考えると、「社学同」には独自の逃亡のルートがあり、それを支える人たちがいたらしい。約二ヶ月の全国各地での逃走生活の末に、富山に帰った。それからのK君の逃亡生活は、占拠していた大学の薬学部校舎に身を潜めるというかたちになったのではないかと思う。

日共・民青による卑劣な行為によって、K君は八月下旬か九月の始めごろに警察に逮捕される。逮捕の経緯の話はこうだ。紛争中の経済学部で、日共・民青系の父兄から、紛争の収拾とストライキの中止のことでK君とぜひ話し会いたいとの連絡が何度かあり、その都度、断っていたが、先方がどうしても会って話し会いたいとのことで、会うことになる。落ち合う場所に出かけて行ったら、待っていたのは日共・民青系の父兄ではなく、警察だったわけである。いつかは逮捕されるとは覚悟していたと思うが、こんなかたちで逮捕されるとは、思ってもいなかったろう。K君は1ヶ月か2ヶ月ぐらいで保釈が認められ、留置場から出てくるわけだが、保釈後は、運動からも、「富大社学同」からも、微妙な距離を置くようになる。これは、K君の保釈中といった身分と共に、「ブント」内での70年安保闘争の進め方について、各グループ間の対立が、4・28沖縄闘争を経て大きく表面化してきたことにある。「赤軍派」の登場である。これらの事柄についてK君がどのような態度を取ったか、私は知らないし、知る立場には無かった。

ここで、K君についての私の印象とHNさんのことにふれておこう。

私のK君への第一印象は、いかにも大学生らしい学生といった感じであった。当時でもあまりいな

かった「学生言葉」を使うことがすごく印象的で、才気が溢れている青年といった感じだった。しかし、才気が溢れている感じの人物像は、他人には好ましい良い人物に見えるが、また同時に、警戒心を抱かせてしまったりするものである。そして、K君は、何よりも他の「富大社学同」メンバーと違い、文学や哲学の話はあまりしないで、現実の運動がどう動くか、動かすことが出来るかといった力学の話が全てであった。事実、K君が「全共闘運動」の思想的な質や知識人の有り様の変化を、自分の思想として語ったことは無かったようだ。それらのことがあって、HNさんには、彼のことが「富大社学同」の単なるリーダー・「官僚」としか映らなかったようだ。当時のHNさんは、大学の教官の中では数少ない、良き学生運動・新左翼運動の理解者であった。HT君らのHNさんの印象は、留年を繰り返しているひねた大学生といった感じで、学生運動をやっている学生たちに、「現時点の学生運動の世界革命への展望は何か」というようなことを聞いて歩いたので、HNさんは、「4トロ(第4インター)」の人間かと話題になったそうである。

K君に最期に会ったのは、いつのことだったろうか。今となっては、その季節さえも記憶に無い。たしか、HT君と「富大社学同」の創立者の一人であるTTさんとの三人で、K君の下宿を訪ねた。古い建物の木造アパートで、学生が住むには品のいい感じのところであった。部屋に入ると、ベランダ部分といえる場所で、「富大社学同」の創立者のYYさんが、寝ていたK君、HT君、TTさん、YYさんらと、何か話をしていたと思うが、何の話か覚えていない。私は話の中に入らなかったと思う。

YYさんが、「赤軍派」が抜けた後の「統一ブント」の分裂とこれからの展望について、「関西ブント」の立場から話していたと思うが、部屋の奥の布団の中から、寝ぼけたような、甘えたような声があった。K君の彼女が寝ていたのだ。その女性は、幼な顔が残る顔立ちの、美しい女性だった。K君は、甘えるような、拗ねたような態度の彼女に対し、幼子をあやすように接していた。彼女を前から知っている三人が、K君と彼女を見る目は、暖かく感じられた。私は、なぜ、このような女性がK君と同棲しているのか、分からなかった。彼女は、学生運動の闘士といったタイプではないことでは、確かであった。

その後のK君と彼女がどんな遍歴をたどったのか、私は知らない。K君のことは、HNさんから、「K君は、今度、卒業するらしいよ」と聞かされ、「卒論は、現代帝国主義論らしいよ」と聞いたのが、最期であった。

HNさんとの出会いは、八月のお盆の時だったろうと思う。HT君とTTさんに連れられ、その当時、五福にあったお宅を夜に訪ねたのが最初であった。正確には、前に二度会っているとと言えるだろう。最初は、60年代の初め頃のNHKのドキュメント番組だったと思うが、HNさんの奥さんのY子さんが出演した、関東地方のある中学校の先生と生徒との心温まる交流を描いたテレビの番組上だった。その中の、「Y子先生は、学生結婚しているのです」という場面で、「HNさんは、東大の大学院の学生。Y子さんは東大を卒業して、中学校の先生」というナレーションがあり、面長で長髪のHNさんが映し出された画面を、今でも覚えている。そして二度目は、大島渚監督の独立プロ「創造社」の製作の映画「少年」の上映会が、高岡市の市民会館であった時、映画の上映前に、大島渚・小山明子・渡辺文雄さんらが、私たち観客と懇談する時間があつた。私が大島さんに、その当時の政治情勢について初歩的な質問をした後、大島さんに話かけたのがHNさんだった。たしか長髪で、グレーのヤッケを着込んでいたと思う。

大島渚さんとの出会いは、私にとってある意味で、それからの人生を決定づけるひとつとなった。大島さんとの質問・会話は、幼稚でたわいのないものだったが、話の一つ一つに、笑顔でメガネの奥の目をキラキラさせて、答えてくれた。私は、震えるような感動を覚えた。こいつはすごい、世の中にこんな人間もいるのかと感じた。「まんざらこの世の中、捨てたモンでは無いな」と思った。

当時、職場で何が嫌だったかといえば、キツイ肉体労働や長時間労働に加え、「上司に怒られないようにするには、どのように振舞えばいいのか」が、うまく出来なかったことにある。絶えず、上司の顔色を窺う雰囲気に加え、複雑に絡んだ血縁・地縁関係が支配する職場は、全く面白くはなかった。

Ⅲ. 極私的「富大社学同」てんまつ記とその後のHT

富大闘争 封鎖中のキャンパス風景とHT君のこと

全学バリケード封鎖・全学部ストライキと言ったって、正門に机と椅子が積み上げられているだけだった。横の通用門は、開いていた。何よりも、「全共闘」系・セクトの学生など、闘争支持の学生がキャンパス内にあまりいないのだ。キャンパス内にある学生食堂は、いわゆる「一般学生」の人たちで賑わっていた。それで、闘争に敵対する日共・民青系の学生たちは、一步も学内に入れないのだ。緩やかな封鎖の中、東大・日大の闘争とは、違った不思議な風景だった。

要するに、全国の大学で起きている大学紛争・学園封鎖と同じだと分かったと、いわゆる「ノンポリ学生」や教官らが、「寝ストライキ」とばかり、キャンパス内にいっさい姿を現さなくなったのだ。だから、全学バリケード封鎖・全学部ストライキの学内は、人っ子一人いないような静かな風景だったのだ。

そのうち、学内キャンパスに誰もいないと分かった(大学職員は、事務所で仕事をしていたようだが、封鎖された構内キャンパス内には、出てくることはなかった)、八月頃からだと思うが、近所の人だと思われる人が朝の散歩を楽しみ、子供たちがキャンパス内を走りまわって遊んでいる風景となった。それは、非日常の風景が普段のありふれた日常と感ぜられるようだった。富大「ブンド-社学同」の闘争拠点となったのは、薬学部の建物だった。そこに、逮捕状の出ているK君が潜んでいた。

富大『社学同』と政治闘争・学内闘争について、私が知っている2, 3のことについて

富大「社学同」は、政治党派としての中核派と違い、少数のメンバーでサークル的性格を脱しきれないセクトだった。そのため中核派からは、いつも嘲笑されていた。しかし、学内や街頭で、政治党派として活動・表現していく以上、対権力(警察)・党派闘争で強られる厳しさの中で権力(警察)への屈服や裏切りもあり、闘争から離脱する者もいた。このような事柄に対するK君らの対応の仕方は、私にとってはあまり面白くないものだった。このことは、「左翼・新左翼」の持つ体質だと言え、それまでだが。

経済学部での紛争を発端とする富大闘争の渦中で、また、富山市内での街頭デモなどで、何人かの逮捕者が出た。逮捕された人は、長くて20日ぐらい拘置され出てくるのだが、逮捕・拘置された人の中には、権力(警察)の恫喝・脅しに屈し、警察・公安のスパイとなって戻ってくる者がいた。

「どうもAの様子がおかしい。逮捕されて2、3日で、警察から釈放されてきた。Aの話では、警察の取り調べは簡単な、形式的なものだったようだ。ハイハイと取り調べに応じていたら、帰ってもいいと言われたよと笑っていたが、何か今までと感じが違って、オレたちを避ける感じだった。それで、Aを締め上げたら、釈放を条件に警察・公安に富大「社学同」の内部情報を漏らすことを約束し、権力の「スパイ」にならされたようだ。また、Bは、もうみんなと行動や活動が出来ない、富大「社学同」から離脱したいと言っている。こんなことをいつまでもやっていたら、オレの未来は無くなると言っている。」それらの話しのやり取りのなかで、リーダー的な存在のK君は、「Aには、きちんと話しをつけてこい。また、Bは、まあ仕方が無いだろう。Bからはカンパや金を貰っておけ。あんまり乱暴にやるなよ。」と、何人かのメンバーに指示していた。HT君は、傍でニコニコと笑いながら、みんなのやり取りを聞いていた。その当時のHT君は 肩の力を抜いた快活さを漂わせていた。私は、そのことで、中学時代とは、変わったなんだなと感じた。

HT君の当時の富大「社学同」のメンバー内での立場は、微妙なものだった。まず、日共・民青と自治会活動をしたことや、また、一時期、中核派に属していたことなど。そして、何よりも、HT君は「文理学部」だったので、学部内での活動や、支持者・シンパの獲得がやりにくい雰囲気があった。「文理学部」は教員になる者が多い学部であり、学生運動をやっていると、「教員試験」には受かっても、教員として採用されないのだ。まず、逮捕歴があると、絶対にだめらしい。そんな中で、あからさまに、「日共・民青的センスを脱していない。みんなに分かってもらいたいなど言っていてどうするのだ。」と、批判されることがあった。K君は、「文理学部だから、分かってやれよ」と言って擁護していたが、そんな時、HT君は静かに微笑みながら、じっと耐えていた。

K君ら富大「社学同」が封鎖した薬学部校舎の風景は、どのようであったか。玄関や入り口は、机と椅子などを積み上げて、人が一人しか通れないようになっていた。各部屋や教室内といえば、ガランとして何も無いのだ。教授や教官たちが、全学ストライキ・封鎖を叫ぶ学生たちの破壊行為を恐れ、書物や備品などをあらかじめ持ち出してあったのだ。

ガランとした教室内で、何人か寝泊りしていた。T君などは、学生運動をやってパクられたのが祟って、親からの仕送りを半年も止められ、金銭的には苦勞していたらしい。今でも、素肌に占拠した薬学部にあった白衣を着て、粹に颯爽と大学キャンパス内を歩いていた姿を思い出す。

K君らに会いにバリケード封鎖中の大学に行ったのは、K君らが画策しG君らと結成した「砺波地区

反戦青年委員会」内部での運動方針を廻る論争の中で、中原さん一革マル派に対抗するため、「共産主義者同盟」の政治機関紙「戦旗」を読みたかったからだし、何よりも、安保・沖縄闘争及び全国学園闘争の状況を知りたかったからだ。

何回か、富大「社学同」の占拠拠点となった薬学部校舎を訪ねたが、なかなかHT君には会えなかった。文理学部内で、宣伝・オルグ活動をやっているらしかった。いつものように訪ねた薬学部校舎で、K君らと話しをしていると、HT君がやって来て、「おお、イダか。何でここにいるんだ」と話しかけてきた。あまりメンバー間の連絡は、取れていないらしい。私は、それまでの砺波地区反戦の経緯や、現在の運動の状況を話した。砺波地区で労働者が主体となった反戦青年委員会が組織されたことに、HT君は驚き、また喜んで、「何か出来ることがあったら、手伝う」と言った。

バリケード封鎖の薬学部校舎での、M子さんのこと

HT君ら富大「社学同」のメンバーらと雑談していたら、何人かが部屋に入ってきた。その中に、中学時代の同級生のM子さんがいた。(ここにいることは誰にも言わないでくれとの約束をしたので、名前は秘す。)

ロングスカートを颯爽となびかせながら部屋に入ってきたM子は、中学時代と変わらず、顔は知的で、眼は輝いていた。M子は少し驚いて私に近づき、「社学同」のシンパかと聞いた。私は、「ブント」の学生組織「社学同」よりも、革命を目指す党(ブント)に近い意識が強かったので、意味が分からず、一瞬返事に詰まったが、「ああ、そうだ」と言った。(このような党派性の自覚のなさは、後で、とんでもない災いをもたらし、関係する人たちに迷惑をかけるのだが。)

M子が、HT君らと何を話したのだろうか、今となっては記憶がない。おそらく、経済学部で端を発する学園紛争に対する、いわゆる一般学生といわれる人たちの関心のなさに対する、怒りにも似た嘆きだったと思う。M子の前では、HT君はいつもの饒舌は消え、奇妙にテレながらボソボソと喋るのが印象的だった。何か、弱みでもあるのかとも思った。

全国で、噴出した学園闘争の背景には、社会における大学生の質的变化の進行があり、それが大きな要因だった。もう社会の中でのエリートではありえず、単なる知的労働者の量産過程を歩むに過ぎない授業内容の中で、教授・教官たちがもう滅びているはずの特権意識や、旧来のインテリゲンチヤの顔をしていることに対する、学生の不信と軽蔑感があった。特に富大は、戦後誕生した二期校の大学で、設備などがまだ不十分で、私が見てもこれが大学かと思えるほどだった。

HT君と父上のこと

いつものように訪ねた富大「社学同」の拠点の薬学部校舎で、みんなと談笑した後、大学近くの店

に食料の買出しに行ってきたら、部屋にHT君がいないのだ。そのかわりに白髪の初老の人がいた。HT君の父上である。家に滅多に帰らず、学生運動を続けるHT君を心配し、訪ねて来たのだ。HT君といえば、窓から逃げ出したらしい。

その場には、TTさんやT君ら、何人かいた。父上は、土産がわりに買ってきたという饅頭を配りながら、HT君のことを話された。HT君が学生運動をやっていることに対しては、親の立場や元教師の立場から批判がましいことを言うのではない。ただ、夕食時などに、ビールなどを飲みながら、父親の自分に対して、当てつけや批判がましいことは言わないでほしいということだった。(父上は、酒は嗜まない方だった。)また、友人から金銭を借りるなど、ルーズな生活態度に対して嘆いておられた。そして、一度家に帰って来るようにと伝えて欲しいと言われた。

私が感じた父上の印象は、「誠実で苦学して、教師に成られた方なのだな。」というようなものだった。退職しても、学問を捨てずに書物を友とする生活(ここへ来る前に師範学校時代から通った今の富大図書館に寄って、調べ物をして来たときと静かに話された時、私は微かに感動さえ覚えた)を静かに送っている、という感じだった。しかしながら、全国学園闘争・全共闘運動で問われた、「大学とは？知識を得るとは何か？」・「インテリゲンチヤーという存在とは？」といった問いなどは、理解出来ない。ましてや、10・8羽田闘争以降の三派全学連や新左翼の運動が切り開いた地平などは、ほとんど理解不可能に近いことなのだろうと思った。

しばらくして、HT君が父上がいないのを見計らって戻ってきた。みんなが、父上のことも少し考えてやれやとか、家の関係を上手くやれやとか言った。T君が、「1ヶ月前に家に帰ったけど、何とも無かった。親父もあんまり言わなかった。」と言ったことに対して、誰かが、「家のことは上手くやれや」と言ったら、HT君の怒りが爆発した。「みんな、饅頭で買収されたがやろう。なんで、みんなから、家のことや父のことをとやかく言われなければならんのか」と。

今度は、HT君から、家のことや父のことを聞くことになる。HT君に言わせると、父はもう教職を退いているのに、HT君が学生運動をやっていることに対して、「教え子に顔向けが出来ない」などと、いつまでも教師の顔をしていることが偽善的だということだった。「もう教師を辞めたがやし、オレが学生運動をやっていることが、あの人の立場とどんな関係があるのか。いつもそうなんやから」など。HT君が、父上のことを話す時と、母上のことを話す時とは違った感情を見せ、余人には伺い知ることが出来ない父と子の心の確執があったことを伺わせた。

とにかく、この時のHT君の怒りはすさまじく、こんなにも感情をむき出しにすることがあるのかと、私を驚かせた。

69年秋決戦と富大「社会学同」・「ブント赤軍派」・HT君のこと

68年の秋に、まがりなりにも結成・発足した砺波地区反戦青委は、69年4月に4・28沖縄闘争へ向けて政治集会を開催した。G君の尽力のおかげで、かなりの参加者を集め、成功した。それをふまえて、6・15安保闘争への政治集会の開催に向けた活動を開始するのだが、それはそれとして、「戦旗」

は他のセクトの政治機関紙と違い、面白い政治機関紙だった。連合ブントらしく、各派の主張が入り乱れているのだ。例えば、プロレタリア階級については、階級として現在存在している階級を言うのか、または、革命にむけて形成されるべきものなのかといった議論があった。いわゆる「階級形成論」である。後の叛旗派の三上氏にいわせると、不毛の論議だったそうだが、私にはいろいろ考えさせられて、面白かった。何よりも、「戦旗」紙上で一番注目していたのは、コラム「三摩地区から」？の発言であった。後の叛旗派である。

後に叛旗派を結成する神津氏・三上氏の論旨は、「共同性」や、「集団」組織における「かくめい」で、レーニン型「党一大衆」の構造の枠組みを止揚するというものだった。(叛旗派とは、反前衛主義、自立主義、共同幻想論を政治党派として自己表現したものだが、すでに、60年安保闘争で、「擬制の終焉」・反前衛・自立を主張して日共・革共同と対立し、思想的に闘った吉本隆明がいた。)

HT君は吉本隆明(よしもとりゅうめい)を知っているか、吉本の「擬制の終焉」のなかの「“パルタイ”とは何か」が面白いぞ、読んでみろとか、60年安保闘争の過程や敗退後に書かれた政治論文で、革共同のことをボロクソに批判しているぞと言っていた。(多くの「新左翼」的な若者は、畏敬と神秘的な思いをこめて、吉本隆明を「よしもとたかあき」とは言わず、「よしもとりゅうめい」と言っていた。)

私は、吉本隆明のことは、新左翼を支持している詩人としてしか知らなかった。詩も思想・文学論も、まともには読んだことはなかった。さっそく書店で、「擬制の終焉」を買って読んでみた。第一部の政治論文は、あまり面白いとは思わなかったが、「現代学生論—精神の闇屋の特権を」は、吉本隆明の人となりが見えて、思わず唸った。そして、引き込まれるように読んだのは、第二部からの文学論である。特に、「小林秀雄—その方法」・「歎異鈔に就いて」・「ラムボオ若しくはカール・マルクスの方法についての諸註」については、文学・批評の世界とはこのような意識の世界なのかと興奮した。

私は、これ以来、「定本詩集」の「固有時との対話」・「転位のための十篇」などを読み、ますます吉本思想に惹かれてゆくのだが、HT君は、「思想の自立的拠点」・「共同幻想論」までだと思う。(はたしてHT君が読んだかは疑わしいが、とにかく彼の議論や話の中には、よく出てきた。)また、運動からの離脱後は、完全に吉本の思想や著作からは離れ、町会議員をやっているころは、吉本は嫌いだと言ってはばからなかった。その理由は、おそらく、HT君の運動からの離脱の仕方とその後の町会議員としての〈政治〉のありようが、吉本が批判してやまなかった日本の知識人の負性、「若い時は反体制を気取り、それなりの年齢になると体制内に滑りこむ」から、逃れなかったことにあるのだろう。それと、70年安保闘争後の吉本が、自己の思想を大きく変化させて行き、「書物の解体学」・「ハイ・イメージ論」などの著作で、80年代の超資本主義社会を吉本なりの方法・思想で評価した時、HT君は、吉本はうまく時代の波に乗りやがったと感じ、吉本に対して嫉妬と妬みの感情があったのではないか。とにかく、私が吉本の話をする、露骨にイヤな顔をするのがおかしかった。

赤軍派について

断っておくが、ここでの赤軍派とは、69年の11月決戦・前段階武装蜂起をめざした「ブント」内から離脱したグループとしての「赤軍派」であり、HT君が富大で結成した「赤軍派」のことである。

私が始めて「赤軍派」のことを知ったのは、7月の終わり頃、まだ封鎖中の大学内の教室で、HT君から一向健「過渡期世界論」・「前段階蜂起論」の話聞いた時だ。まず、11月決戦で、銃器を持って戦うといった主張をするグループが、ブント内にいることに驚かされた。また、私たちの砺波地区反戦青委の状況とあまりにも違うので、言葉を失いかけた。「状況は、ここまで進んでいるのか」と、感じた。HT君は、11月決戦の銃器を使用した闘争・「武装蜂起」に参加するようなことを言ったような気がする。その後、まさか富大で、「赤軍派」や、その大衆組織「全国革命戦線」を組織・結成するとは思わなかった。

HT君と富大「赤軍派」については、私との連絡・接触を一切絶つたので、詳しいことは知らないが、それは、富大「社学同」の何人かのメンバーで結成して出発した(K君は、参加していない)ようなものであった。結成集会は11月で、「武装蜂起」の主力部隊が、大菩薩峠で逮捕された事件後だったと思う。聞いた話だから、間違っているかもしれない。

結成集会の会場は、富大構内ではなかったようだ。関西から赤軍派の幹部を招き、開催されたが、会場(「2・27全北陸赤軍派集会」)にやってきたのは、心情的に赤軍派に期待を寄せる富大学生?ではなく、富山県警の公安の幹部たちだった。誰が結成集会の挨拶をするかで協議した(権力・警察に顔が知られる)が、HT君がやるしかなかった。「共産主義者同盟赤軍派及び全国革命戦線を代表し、ここに挨拶を行います。」と言った。会場には、K君、HNさんらが来られたと聞く。このように、結成集会は異様な雰囲気で行った。

こうして、とにかく富大での「共産同赤軍派」として活動を始めるのだが、何をなしえたか?何もしえなかった。(赤軍派の結成・運動方針は、11月決戦において米軍から奪った小銃で武装し、決死隊が首相官邸に殴りこみをかけ、臨時革命政府樹立を宣言するという凄まじいものだった。)現実には、大菩薩峠で「武装蜂起」の主力部隊が逮捕され、組織が壊滅する中で、自分たちに武器があるわけではないし、そもそも、武器・銃器の取り扱いなど誰も知らないではないか。言葉だけの運動でしかなかった。HT君は、24時間公安の刑事が張り付き、下宿を出た時から、銭湯に行く時も、実家に戻る時さえも、尾行が付くありさまであった。

そんな中で唯一出来たことは、HT君が関西から持ち帰った赤軍派のポスター「前段階武装蜂起—世界革命戦争に勝利せよ!」を、富山・高岡市内にべたべたと貼りまくったことだけだった。それはそれで愉快的な風景だったが、メンバーが公安の監視下では、赤軍派の闘争方針の蜂起に向けた軍事訓練など、行えるわけはなかった。そして、何よりも、赤軍派の69年秋の蜂起敗北後の総括としての「国際根拠地論」が出され、「よど号ハイジャック」事件が起きた後の状況では、富大での赤軍派のセクトとしての求心力は無くなったと思う。また、組織の指導者のHT君にしても同じだったと思う。

その理由の一つには、大菩薩峠事件以降、一向健議長を始め、赤軍派幹部らがほとんど逮捕されたり、また、「よど号ハイジャック」事件で指導的立場の人たちが国外逃亡的に北朝鮮に行ったことで、党組織が機能しなくなったことがある。二つ目の理由としては、権力・警察が、赤軍派の軍事部門のみならず、大衆公然部門組織にまで、あらゆる理由を付けて徹底した逮捕・弾圧を行ったことである。こういう中で、HT君らの組織した、富大の学生サークルでしかない赤軍派が解体するのは、必然的であった。そのような状況の中で、HT君と共に赤軍派を結成したT君は、赤軍派や「ブント」に見切りを

つけ、「社会主義青年同盟解放派」に移行する。「ブント」は、69年11・17蒲田闘争以降、これからの闘争方針や運動の総括をめぐって対立し、大きく4つのグループに分裂していった。「ブント-社学同」の緩いシンパに過ぎない私は、なぜ「ブント」が分裂していくのか、ほとんど理解出来なかった。その意味や理由が分かるようになったのは、YYさんが69年暮れごろから頻繁に富山を訪れるようになってからである。そこで、YYさんから、RG(ローテ・ゲバルト＝「共産主義突撃隊」)の存在を知る。(この軍事秘密組織は、69年の4・28沖縄闘争のなかで結成されたらしい。RGとは、「赤い暴力」といった意味らしい。)

話を「よど号ハイジャック」事件のことに戻すが、HT君ら「富大社学同」のみんなは、ハイジャックの行為には喝采を送っても、「北朝鮮に行って何になるのだ」・「武装してまた国内に戻ってくるなんて、そんな事が出来ると思っているのか」・「金日成に頭を撫でられて、それで終わりさ」など、否定的な意見ばかりだった。私も同じ感じだった。これで、赤軍派は終わりだと思っていた。

HT君が、70年2月27日の富山での「全北陸赤軍派集会」へ向けて書いたと言われているビラの見出し(「雪にとざされた北陸の地に、春は赤軍を携えてやってきた」)は、HT君らしい感性が光る文面だが、なかなかの名文らしく、左翼雑誌や単行本など赤軍派に関する記事の中に出てくるのには驚いた(雑誌「流動80年4月号 ドキュメント/連合赤軍事件 喪われた〈革命〉」)。特に驚いたのは、07年9月21日発行の講談社のコミック版「レッド・1」の78Pに、「そういえば例の赤色軍が富山にまで来たそうだよ。この前イトコが富山大でビラをもらったって。」のセリフに続く次のコマに、HT君が書いたと言われるビラが描かれていた。誰か当時のビラを保存している人がいるのだ。(「春よこい 春よこい 歩き始めた ミヨちゃんがー」)

富大での「赤軍派」解体以降の事柄について

名前は、YYさんだと思う。記憶は、定かではない。富大での「社学同」の創立者である。大学内の文学サークルから吉本隆明の文学論・政治思想を踏まえつつ、反革共同・反マル学の立場から関西の「ブント」に接触し、TTさんらと富大に「社学同」を結成する。YYさんは、大学卒業後は教職に就くはずだったが、10・8羽田闘争以降の時代がそれを許さず、一度も教壇に立つこと無く、「職業革命家」の道を歩む。69年11月後ころから「ブント」の分裂が始まる中で、「関西ブント」(革命戦争派)に属し、「RG」の活動に就かれたらしい。詳しくは知らない。(「RG」は、「秘密の集中・任務の分散」が徹底していて、未だに左翼系の雑誌・出版物でも全体像が明らかになることは無い。YYさんの話しから推測すると、「関西ブント」グループ内の「神奈川左派」に属していたのではないかと?)

その後の消息としては、2年ぐらいて、新聞で逮捕されたことを知った。80年の初め頃だと思うが、街で偶然TTさんに会った時に、YYさんのその後の消息を知る。逮捕されたが、警察には完全黙秘を貫き通し、そのため保釈は認められず、10年あまり権力に拘束されることになった。また逮捕される前に富山に帰り、TTさんに会っているが、「オレたちのことが権力に漏れているらしい」と、逮捕されるのを覚悟し、身辺を整理するために帰ってきたらしい。

HT君の逮捕について

HT君らが大学前の交番に火炎瓶を投げこんだのは、いつの頃だったろうか。今となっては記憶が曖昧で、よく思い出せない。70年の終わりのころか、どんな経緯で交番に火炎瓶を投げるようになったかは、よく知らない。事件そのものは、火炎瓶を交番に投げた後、二人は別々に逃走し、二三日後に逮捕といったものだが、私はその事件で彼らが逮捕されたことを新聞で知り、すぐに富大での救対の活動をやっておられたHNさんに会いに行き、事件の経過を聞き、HT君の保釈金のカンパを申し立てた。一ヶ月ぐらいして、保釈で拘置所からでてきた。私が、なぜ今、この時期に富山で火炎瓶を投げたのだ？そんなのは武装闘争でも、武装蜂起でもなんでもないんじゃないか？と聞いたが、HT君は笑って答えてくれなかった。HNさんら関係者の話しを総合して考えると、大学内での中核派らとの党派闘争のいろんな絡みの行動らしい。(火炎瓶を投げるといった行為や闘争には、驚きはしなかった。ブント各派は、「軍事」を党組織・運動の問題とし、武装闘争を主張していた。爆弾や銃を使用した権力・警察機動隊との階級闘争が開始されるのは、時間の問題と感じられた。何よりも、新左翼各派・支持者には、なにがなんでも機動隊の壁を突破したいといった思いがあった。)

HT君らが火炎瓶を投げた事件で起訴された罪状は何であったか覚えていないが、放火の罪状ではなかったと思う。執行猶予が付いた判決だった。放火の罪の判決だったら、十年ぐらいの実刑になるところであった。とにかく、保釈後は、YYさんらと「RG」の活動にむけた行動を開始するのだが。富大「社学同」の残存メンバー？の何人かの中には、HT君やTTさんもいた。YYさんから、関西ブント「RG」についてのオルグがあり、学習会でYYさんが席を外したとき、HT君に、「富山の地元や大学では武装闘争は出来んのではないか。もう一度大学でサークル・学習会から始めたほうがいいのではないか」と聞いてみたが、HT君は即座に、「それは出来ん」と言った。

私に、革命戦争派と言われる関西ブント「RG」などのセクトの思想や闘争方針を批判できる、明確な思想があったわけではない。ただ何となく、「新左翼」を「新左翼」たらしめている質みたいものというか、10・8羽田闘争や全国学園闘争が切り開いた地平とは違って来たのではないか。今の状況を突破する思想や闘争方針しては分かるのだが、何か気持ちとしては、スツキリと、それは正しい、行け！とは言えない複雑な心境だった。とにかく、富山・砺波の地において、全国の状況や闘争の水位がまるっきり分からないのでは、どうしようもなかった。それでも細々ながら、HT君とは会うことも、連絡することもできた。そんな中で、71年秋、革マル派を除く新左翼各派が全国動員をかけた三里塚空港開港阻止に向けた闘争(「東峰十字路戦闘」)に、「富大社学同」からも何人か参加した。HT君も三里塚へ行くと言う。私も行きたかったが、今すぐ三里塚へ行くと言われても、勤め人の悲しさで、仕事をほっぽり出して無断欠勤にしてしまうと、会社内で後々まずいことになるので、行くにも行けなかった。

HT君ら「富大社学同」の何人かの人たちの三里塚への出発は、I君の下宿先のアパートでTTさんらと見送った。警察・公安の眼があるので、富山駅からではなく、違う駅から列車に乗り込み、東京へ行くのだと言う。私は帰りのバス代を残し、財布に有る全部の金銭を渡し、無事に帰ってこいよと言っ

た。それが、HT君に会えた最後になった。その後、HT君とは、会うことも連絡も出来なかった。どうも三里塚闘争での「東峰十字路戦闘」後、新左翼運動から離脱したらしい。まだ、富大闘争や70年安保闘争の余韻が残る富大構内で、赤ヘルの学生らが、古タイヤを燃やすなどして氣勢をあげたりする事件があったが、人の話ではHT君は参加していないとのことだった。

71年の暮れ頃だと思うが、HT君についての噂を聞く。「HTに会う時は、気をつけろ。赤軍派がHTに接触を図って、動き回っている。警察・公安も監視して動いている。」72年の2月に、「連合赤軍」の浅間山荘銃撃戦が起こる3、4ヶ月前のことである。その後だと思うが、記憶が極めて曖昧で正確には思い出せないが、HNさんから聞いた話だが、学内でHT君の新左翼運動からの離脱声明「いつのまにか季節は、変わり 私には、樹の緑が眼に痛い…」(ママ)のビラが出される。このころ、HT君に会えただろうか、よく思い出させない。「大学は、卒業するつもりだ。その後は、大学院に行く」と彼が言うので、私が、「難しいのではないのか。本当に行けるのか」と聞くと、「そんなことはない。行けるところに行く」と答えたというような会話を、HNさん宅で交わした記憶があるが、いつのころだろうか。またはこの話は、HNさんから聞いた話かもしれない。

その後について

HT君は、卒業後、〇〇大学の大学院に行き、73年の初めには、完全に連絡や接触は絶えた。

話を少し戻すと、私といえば、G君らと結成した砺波地区反戦青年委員会は69年の暮れには解体していたし、その後、細々と、HT君ら「ブント-社学同」のグループの付き合いの中で、かろうじて自己の左翼性を保持しようとあがいていた。そのような中で、HNさんの家にお邪魔することが多くなった。まったくのお邪魔虫で、HNさんと奥さんには、迷惑だったろうが、辛抱よく付き合ってもらって、ありがたかった。このような状況の中で、吉本隆明の政治思想論・文学論などを本格的に読みはじめる。そして、「ブント叛旗派」の政治機関紙「叛旗」を購読することにより、「連合赤軍事件」以降の社会の状況に対し、何とか自己の左翼性・思想性を獲得したいと考えていた。

73年と74年の二年間、富山の地を離れることになった。私に会社が他所の地への転勤命令を出したのだ。理由は分からない。おそらく、レッドパージに近いものだろう。このことは、資本対労働者といった現実の関係の中で、それなりの身のこなしかただった。その頃、上京したHT君は、東京の地で何を見ていたろうか。まだ「革命戦争派」などの爆弾闘争があり、革マル派と中核派・革労協との内ゲバ殺人事件などがあつたはずである。

この頃、HT君は何を考え、何を思っていたのか、何時かは聞こうと思っていたが、聞く機会が無いままに亡くなってしまった。

その後のその後

75年春に富山の地に帰ってきて、HNさんの家に時おりお邪魔して話をするなどして、「新左翼運動」の情報を聞くなどしていたが、HT君が富山の地に帰り、自宅で学習塾を開き、生計を立てていることは知らなかった。ひよんなことから、HT君の学習塾の生徒募集案内の新聞チラシを見て、さっそく自宅に電話したのだが、初めに母上が電話に出られ、どうも私のことは知っているらしく、あまり歓迎しない話し振りには参ってしまった。とにかく、HT君に代わってくれるように頼み、HT君と話すことになった。それは、私の予想とは反した展開となった。HT君は怒ったように、また、嘆願するように、「なぜ電話してくるのだ。迷惑だ。会いたくない。イダのことは嫌いだ」といった内容だったと思う。それに対して私は、「HTのことは、迷惑だとは思ってはいない。HTがオレのことを迷惑だと思えば、会わないし、連絡もしない」と言って電話を切った。それからは、HT君のことは気にはしていたが、同じ町に住みながら、ほとんど会うことはなく、また、時として顔が会っても、言葉を交わすことは無かった。

その後、何年かして、HT君は、町議会選挙に立候補し、議員になり、公職の身分となったので、公に会うのはまずい雰囲気となったので、議員としてのHT君のことはほとんど知らない。町議会や町会議員のなかでのHT君は、どのような立場でいたのであろうか。いろいろな人からの話からすると、議員の間では、あきらかに孤立していたと思う。〇〇地区からの保守系無所属(自民)の議員として出馬していても、議員活動の立ち振る舞いから「新左翼」的な意識を、捨てきれなかったのだと思う。(なお、HT君の保守系無所属(自民)としての町会議員出馬に対し、私からの批判と私の思想的現在位置を明らかにした手紙「有効性の論理と可能性の論理」を出したことを明らかにしておく。)

絶交状態が何年か続き、話す機会が無かったが、文苑堂の本屋などで時々、顔を合わすことがあった。「イダ、最近どんな本を読んでいる？」と聞いてくるので、私も、「オレか。思潮社から出ている伊東静雄を読んでいる。読んでいるといえば、廣松渉の本も読んでいる。難解な言葉が出てくるので読みにくいけど、面白い。それに、吉本は今でも読み続けている。」と言うと、それに対して、HT君は眼を輝かせて、最近読んだいろんな小説の筋書きと作家の裏話を交えて話してくれた。

「HTは、いつまでも文学青年の貌を捨てられないのだな」という感じだった。そして、会ってもめったに当時の政治・運動の話は、HT君からすることはなかったが、時折うめくように、「あの時、赤軍派が大菩薩峠で捕まらなかったら... 11月の武装蜂起が成功していたら...」と話す姿は、痛々しかった。あの当時のことは遠い過去のことでもう忘れた、話したくないと言っていたが、本当の胸の内はどうだったろうか。ある時の同級会でのことだが、私がいつまでも当時の政治や思想体験を捨てきれなくて、いつまでもブツブツ言っているのが面白くなかったらしく、私のことを冷やかすようなことを彼が言ったのに対して、私が、「政治・思想運動をやったことは、なにも恥ずべきことではない。オレはHTと違い、頭が悪いから、反省も後悔もしていない」と言い返すと、それに対して少し困った顔をしながら、顔をクシャクシャにして喜んでいたので、印象に残っている。

HT君の死について

HT君は04年9月9日、入院先の病院で、55歳で亡くなった。

HT君の死は、新聞で知った。日頃の付き合いはほとんど無いので、まさか、入院しているとは思わなかった。最後に言葉を交わしたのは、同年3月の、SG町とTN市との合併についての公聴会でのこと。町会議員として来ていたHT君に帰り際に声をかけて、少し話しをしたのが、最後になってしまった。いつものように一方的に話し、私に話す機会を与えずに、言いたいことを言い終わると、「イダ、これで帰るわ」と言って、姿を消した。「いつもこれなんだから。しかし、いやに顔色が悪いな。体調が悪いのかな」と思ったりした。

家に弔問に訪れると、日頃付き合いがある同級生が多く来ていた。その中でHT君は、静かに眠っていて、顔はまだ赤味をおび、とても死んでいるとは思えなかった。姉上にあたる遺族や喪主の方に、「大学時代のことを知る者です」と言い、お悔やみの言葉を述べた。

「HTよ、畳の上で死ねて良かったではないか。しかし、あまりにも早すぎる死ではないか。これでは、残された者たちはかなわない。HTよ、見るべきものはすべて見た、とは言わせない。まだ見るべきことは、たくさんあったはずだ。」

「HTよ、君はどう考えているか知らないが、今思えば、あの夢の中の出来事のようにすら思える時代を駆け抜けるきっかけを与えてくれて、ありがたかった。私は、少しも後悔していない(それなりの覚悟を決めて始めたのだから)。むしろ誇りにさえしている。」

あとがきにならぬあとがき

「それは、喫茶店から始まった Ⅲ」は、HT君の死をきっかけにして書かれた「それは、喫茶店から始まった」の第三部に当たるものである。「Ⅰ」は、HT君・K君と、砺波地区反戦委員会の結成の経緯について。「Ⅱ」は、K君の死を知り、私を知るK君ら「富大社学同」と富大闘争及び、HNさんをめぐるもの。「Ⅲ」は、「Ⅰ」と「Ⅱ」をふまえ、ごく私的に関わった「富大社学同」の人たちと70年安保闘争と「ブント」のことだ。

何しろ40年前の出来事で、多くの事実誤認や記憶違いがあるかもしれないが、ありもしないことを書いたつもりはない。

2008年7月 記

「アンラーニングプロジェクト09」(09/5月—9月)案内

グローバル経済の破綻は 私たちの失敗ではない —「今のようにない生」の創造への〈鍵〉をさぐる—

破綻しつつあるグローバル資本主義は、私たちの生を保障しない。ならば、資本主義を具体的に見限ろう。

「アンラーニングプロジェクト09」は、「今のようにない生」を創造するための〈鍵〉をさぐることを、試みる。

オープニング:5月10日(日)

提起: 社会運動の現在的な課題

—「今のようにない生」の創造への〈^{キーワード}鍵〉をさぐる

第2回 6月14日(日)

報告: 『自由と生存のメーデー09』

+『アブレ者の路上会合in富山09』

第3回 7月12日(日)

報告: 全ての者に無条件で^{ベーシックインカム}基本所得を!

—山森亮『ベーシックインカム入門』(「光文社新書」)を読む

第4回 8月2日(日)

招待: グローバル経済の破綻は、私たちの失敗ではない

—『今のようにない生』の創造への〈鍵〉をさぐる

話し手:小倉利丸(富山大)

第5回 9月13日(日)

報告: まち／むらが編み上げる『モラルエコノミー』の再生

—ミニ・シンポ『まちの困民・むらの困民08』報告書を読む

* いずれも、会場はサンフォルテ3階学習室、
時間はPM1:30~4:30です。

2009年4月

生・労働・運動ネット

富山市神通町 3 - 5 - 3 (神通大橋東詰手前左)

E-mail: jammers@net-jammers.net

TEL 076-441-7843 FAX 076-444-6093